『柳生の芸能』（神戸金七編）

校訂　赤羽根　龍　夫
　　赤羽根　大　介
（新陰流稽古「沈龍の会」指導員）

神戸（かんべ）金七編『柳生の芸能』（昭和四十八年）は、『月の抄と尾張柳生』（平成十六年）と共に、柳生新陰流を学び研究するために貴重な文献である。しかし未定稿の私家版で、入手することも閲覧することも困難である。さらに神戸先生の癖（くせ）のある字体が充分に解読されておらず、誤りが多く読み通すことは不可能である。そこで明らかな誤りを直し、文章を整え、読みやすくした。校訂は、赤羽根龍夫が一般的なルールを決め、それにしたがって赤羽根大介が全文を書き写し、その作業で生まれた疑問を二人で検討するという手順で行った。

しかし初校の段階で、神戸金七から柳生新陰流第十二世として「唯授一人大事」の印可を受けている春風館道場の加藤伊三男（いさお）館長から、直筆の原稿を拝借することが出来たので、改めて全文を見直すことにした。したがってこの校訂本は昭和四十八年版の改訂というより、直筆原稿による全く新しいものとなった。（　）は原文のもの、〔　〕は校訂者が付け加えたものである。

神戸金七は明治二十七年一月十八日、名古屋市梅園町に生まれる。旧姓は服部氏。八歳の時、尾張柳生十代宗家・柳生厳周の門に入り、若くして高弟となる。新陰流以外にも小野派一刀流剣術、風伝流槍術、尾張貫流槍術、剣道、天神真楊流柔術など各種の武術を修め、それぞれに卓越した才能を示した。厳周伝（げんしゅうでん）新陰流の十一世、尾張貫流（かんりゅう）七世継承者となる。

現名古屋工業大学に学び、愛知県庁建築課に勤務する。戦後、名古屋市守山に春風館道場を設立。道場は昭和三十四年に宗円町に移転し現在に至る。昭和五十五年四月没。享年八十七歳。

神戸金七（87才）

明治以降、軍隊強化のために明治政府が採用した兵式体操が小学校教育を通して全国に広まった結果、日本の体育界のみならず伝統武術においてもヨーロッパ近代の身体操作の影響を大きく受ける中で、神戸金七が伝える厳周伝新陰流は、江戸武士が遺ったままの身体操作を現代に伝えている数少ない伝統武術である。

現代の日本語から「腹が据わっている」「胸が痛む」「足が地に着いていない」「腰抜け」「歯に衣着せぬ」などの「身体語」があまり使われなくなっているのを見ても明らかなように、「日本的身体」が失われようとしている。そのことは日本人の心にも大きな影響を与えずにはおかない。ヨーロッパ近代の身体操作が日本人には合わないのではないかという反省がなされている現代、日本人の身体と心を取り戻すために、江戸時代の日本人の身体操作を伝える厳周伝新陰流を学ぶ意義は大きい。

以上のような視点から、校訂者の一人・赤羽根龍夫は『江戸武士の身体操作　柳生新陰流を学ぶ』（スキージャーナル社、二〇〇七年五月）を上梓している。同書には「三学円の太刀」の古伝、江戸使い、尾張使い、「燕　飛」「九箇の太刀」「天狗抄」だけでなく、これまで失伝されたと信じられてきた「七太刀」、極意秘伝とされる「奥義の太刀」など、本書で取り扱われている柳生新陰流の本伝すべての使い方が、イラストまたは演武写真で紹介されている。本書でも一部、紹介しておいた。

柳生新陰流は、次の四十一本の勢法によって成り立っている。

「燕飛」六本
燕飛　猿廻　山陰　月影　浦波　浮舟
「七太刀」七本
踞地獅子　天関　容髪　小手截り　地軸　明月の風　燕鴈
「三学円の太刀」五本
一刀両段　斬釘截鉄　半開半向　右旋左転　長短一味
「九箇の太刀」九本
必勝　逆風　十太刀　和卜　捷径　小詰　大詰　八重垣　村雲
「天狗抄」八本
花車　明身　善待　手引　乱剣　二刀　二刀打物　二人懸り
「奥義の太刀」六本
添截乱截　無二剣　活人剣　向上　極意　神妙剣

以上が柳生新陰流の全ての勢法であるが、この外、江戸時代後期に尾張柳生の補佐役・長岡桃嶺が鍛錬型として「試合勢法」を製作しており、『柳生の芸能』でも付録として取り上げられているが、それは上泉伊勢守、柳生宗厳以来の「本伝」に対して「外伝」といわれるもので、本校訂においては「本伝」のみを取り上げることとする。本書は『江戸武士の身体操作　柳生新陰流を学ぶ』同様、加藤館長の御指導によるものである。

加藤館長（右）

はしがき

柳生の芸能を語る前に、私が若年の頃から師事した厳周子の談話を思い出すままに記すことにする。

師曰く。柳生流の由来は、貞享二年〔一六八五年〕の秋、如流斎〔柳生利方・連也の兄〕が兵助〔厳延〕に与えし書伝〔『打太刀目録』〕により明らかな通り、流祖石舟斎、無刀取りを工夫し、上泉子より、以後はばかるところなく柳生流と称すべし、と言われ、それ以来、柳生流といい、京・大阪・伏見へ出で数々の弟子を取り立てしに始まると伝えられている。

師曰く。江戸と尾張との関係は、江戸は本家、尾張は分家ということになっている。また面白いことに、一般には江戸と尾張とは不和にて、音信もなきように伝えられているが、それは表向きのことで、実はたがいに相寄り相たすけて明治の維新まで続いたことである。

まず流祖石舟斎時代には、打太刀・石舟斎、使太刀・宗矩により種々の刀法を示し、続いて宗矩・打太刀、利厳・使太刀、石舟斎これを一々直し、朝錬夕鍛、利厳十年の修行は、石舟斎はもとより叔父宗矩にも数々の指導を受けたものと思われる。「不動本心集」〔『月の抄と尾張柳生』一一八頁〕は〔「には」の「に」を削除〕宗矩の書として今に伝えられている。

次に十兵衛三厳は十九歳より二十五歳まで利厳により修行、ついに宗矩をしのぐ名剣士となった。この間の事情は三厳あらわす処の『月の抄』、並びに「新陰流三十五条習の書」等にも利厳の意志を随処に見出すことが出来る。

尾張の麒麟児連也・幼名七郎兵衛もまた十兵衛・幼名七郎の教えを七才より十二才迄受けたといわれている。連也により尾張に今も伝わる十兵衛得意「片目外しの青岸」、「柳生流カラ竹割り霞太刀」、沢庵禅師の意を含む「水上の胡慮子〔ひょうたん〕を打つ。捺着〔手で押せば〕即ち転ず」〔『不動智神妙録』〕、「当る拍子の一旋切打」即ち伊勢守の「刹那先打」に対し「刹那同時打一拍子」の刀法を伝え、連也子、更に工夫を加え、変化百数十本の業を遺している。〔上述の江戸と尾張の関係は必ずしも明らかではないので現在研究中〕

師曰く。今日は慶安四年四月五日、六日、上覧兵法使順の話をする。

四月五日

一、燕　飛

一、三　学

一、九　箇

一、小太刀

中段一　雷刀一　下段一　以上三

一、無　刀

中段一　雷刀一　下段一　以上三

一、小太刀

中段一　順逆雷刀二　逆車一　以上四

一、また小太刀

待者一　打崩一　敵変化二　拍子者一　以上五〔四を直す〕

四月六日

一、小太刀

中段一　雷刀一　順逆表裏打二　逆ノ表裏ノ車一

一、無　刀

中段一　雷刀ノ引切一　雷刀ニテ表裏腰ノ払切一　以上三

一、相　寸

中段一　相懸ノ雷刀一　敵変化ノ払切一

敵ヨリ詰懸下段一　逆車ノ引切一　以上五

一、また小太刀

位ヲ取リ相懸ノ雷刀一　拍子モノ一　中段城郭一　以上三

以上は連也自筆による覚え書きであるが、宗冬と連也試合のことは何も書いていないばかりでなく、上覧兵法を済ませた後、宗冬、茂左衛門、連也、一堂に会し、今は亡き兄十兵衛のことども語りあかし、宗冬はその節、隠形隠密摩利支天大秘法を伝えたということである。そのことは延享四丁卯年、茂左衛門孫厳儔子書伝により明らかである。

師曰く。柳生流は尾張にては厳延、江戸にては宗在以後、十兵衛、連也をしのぐ程の名剣士なく、次第に下降の一途をたどり、連也より三代目厳儔時代には高弟・島槙右衛門、本田與兵衛、補佐役・長岡房英等、互いに自流を固執して譲らず、正伝に疑義を生ぜしも、四代目厳春〔尾張柳生六代〕、かねて不開の書として連也より伝わりし包みを開くに及び、中より連也信仰の摩利支天像と、別に「新陰流兵法口伝書」出づるに及び、始めて闇夜に灯を得たる如く、これにより誤りを正し旧に復せしといい伝えられている。

補佐役房英の子房成〔桃嶺〕、出藍の誉れあり、流祖以来の刀法槍法・長刀術抜刀術俶等にいたるまで、ことごとく調査研究し、連也口伝書による刀法を「内伝」とし他のものを「外伝」として今に伝えられている。

江戸においても宗在以後、尾張同様次第に衰退し、加うるに養子相つぎし結果、兵法のことは、殿様目録に署名捺印するのみにて、術伝は高弟等が兵法掛りとして次に署名し、太刀目録伝授の際のみ御書院にて対面後、御稽古所に入り目録伝授の式あり、寛政頃には尾張より柳生厳光、柳生義質等の人々が相談相手として、応援にかけつけしことあり。かくして明治維新をむかえることになるが、〔この点は江戸中期には当てはまるが、江戸後期においては、将軍は江戸柳生宗家から頻繁に稽古を受けていた。赤羽根龍夫著『徳川将軍と柳生新陰流』参照〕しかし幕末においても、広瀬小太夫、渋久藤吾、なかにも木元太郎八は藩随一の使い手といわれた。ほかに佐々木右内、広瀬友治郎、木元太助、水野武之輔、右藤直之丞、北村平太郎等の諸士は佐幕党として共に徳川の流れに沈んだ。

幕末、江戸柳生より出でて、名をなした人に、田中甚助という使い手があった。後、桃井春蔵直正と称し、江戸三道場の一人といわれ、文久三年、講武所教授になっている。この人が伝えた書に「新陰流兵法神形録」がある。江戸柳生幕末兵法の使い方説明書で、文中、広瀬先生、渋久先生、佐々木老先生の名が出てくる。同流を学んだ者には参考となる書である。〔桃井春蔵直正の流儀は普通は鏡新明智流といわれている〕

師曰く。柳生の芸能は形に示す如く、敵が打ち出す太刀に先を越して打つにある。即ち先々である。十兵衛、連也子工夫による「相架け」は、当たる拍子の一旋切打で、即ち同時打を意味する。これは槍についても同じで、前者には相突き、摺突き、かすみ突き、浮沈突き、後者には三寸の返し突き、円相突き等がこれに相当する。

師曰く。没兹味書のなかに、新陰流には下段の太刀を活人剣といい、構え太刀をみな殺人刀という。構えなき処を、いずれもみな活人剣というとあり。この意味は連也子の歌により明らかである。

そのままに息もつかせで勝ちもしつ
はたらかせてもとかくわがもの

即ち、敵を追いすくめて先々と勝つを殺人刀といい、敵を引き出し働かせて勝つを活人剣というのである。

柳生の芸能　目次

〔校訂者解説〕 1
はしがき 3
目　次 5
序 6
形という事 7
太刀目録
十兵衛三厳『月の抄』による太刀目録と
連也厳包による太刀目録との比較 8
元禄以降太刀目録 8
構太刀基本名称 9
勢法使い方基本要語 12
礼　法 13
江戸尾張五箇の身位比較 14
執刀法　付、歩の事 14
中庸五箇の身の事 14
三学円の太刀の解〔長岡桃嶺『新陰流兵法口伝書外伝』による〕 15
時代別勢法使い方〔以下、目次の詳細は校訂者による〕
流祖時代　上泉子、石舟斎子の使い方 16
「三学円の太刀」「九箇の太刀」「七太刀」
江戸時代初期 23
「江戸柳生古目録口伝書による使い方」
「三学円の太刀」「九固の太刀」「天狗抄」「燕飛」
「奥の太刀」「二十七固条截相」
〔「天狗抄」までの本文は寛政六寅年の日付がある
神戸金七の毛筆の柳生古文書の写しと同文〕
尾張如流斎時代
「打太刀目録」〔柳生利方〕 39
原文〔万葉仮名・当校訂本では省く〕
当流新陰流兵法由来〔柳生利方〕 39
燕飛　解説〔長岡桃嶺『新陰流兵法口伝書外伝』による〕 40
「打太刀目録」本文 42
「燕飛」「三学円の太刀」「九箇の太刀」「天狗抄」
尾張連也以降
連也翁校正「太刀目録口伝書」（『新陰流兵法目録』） 58
「三学円の太刀」「九箇」「天狗抄」
「奥義の太刀」「二十七箇条截相」
燕飛　連也翁の使い方 61
連也翁校正「太刀目録口伝書」解説
〔長岡桃嶺『新陰流兵法口伝書外伝』による〕
「三学円の太刀」 64
「九箇の太刀」 69
「天狗抄」 74
「奥義の太刀」 78
「八箇必勝」如流斎目録・連翁目録 81
「二十七ヶ条截相」〔柳生宗厳〕 81

序

当流の兵法は、先師の遺されし左の歌により明らかである。

朝日より夕日もいらぬ陰の流
あらたに巧むまろばしの道

これは、陰流とは日のはいらぬということである。日とはひま、隙間のことである。人みな、敵に勝たんと思うにより、手前が脱けて、かえって敵にその間を打た〔れ〕る。よって敵に勝つことを求めずして、まず手前を全うし、少しも間のなきものになることを第一とする。

「孫子曰く。先ず勝つべからざるをなして、以て敵の勝つべきを待つ。また不敗の地に立ち、而して敵の敗を失わざる。〔孫子は言う。まず誰にも打ち勝つことの出来ない態勢を整えたうえで、敵が誰でも打ち勝てるような態勢になるのを待ち、また味方を不敗の立場において敵の負けるようになる機会を逃さない〕」という意である。

下の句「あらたに巧むまろばしの道」、これが肝要の処で、流祖工夫による「十字勝ち」のことである。

先師の歌に、

十字こそこの一流の大事なれ
魔法に心かけな〔かけるな〕行く末

江戸柳生では丸橋（まろばしと読む）、尾張柳生では転（まろばしと読む）といい、江戸では「二十七ヶ条免許の太刀」、尾張では「八箇必勝印可の太刀」として伝えられている。

元来、伊勢守の兵法は、自己を守ると同時に敵の生命を尊重し、その生を断つことを嫌い、ただその戦闘力を失わしむるを主眼としているので、ここに「転」の一道を工夫し、敵、如何なる処より打ちかかるとも、まずその拳を切ることを練磨する方法を勢法に示し、後世に伝えたものである。

また当流を学ぶ諸士、日常の心得として太祖石舟斎子は左の歌を遺し、後進を教えておられる。

温良や恭謙譲は新陰の
奥意なりけり大事なりけり
兵法は稽古鍛錬常にして
色に出さず隠し慎しめ
兵法の余流をそしるその人は
極意にいたらぬものとこそ知れ
新陰を余流とみなす兵法に
奇妙のあらば習い尋ねん

即ち、新陰の兵法者は常に温良を旨とし、恭謙おのれを持し、日夜、術技の稽古鍛錬工夫を怠ることなく、行住坐臥、深く内に蔵して色に顕わさず、他流の是非を論ずることなく、もしそれ余流の名人上手と呼ばれたる師に遇わば、辞を低くして教えを乞う心持を忘れてはならないと諭されている。

終りに、この流に有縁の諸士、よく先師先輩の教えに従い、兵法者としての人格を養うと共に、外柔内剛、死に直面して恐れざる勇を日常の覚悟として心悟せねばならない。

石舟斎子もその書『没茲味手段口伝書』「五合剣・第一」に、「勇」を掲げ、これがいかに大切なるかを教えておられるのである。

形という事

世俗、武芸の形をみな形といいきたれども、形といえば木や竹にて形ちを作り、雲形、山形、鳥の形ち、獣の形ち、そのほか種々の形ち等の類の如くに聞こえるなり。されども左様に身形を死物に作ることにはあらず、中国『武備誌』にては、これを「勢」と称したり。〔「形」と「形ち」は使い分けている〕

されば この形も勢々変化して勝ちを取る法を習う基本の姿をいうなり。まず「燕飛」は燕の飛ぶ如く浮沈・左右、滞りなく、円転自在なる勢ある故に「燕飛」と名付く。「燕飛」の形といえば、燕の両翼をのべて飛ぶ形ちなり。死物にはあらず。また「一刀両段」の形も「一刀両段」の勢あるが故に「一刀両段」と名付けたるなり。「一刀両段」の形ちにはあらず。〔「斬釘截鉄」も形ちにはあらず〕「斬釘截鉄」の勢いなり。その他すべての形、各々その勢あり、形ちにはあらず。

初学、形の名の義を尋ねんと欲せば、「勢」という字にかえて見るべし。常に形というに従いて義〔本来の意味〕を失う事なかれ。本来、形というは定まりたる形ちなり。勢いというは「運動」の義あり。さてまた形ちは情のあらわれたるものをいい、心に何とかせんと思いたる処、外へあらわれ見えたる処より負けとなるなり。

故に形ちの見えたるを悪しとし、何とも察し測られぬ処を好しとす。もと「兵」は「常形なく常勢なし」〔孫子〕といえり。

当流の先哲もみな「無形」をもって本体とせり。「活人刀」「没茲味〔味がないということ〕手段」すなわち「無形の位」なり。されども、それにては一定したる指針なし。指針なくしては修行困難なるにより、仮に種々勝利の形ちを挙げて勝ちを制する道を顕し示したるなり。

故にこれにて勝負の定理を知り、これにて身体を習わし、これにて「因敵転化〔敵に従って変化する〕」の道を心悟せしむ。

故に手本の勢いなれば手本の形と思うべし。よってまた、これにて勝てということにてはなきなり。それ故に形を死物に作り飾ること悪しく、また情のあらわれたるも悪く、また一つの形にて勝たんと泥むも悪しと知るべし。

形一通り修行鍛錬の上は、試合により勝負の道を究め、自流はもとより、他流の人々とも試合し、打って打たれ、その敗れたる原因をよく会得し、もって切磋琢磨の功を積み、形を忘れて形を遣い、始めて生きた勢を心悟しなければならぬ。

また他流の師といえども、善きは取り悪しきは捨て、ますます向上の技を磨くことはもちろんにして、いたずらに自流のみをよしとする我田引水の弊に陥ることは厳に慎むべきことである。

柳生の藝能

はしがき

柳生の藝能を語る前に、私が若年の頃から、師事した厳周子の談話を、思い出すまゝに、記すことにする。

師曰く柳生流の由来は京章二年の秋、如流斎が、兵卿に送へし書状により明らかなる通り、疏紐石斧斧無刀取りなど大小泉ヨリ以後はゞかる処なく、柳生流と称すべし、といわ

十兵衛三厳「月の抄」による

新陰流兵法面目録

燕飛　猿廻　月陰
山陰　浦波　浮船
切甲　刀捧

三　学

一刀両段　斬釘截鉄
半開半向　右旋左転
長短一味
右の太刀の砕き三ツ宛(ずつ)
これ在り

九　箇

必勝　逆風　十太刀
和卜　睫径　小　詰
大詰　八重垣　村雲

天狗抄太刀数八ツ

花車　明身　善待
手引　乱剣　二具足
打物　二人懸り
極意の太刀数六ツ

連也厳包校正による

太刀の目録なり。如雲斎までは単に目録とし、厳包これに表の字を付し、光義公は面目録としたり。

新陰流兵法表目録

猿廻　山陰
燕飛　月影　浦波
浮舟

右、重々口伝これ在り

三学円太刀

一刀両段　斬釘截鉄
半開半向　右旋左転
〔長短一味〕
右の砕き三宛これ有り。
さりながらよく砕けば則ち無窮

九　箇

必勝　逆風　十太刀
和卜　睫径　小　詰
大詰　八重垣　村雲
右の砕き、重々これ有る也

天狗抄太刀数八ツ

第一花車　第二明身　第三善待
第四手引　第五二具足　第六打物
第七乱剣　第八二人懸り
添截乱截　無二剣

添截乱截　無二剣
活人剣　向　上
極　意　神妙剣

二七ヶ条截相

序上段三ツ 中段三ツ 下段三ツ
破上段三ツ 中段三ツ 下段三ツ
急上段三ツ 中段三ツ 下段三ツ
右急は上中下ともに
何(いず)れも一拍子なり

元禄以降目録

江戸

三　学

一刀両段　斬釘截鉄
半開半向　右旋左転
長短一味

九　箇

必勝　逆風
十太刀　和卜
捷径　小詰
大詰　八重垣
村雲

燕飛

燕飛　猿廻
月陰　山陰
浦波　浮舟

八　箇　活人剣
向　上　極　意
神妙剣

二七ヶ条截相

序上段三 中段三 下段三
破折甲三 刀捧三 打合三
急上段三 中段三 下段三
右急は構えにつきて
一拍子也

尾張

三学円太刀

一刀両段　斬釘截鉄
半開半向　右旋左転
長短一味

九　箇

必勝　逆風
十太刀　和卜
捷径　小詰
大詰　八重垣
村雲

天狗抄

第一　第二
第三　第四
第五　第六

切甲刀捧
天狗抄
花車明身
善待手引
乱剣
奥三本
一、二具足　両手に物を
持つ者の事
一、打物
一、二人懸り
小太刀三本
上段　中段　下段
添截乱截　無二剣
活人剣　向上
極意　神妙剣
一、截相の心持ち二七ヶ条
序
上段三本　中段三本
下段三本
破
折甲三本　刀捧三本
相截三本
急
上段三本　中段三本　下段三本
一、右急の截相、何れも一調子に勝つ

第七　第八
添截乱截　無二剣
八箇　活人剣
向上　極意
神妙剣
二十七箇条截相
序
上段三本　中段三本
下段三本
破
折甲二本一本　刀捧三本
打合四本
急
上段三本　中段三本
下段三本
右急は構えに付而一拍子也
別に太刀目録の始めに
猿廻　山陰
燕飛　月影　浦波
浮舟
を載す

構え太刀の基本名称

上段刀　拳が肩より乳の間。
中段刀　拳が乳より腰の間。
下段刀　腰より以下。
雷刀（らいとう）　頂上〔頭上〕に拳ぐるを雷刀という。
また肩より以上を全て雷刀という。
拳鼎格、霞太刀、撥草の類（たぐい）これなり。
また青岸、城郭の類、これを中段という。
また腰打勢、膝車の類、これを下段という。
また中段直勢は直ぐなるものなり。
拳鼎格（けんていかく）　和俗これを折甲（せっこう）という。額上に左右の手を交え、刀を横にして敵を前少し左にうけるものなり、受け入るものなり。
横雷刀　頂上に刀を横にし、鋒（きっさき）を右になして敵に向かう。拳鼎格順勢の高きものなり。順逆あり、逆は前記折甲のことなり。
霞太刀（かすみ）　刀を右肩上に挙げ、鋒、右背を指す。順逆あり。逆は左肩上に挙げるものなり。刃は天を指す。
撥草勢（はっそうせい）　股を開き、右肩上に刀を挙げるものなり。これもと草を撥（はら）うものなり。刃、斜め上を指す。霞太刀は打ち高きものなり。
執笛勢（しってき）　左手を上にして刀を執り、両拳を右眼の前に挙げ、手もと一尺の内より敵を見る。鋒、左を指し、股を開き、左少し前に敵を受けるものなり。拳鼎格の左太刀なり。逆は右手を上にし、右に敵を受く。順城郭勢の高きものなり。
これ、槍、偃月刀（なぎなた）、短槍、全て突くものに向かい好き構えなり。
深擔勢（しんたん）　左少し前に敵を受く。左を顧み、股を開き、身を伏し、刀を斜め

にし、両拳を右眼の前に上げる。鋒、左上を指し、刃、地に向って翳すものなり。刀を持つこと、屋詹（屋根ののき）のごとし。よって名付ける。これ、槍、偃月刀に向かうとき好き構えなり。拳鼎格、逆城郭勢の高きもの、低き横雷刀の逆、執笛勢の右手を上にしたるもの、これに似たり。

青岸

敵を右少し前に受け、中段、斜刀、鋒は敵の左眼を指す。

城郭勢

これまた青岸の上段なり。敵を右に受け、大いに股を開き、少し前脚を屈し、後脚を伸ばし、頭身少し伏す。斜刀、鋒を敵の左肩に指す。手を伸ばし、手を下ろさず。

よく身を刀中に蔵す間隙なきものなり。城郭に入るがごとし。故に名づける。古来相伝の「五箇」の意なり。身形、今は中段に属す。順逆あり。逆は少し低く中段なり。敵を左に受ける。しかし時ありて右足を前にして右に敵を受けることあり。

腰打勢

和俗これを車勢と云う。敵を左に受け、刀を腰下に執る。鋒をわが右下に指し、股を開き左を顧みて待つものなり。順逆あり。逆は敵を右に受け、鋒をわが左下に指し右を顧みて待つものなり。また前の如く股を開かず進み出づるものも車という。

十太刀

右足を後ろ右に踏み、刀を右腰に執り、鋒を右に指し、刃、敵に向かい、身、半ば向かって待つ。これ十太刀の勢なり。これまた車という。

矮車勢

矮車勢また車なり。はなはだ身を低くして、敵を天に写して見るものなり。あるいは偏跪することもあり。

膝車勢

右に敵を受け、大いに股を開き、柄頭を膝に当て鋒は敵の腰を指して待つものなり。青岸の低く少し逆なるものなり。

獅子の洞入

前記膝車勢のことを江戸柳生では獅子の洞入りの構えという。

一文字

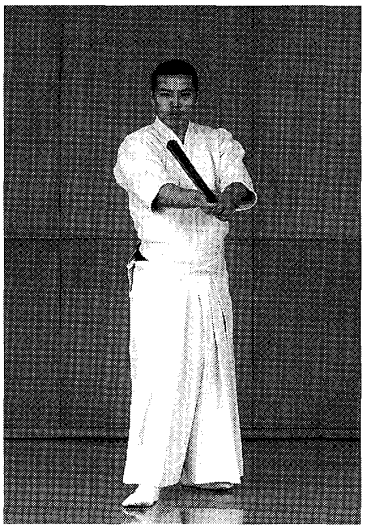
中段直勢のことなり。江戸柳生にていう。これ竪一文字、横一文字あり。

卜伝一の太刀

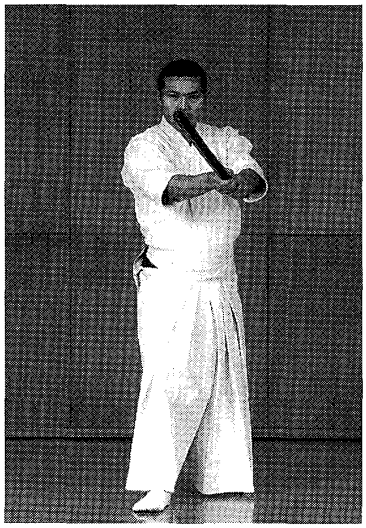
中段直勢、方の積り〔直角のこと〕の構え方なり。

左太刀

左手を上にし右手を下にして刀を執るもの。



青　岸



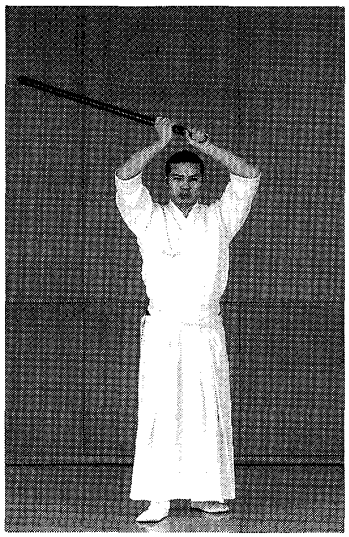
城郭勢

◎本書に収録した演武写真やイラストは『江戸武士の身体操作　柳生新陰流を学ぶ』の再録を含む。勢法は春風館で現在遣われているものであり、必ずしも本書の術伝とは同じではない。〔校訂者〕

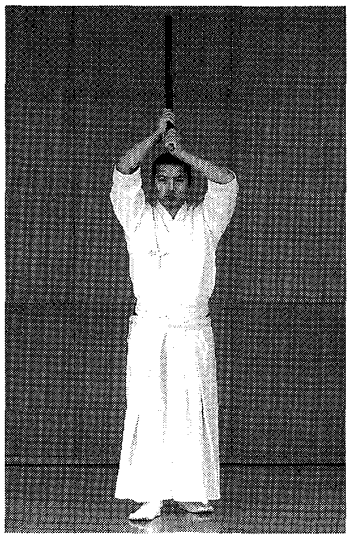
「車の構え」

膝を大きくえます
◎えます：腰を垂直に沈め、
膝のバネを利かせる。

古　伝（本伝）
「沈（ちん）なる身」



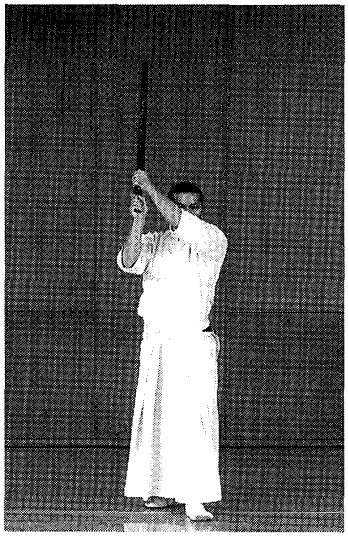
横雷刀



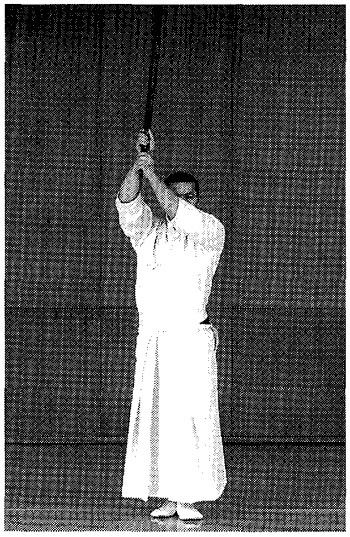
雷　刀

膝をえます

江戸遣（づか）い



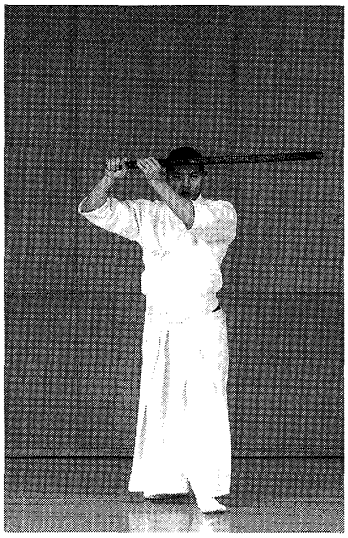
左太刀



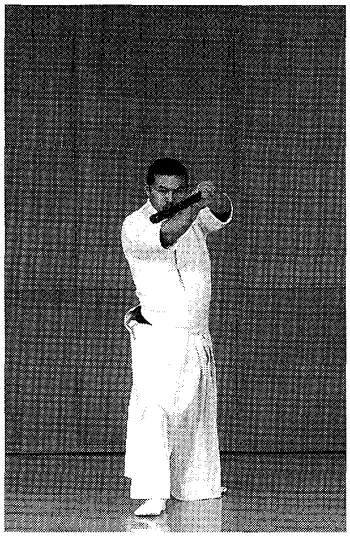
霞太刀

自然に立つ
（膝を伸ばし過ぎない。
わずかにえましている）

尾張遣（づか）い
「直立（つったつ）たる身」



執笛勢



城郭勢（二）

勢法使い方基本要語

相架刀　わが刀を以て敵刀を相架けるもの。これに流し相架けと止め相架けとあり。

刀捧勢　一手、柄を執り、一手、刀背を受け、敵刀を受け上げるもの。その形、刀を捧げるごとし。よって名づける。〔「とうほう」ともいう〕

輪刀運　一旋転輪を作り打つもの。

刀

順逆　順逆は大略、刀を執って立った時、鋒、わが右にあるを順という。左にあるを逆という。

打は右より左に打つを順といい、左より右に打つを逆という。

打ち合いは敵刀をわが左に避け開くを順合しといい、右に避け開くを逆合しという。

表裏　刃の前を表といい、刃の後を裏という。

遠近打　わが近き処を打つ。これを近打という。わが遠き処を打つ。これを遠打という。

竪打横打斜打　上より打ち下ろすもの、これを竪打、あるいは直打という。横より打つ、これを横打という。斜め打って批切る、これを斜打という。或いは刀を斜めにし上より打ち下ろす、これを斜め打またはもじり打という。

批切り　少し斜め打って批切るをいう。

もじり　これ両拳をもじり交え、斜めに打つなり。刀をひるがえして打つものなり。

打　竪打を避し〔以下「外し」とする〕て打つものは青岸より多くこれをなすものなり。左拳、わが任脉〔身体の中心線〕を外して右にあるなり（逆青）、或いは左なり（順青）、左は則ち手を交えず、外し打つとき、手をもじり、ただ斜め打なり。

先打　先打は敵を打って打つ、これを先という。

後打　敵打つを外して後、打つ、これを後打という。

合し打　少し打つに後れて、これに乗り合う、これを合し打という。

相打　敵と等しく相打って、彼我、身に相触る、これを相打という。

捍打　身を捍ぎ〔以下「防ぎ」とする〕、敵刀を打ち止めるもの、これを防ぎ打という。

却打　障打、乗打、嶺谷打、却打、引打、皆、合し打の類なり。一足却きて打つもの、これを却打という。撥打、曳打も同じ。〔「却る」は以下「退る」とする〕

円曲勢　両手、物を抱える如く、両刀の鋒を交えて中段に立つ、これを円曲勢という。深く両刀を交えて敵刀を相架ける、これを人立架勢という。

探り打　敵、動かざるとき、浅く敵刀を打って、敵情を探るなり。

両一尺

迎捧心　種々の形をして敵を引き出すなり。ひとえに身を敵に捧げて引き出すなり。

無色打　催しなき打なり。あるいはこれを没茲味の打、絶蔓の打、妖打という。これみな敵知らず、我れまた知らざる打なり。

雷刀先打　少し斜めに打って、下よりえぐりあげる如く手裏をかえて打つものなり。

無尽の打　われ架けて刀を反さず直ちに敵の上げる所を付け打つ。

付　打　また敵の打ち出す所を横に打ち付ける、これを付けという。

飛礫打　無鈍打なり。打ち、礫を飛ばすが如し。

転　勝　人中路を打ち、敵の拳を截断す。

避し打　敵の打つところを避してその上に乗り、打つなり。敵、身を打てば退き、身を避して打つ。手を打てば上げて避し打つ、或いは退いて避し打つなり。刀を打つ、また同じ。

坐　打　偏跪して打つものなり。〔折り敷く・居り敷く〕

連　打　幾連打同処なり。

捉拳者　下より受けすくい、敵〔の〕拳を捉えるものなり。

入　身　敵の太刀下に入るなり。

屈伸手　肘を伸して刀を執る、これを伸という。

の勢　肘を屈めて刀を執る、これを屈という。

伸縮打　手を伸して遠きを打つ。これを伸という。

手を縮めて近きを打つ。これを縮という。

遊魂打　打たれて後、敵を打つものなり。これ既に負けて命を失う。しかる打つもの、遊魂来たりて打つが如し。故にしかいう。

釣而打　斫勢を示して敵を引き出して打つ。これに乗って勝つものなり。

大節の打　大にして遅き打なり。

小節の打　小にして速き打なり。

微　打　軽くして小なるものなり。

活人刀　敵を使い動かす、これを活人刀という。

殺人刀　敵を使って動かさず、これを殺人刀という。二者、排すべからず。

連打また俗にこれを三重五重という。

三重五重は、打って弾ね、弾ねて打つ、これを三重、また弾ねて打つ、これ五重なり。

我れ、その形に従って打つ。

これ直打をいう。その身形を変えず、その身形に従って打つものなり。これその形の理勢に任せて同機一節打なり。

礼　法

座　礼

刀を真中に置き、跪坐し、両手軽く膝の奥に置き、相対して座し、眼付けは相手の帯通りにつけ、手を両脇に下ろし、軽くにぎり、そのまま一礼して右足より立つ。

立　礼

一　刀を右片手、柄をとり、鋒やや内に向く。双方、相対し刀を軽く上げる心持あり。上体をそのまま曲げて一礼す。

二　太刀を人中路に両手で提げての立姿

正面前向きの身形にて右足一足長活かして立つ。

三　太刀先を下げ、真直ぐに臍の下へしっかり提げて立つ。

四　中段、雷刀等へ構えるときの心持

下から太刀を持つ手首を変えることなく、素直に上げる。

五　前に進むときは右足から、後ろへ退がるときは左足から、左右すみかけて下がるときは後ろの足から下がる。

江戸、尾張五箇〔の〕身位、比較

江戸

五箇の身位の事

第一、身を一重になすべき事

第二、敵の拳、我が肩にくらぶべき事

第三、身を沈にして我が拳を下げざる事

第四、身をかかり先の膝に身を持たせ後のエビラ〔腰〕を開く事

第五、我が左の肘をかがめざる事

尾張

身懸かり五箇の大事の事

第一、身を一重になすべき事

第二、敵の拳、我が肩にくらぶべき事

（大股、身を低くする意）

第三、身を沈にして我が拳を楯にして下げざる事

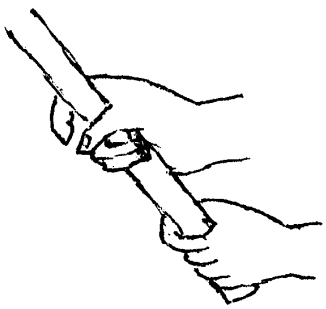
これは五箇の身にして沈なるときのこと也。直立たるときは違う也。身を沈にして我が拳を差出し、太刀を伸ばせば鍔にて拳隠れ、刀中に身、入る也。

第四、身を懸かり前の膝に身を持たせ後のエビラを開くべき事

第五、左肘をかがめざる事

執刀法

刀の持ち方は上筋にならず下筋にならず、中筋に持ち、人指し指は軽く曲げ、母指は腹を以て龍の口を広げる心持を以てしっかりと握る。



同じ心持を以て他の指も握るものとす。柄の太さは中指軽く掌に触れる程度を適当となす。左右握り手の間隔は指二本程入れる余裕を持つ。拳にて太刀を使うことなく、肩腕、惣身より打ち出すこと。

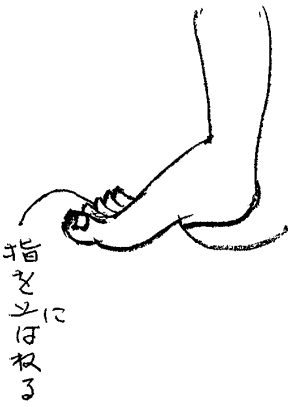
一、歩みのこと

昔の歩み方はトットットとして出で、敵の拍子を窺い懸かりしが、今は中庸五箇の身を以てスラスラと歩む。

中庸五箇の身

第一、直立たる身、四方正面

第二、高に高を懸かる事



第三、足を臍の下より使い踏む事

第四、位を放って打ち込む時、筋を外さざる事

第五、打ち込みてなお初めのごとく直立つ事

足を臍下より使い、脚掌をもって踏む、即ち平常の歩みなり。

三学円太刀

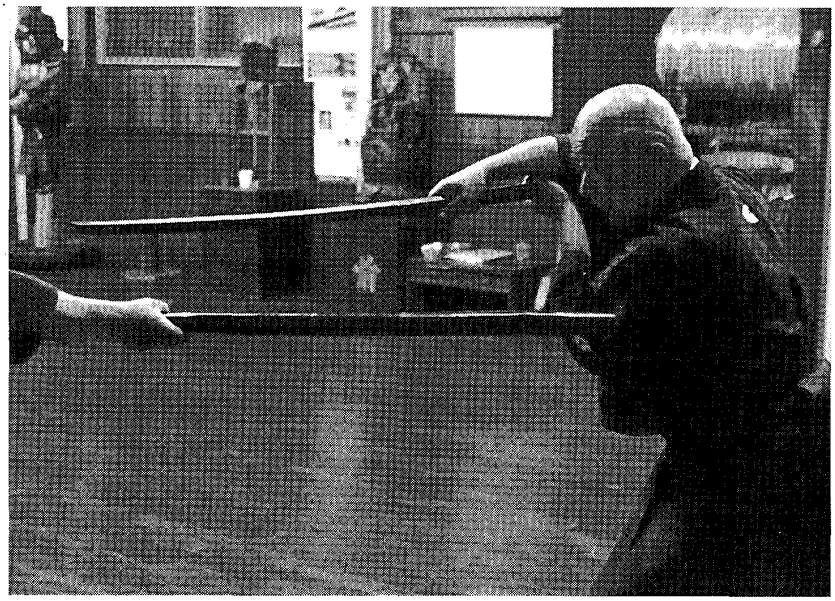
案ずるに、この形は上泉武蔵守信綱子〔子は敬語〕の撰びしところにして、形の名、みな禅語によれり。流祖〔陰流〕・愛洲日向守移香子は鹿島の禰宜にて神道を家業とし、その余業に兵法を究められしなり。されば工夫の形を禅語にて名づけられし様なし。上泉子は禅学を好みし人なるにより、兵法工夫の要文、みな禅語を引けり。また太刀路も全部上泉子の手風である。

三学とは禅に戒定慧の三学という事あり。これになぞらえて出たる事なり。伊東流相伝、槍の書にも三学を挙げて兵法修行の階梯とせり。三学とは『伝燈録』に「非を防ぎ悪を止むる、これを戒という。六根、境に渉るも縁に随わず、これを定という。倶に空にして照覧し惑い無き、これを慧という。」

右の意を武芸の上にていえば、それぞれの事、是非・邪正・損益を心に覚え、身手足に習わす。修行を積みて鍛錬するは「戒」なり。その術、身に練熟して事に臨み、場に応じて惑わず、事術に心の住せざるは「定」なり。「戒」も「定」もあえて無我空寂の中より、物に応じて真性の知覚発する所あきらかにして漏らすことなきを「慧」というなり。江戸柳生家の「身構え、太刀、手足を習わす」というもこの意を含みてのことなり。

元来、三学の道たるや、あえて剣槍のみに限らず、すべての歌舞、音曲、世渡りの技芸に到るまで通ずることなり。近代、何となく取り失いて、三学の大道を知らず事術の修行を励ますのみにして、「定慧」の場を踏まず生涯を終る者多し。術を尽くして術を放れざれば、何時の日にか用に立つべき処には到らぬものなり。

「円の太刀」とは孫子の「渾々沌々として、形、円にして敗るべからざる也」の意なり。渾々沌々とは、丸き形の意、即ち円転して滞らぬことなり。奇正虚実の変を備えたるときは円転自在なること、形、円なるものを転ずに渾々沌々として滞りなきが如く、敵より敗れることなしという意なり。さればこの術にていう時は、身体よく調いて一致し、身は身、手は手、足は足と離れ離れにならず、自由自在にとけて、固まりちぢける〔縮こまる〕処なく、心治まり気充て、奇正虚実の変を備え、明らかに観照し、敵に応じてその機の働くこと、盤を走る珠の如く円転自在なる処をよくよく心悟すべしとなり。



「くねり打ち」
左拳への打ちを外すと同時に足腰の力で膝をえまして打ちおろす。外すとき絶対に剣先を上げてはいけない。「膝をえまして床まで切るぐらいの腰の使い方をしなさいというのが神戸先生の教えです」（加藤館長）

時代別〔勢法〕の使い方

流祖時代　上泉子、石舟斎氏（永禄九年より天正、慶長年間）の使い方

〔「三学円の太刀」〕

一刀両段

使太刀　前掲、五箇の身の教えにて身低く大股にして構え待つ。拳を我が人中路〔身体の中心線〕より少し右寄りに置く。車の構えなり。

打太刀　低き撥草（中段）に構え、進み来て、左肩を浅く斜に打つ。

使太刀　そのままの身なりにて斜に打つ。

打太刀　打たれて遠く引きあげ頭鬢上に被る。

使太刀　その拍子に連れて真眉指下に突き込むなり。

斬釘截鉄

使太刀　五箇の身の意にて股を踏み開き、前へかかり、真中段にて進む。

打太刀　撥草にとり、進み来たり斜に打つ。

使太刀　直ちに抜け替わり、拳を打つ。（打太刀の斜に打つ先を越して、拳を打つ）

打太刀　引き上げる。

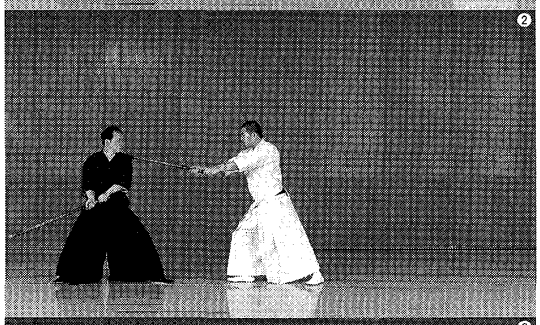
使太刀　截鉄と付け込み突くこと「一刀両段」と同じ。

半開半向

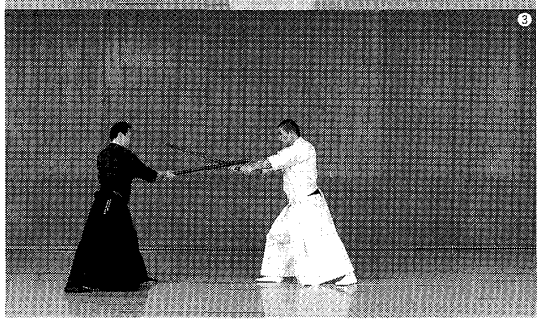
使太刀　五箇の身にて股を踏み開き、青岸に構え、待つ。

一刀両段（古伝）

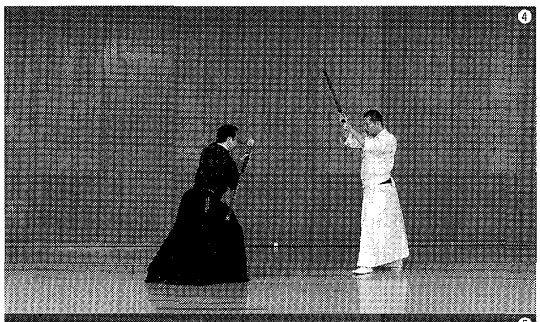
❶ 使＝身を低く大股にして車に構え待つ
○膝を大きくえます
打＝低い撥草に構え、進み来て、



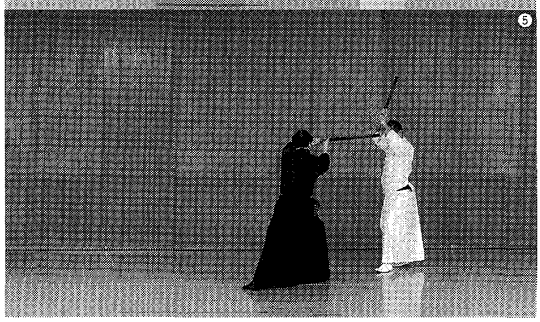
❷ 打＝右肩を浅く斜めに打つ（イメージ図）



❸ 使＝そのままの身なりにて斜めに打つ
そのまま左足前で一歩詰める
打＝詰められて一歩退く（継ぐ足）



❹ 打＝撥草に退がっていく
使＝太刀を右肩横から下に廻し、腰を落とし膝をえます力で打太刀の内股を切り上げ（太刀は左肩横から廻してもよい）



❺ 使＝真眉指下に突きこむ勢いを示す

使太刀の動きを正面から見る

打太刀　撥草にとり、進み来て使太刀の左拳を打つ。

使太刀　小口に打太刀の左右腕首をくねり打つ。（刃は斜の下に向かう）引き上げ方、前に同じ。

右旋左転

使太刀・打太刀とも、股を開き青岸に構え、互いに拍子を取りながら緩やかに〔文を〕切り合う。

打太刀　太刀先へ文を切りかけ、前をふさぐ。

使太刀　その拍子を切り下げ、裏へ抜け（打太刀の右側）、左足を踏み出し右足を詰めて打太刀の右手首に勝つ。

左転は、

打太刀　使太刀〔が〕抜けて勝ちたるままの所を直ちに順に柄中へ打つ。

使太刀　そのまま逆に魔の太刀にて越して少し開き、打太刀の左肩より拳をかけ、左転と勝つなり。

注　魔の太刀とは輪の太刀、即ち太刀を逆に雷刀に上げ、順に廻し打つことなり。

長短一味

使太刀　直中段、五箇の身にて文を切り、半の間に変化して捨てたる形をとる。身、前へかかり、下段にて太刀先高く、打太刀の帯の上にあり。

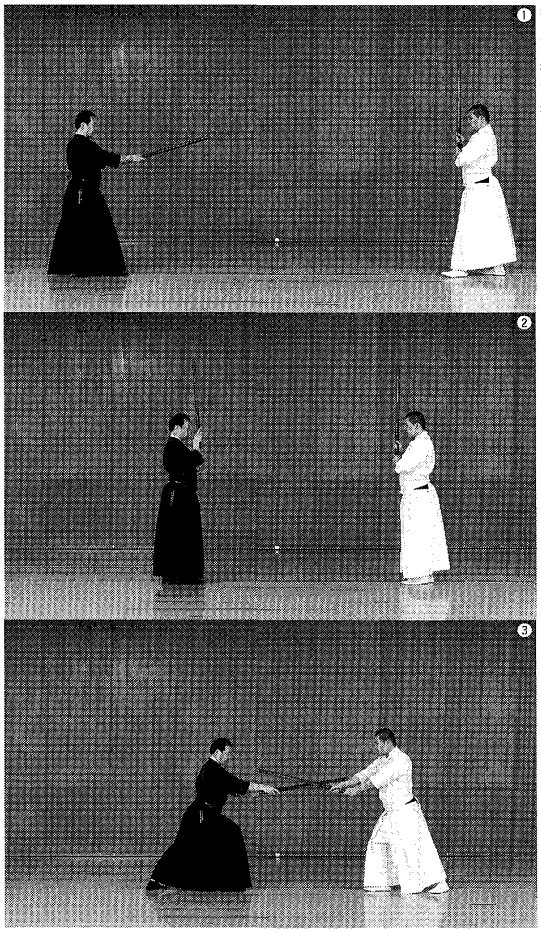
打太刀　浅く少し筋交って肩を打つ。

使太刀　浅く柄中へ斜に勝つなり。

以上三学終

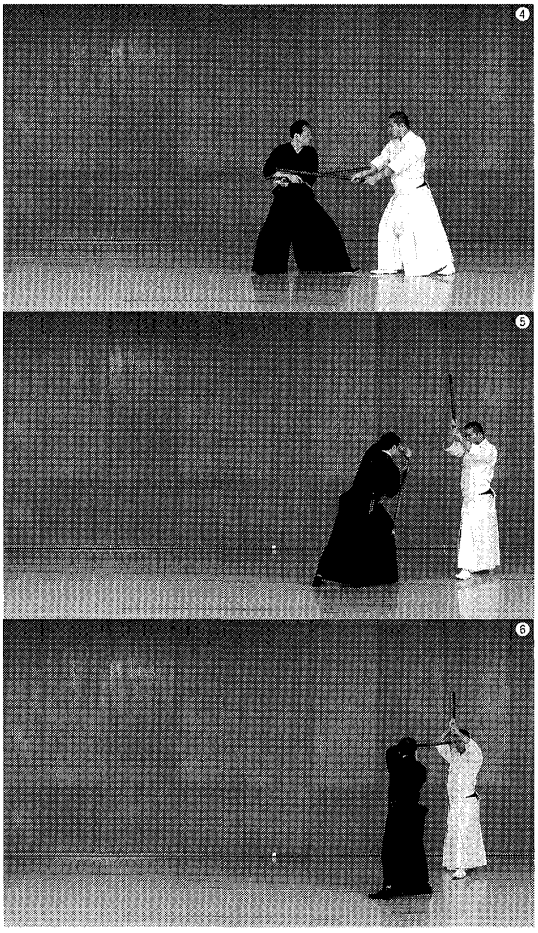
斬釘截鉄（古伝）

使＝堅一文字に構える。
打＝右腕を打っていく。
○「堅一文字の構え」は自分から相手の間に入るので一つ間違えば相手に打たれる。逃げる太刀ではなく、一刀で相手を仕留める攻めの太刀



使＝青岸に構え進む
打＝低い撥草に構え、進む

使＝前の足を僅かに前に出すと同時に後ろの足を大きく後ろに引きながら（踏み割り）、打太刀の右手を「斬釘の打ち」で打つ



使＝打つと同時に左足を踏み込む（継ぐ足）前の左足で詰める（詰める足）

「九箇の太刀」

必勝

使太刀　左太刀なり。右肩に払う構えに少し直なる構えにて立つ。

打太刀　中段順城郭構えに似たり。使太刀の左肩より肘の間に付ける。

使太刀　右足を少し踏み出し、打太刀の拳へ左足を踏み込み、その身形にて打ち、下段となる。

打太刀　太刀を引き上げ使太刀の柄中を打つ。

使太刀　上に引き越して打太刀の右腕に勝つなり。

逆風

打太刀　足を踏みわり身を沈にして構える。

使太刀　撥草、払いの太刀より大袈裟に切り払い、左車に足を立て替え、それより打太刀の右へ抜け、身積り三角に、右〔左を直す〕を先にして角かけて下段に直して構える。

打太刀　使太刀の払いの太刀を順車（右足を後に引く）となりて外し、それより右足を踏み出し、使太刀の右肩頭をかけ真直ぐに打つ。

使太刀　抜けて打太刀の右腕拳ぎわへ勝つなり。

十太刀

互いに青岸の文の切り合いなり。使太刀・打太刀とも身を低くし構える。

使太刀　青岸より変化して低き十太刀の構えとなる。

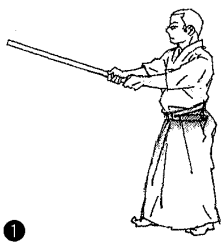
打太刀　移り付けかけ柄中を打つ。

使太刀　下より拳をはね詰める。

打太刀　右足を退け撥草に取る。

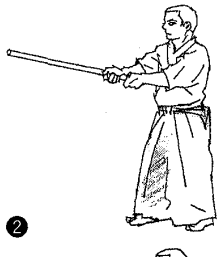
使太刀　五箇の身にて詰めること「一刀両段」と同じ。

必勝



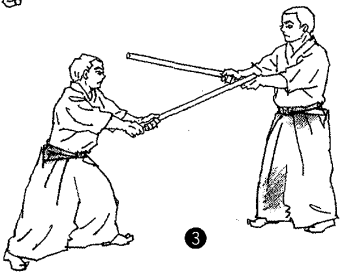
❶ 青岸の構えを少し高くした城郭勢に構え、剣先を使太刀の左肘につける。

左足をやや前にして、左手を前にして柄を握った左太刀を右の肩に少し高く立てて構える。
○両肘は上げない。



❷

右足を右真横（または右斜め前）に前に大きく踏み出すや、



❸

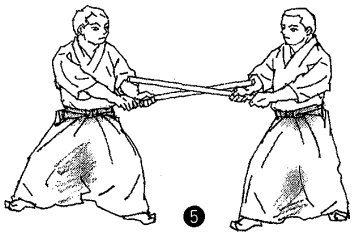
左足で踏み込んで打太刀の柄中を太刀の左鍔で叩くように打っていく。（迎え）
3図はイメージ、実際の動きは次の4図

その瞬間、太刀を上段に執りながら後ろの足より後へ引き、

❹

○両手を伸ばして打つ。
打太刀に外された剣先は打太刀の元の柄中の位置に止まり、打太刀の中墨（体の中心）を外れない（そのまま打太刀の腹を突いていくことが出来る）。

必勝の構え（正面）



❺

使太刀の、前に出た両拳を右足を踏み込んで打つ。

左足より打太刀の右斜め横に身を翻して打太刀の打ちを外し、同時に、下段の太刀を僅かに左斜めに取り上げ（刃はそのまま横を向いている）、そのまま打太刀の右手首を削ぐようにして斬る。
○斬った太刀先は打太刀の両拳の間に止まり、打太刀の中墨を外さない（筋違いに勝つ）

和ト

打太刀　堅一文字（直中段）の構えにて待つ。

使太刀　青岸にて進む。

打太刀　真直ぐに打つ。

使太刀　少し開き、横身になり拳を斜に打つ。

捷径

身を低くしてかけ込み、介者〔鎧武者〕に向いてはホッテ〔鎧の胴尻〕の下を突く。高きは真眉廂下を突く。受けるときは両膝をえまし受けるとあり。

使太刀　中取りの中段にして、身低く駆け込む。

打太刀　雷刀、左足を前にして立ち、右足を大いに踏み込み、真っ向を打ち押さえる。

使太刀　その押える拍子に乗り、押し落し突くなり。

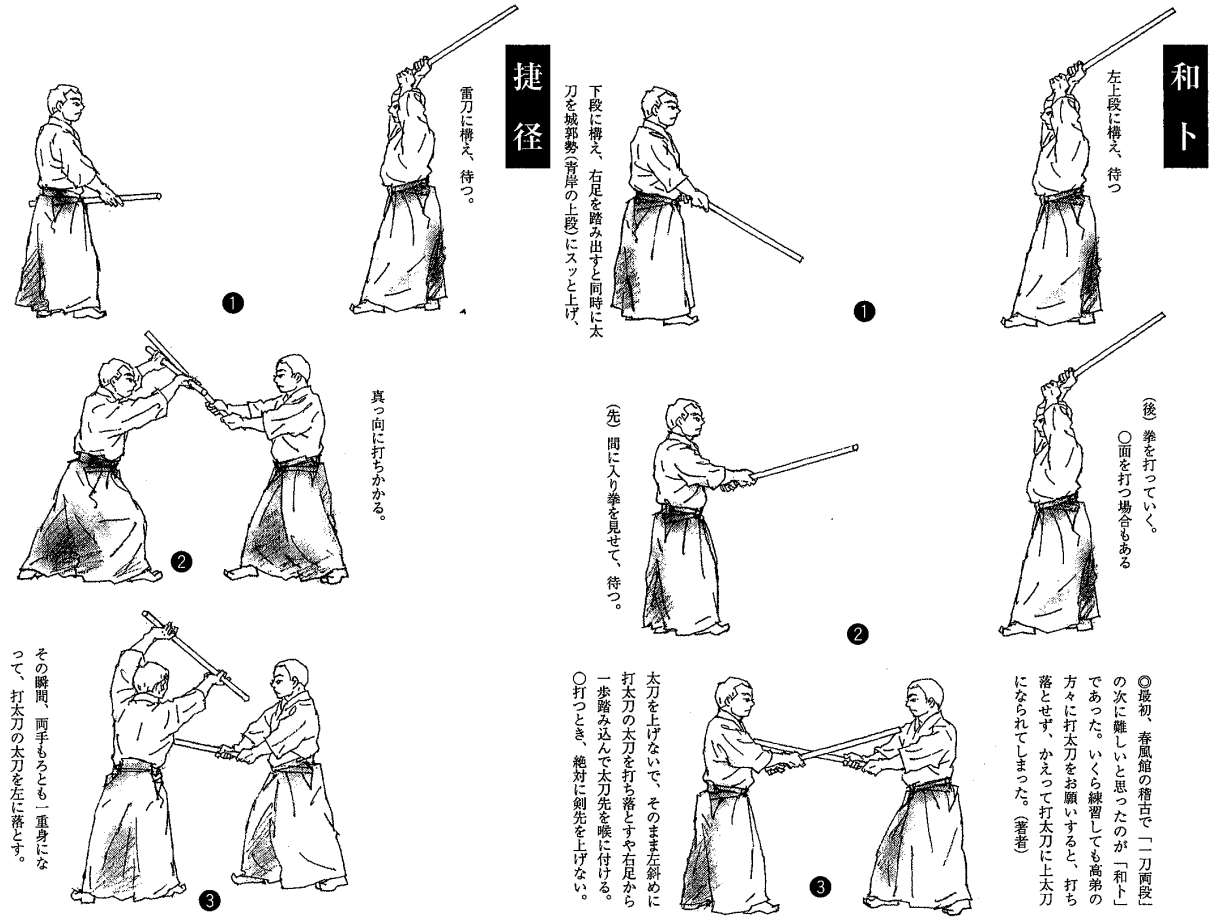
小詰

打太刀　下段膝車。大股にして至って低く構え、柄を膝に付けるほどにする。

使太刀　少し青岸の様にして太刀先を打太刀の拳に付け出る。中段の少し低き構えなり。その構えを徐々に上げつゝ進みよる。

打太刀　左肘を打つ。

使太刀　左肩に引き上げ外し、右足を踏み出して打ち、ゆるめず左足を踏み込み左身になり、膝の外へ拳を出して突く。



大詰

打太刀、中段。使太刀、上段。相懸かりに進み行く。

打太刀　柄中かけて斜に打ち来る。

使太刀　右肩の上に順に外し、左足を少し後の角へ開く。次は右足を踏み出して双手勝ちに横に勝つ。

八重垣

打太刀　上段。太刀先を使太刀の左肘に付ける。青岸の構えのように横に仕付けるなり。

使太刀　横雷刀より変化して右足を後の右へ引きながら、太刀をくねり、打太刀の太刀先三寸へ乗り付け、逆の中段となり、我が拳を平らにして見する。

打太刀　魔の太刀にてこれを打つ。

使太刀　魔の太刀にて抜け、腕へ勝つなり。

解　魔の太刀とは廻刀、廻し打ちのことなり。

村雲

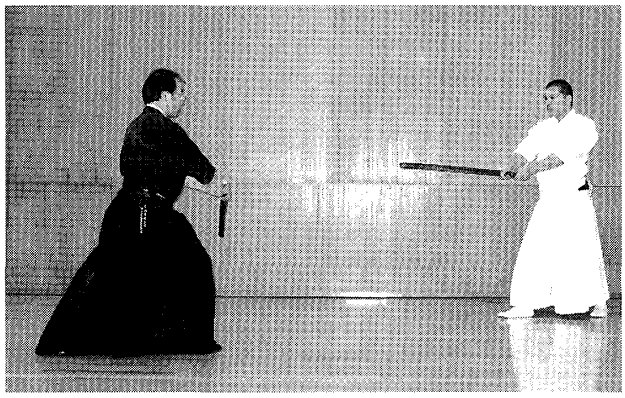
使太刀・打太刀とも相下段。互いに文を切る。

使太刀　文を切りながら進み、間の外にて大きくカラ打ちをして〔太刀を〕下げ、打太刀の左へ寄り仕かけ、右身にて股を開き、右膝の通りに太刀を置きて逆に下げ、下段となる。

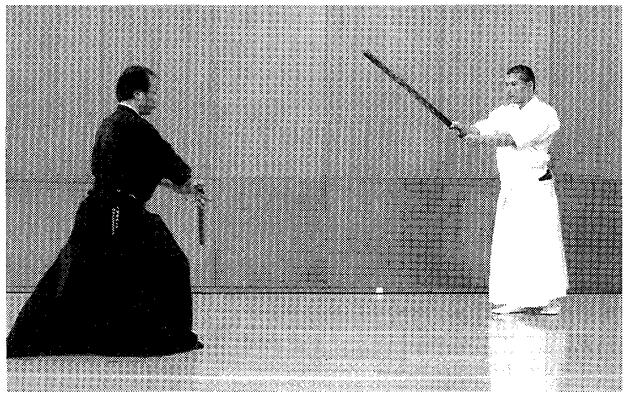
打太刀　付けて拳を打つ。

使太刀　抜けて、くねり打ちの如く、順に横に右腕に勝つなり。

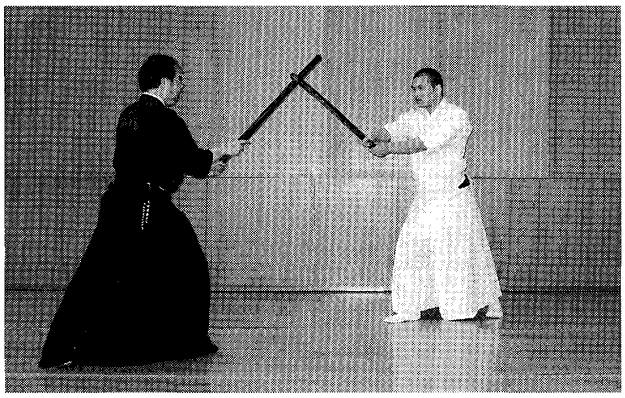
村雲（尾張遣い）



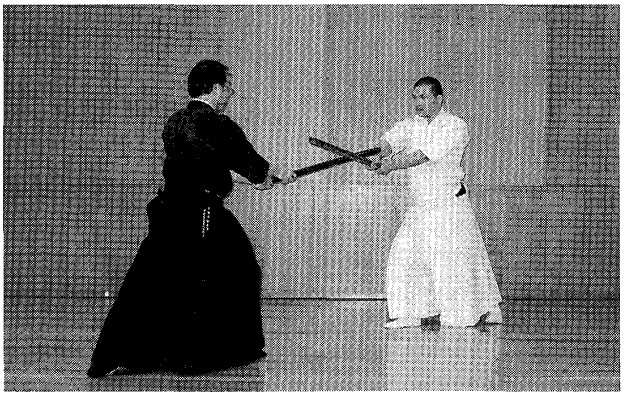
①剣先を左斜めにして拳を見せながら上下にゆらゆらと文を切る。



②拳を打っていく（打太刀）



③体をわずかに右に移動させながら打太刀の太刀を右にはじき、



④同時に体をわずかに右に移動させながら右拳を打つ。

「七太刀」

踞地獅子

師曰く。これは、

使太刀　初め車の構えにて立ち、

打太刀　撥草にて進みより、使太刀の足を払う。

使太刀　一旋節の打ちを以て左右〔左を補う〕足を踏み変わり、真っ向より打太刀の太刀中、十文字と打ち、折り敷くもの。

打太刀　折り敷く。

天関

師曰く。これは上の十文字で、

打太刀　撥草より首の辺りを真直ぐに打つ。

使太刀　足を踏み替わり真直ぐに拳に勝つ。

容髪

師曰く。これ他流にいう摺り落しで、当流和卜の変勢である。

打太刀　雷刀。

使太刀　青岸。

打太刀　首へ右足を踏み込み打ち懸かる。

使太刀　拍子を受けて一拍子〔に〕摺り上げ首を打つ。

或いは右に転じ、或いは左に転じ勝つもよし。

小手截り

師曰く。これは三学二本目、「斬釘」の砕きである。

打太刀　撥草より直ちに太刀に争う。

使太刀　足を踏み込み、左に転じて小手に勝つ。

地軸

師曰く。これは車よりはね上げ双手〔「双方」を直す〕切りである。

打太刀　首に切り懸かる。

使太刀　右足を踏み込み、折り敷きて斜め切り（順）。

明月の風

師曰く。これは逆車よりはね上げ、双手切りである。

打太刀　撥草よりやや直に首に打ち来る。

使太刀　右足を踏み出し、筋を変わりて、逆に双手切り。折り敷く。

燕鴈

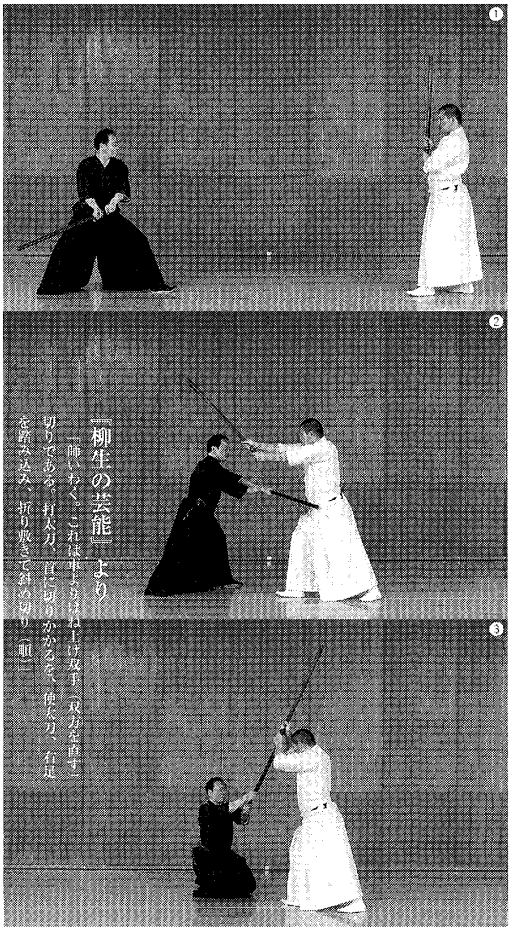
師曰く。これは、

打太刀　逆車にて使太刀の拳に打ち来たる。

使太刀　極意勝ち折り敷く。

打太刀　共に折り敷く。

地軸



使＝車に構え、膝を深くえます
打＝低い撥草で攻め進み、

打＝首を切っていく
使＝身を低くし、左斜め前に左足を大きく踏み込んで打太刀の打ちを抜きながら、胴または足を切る

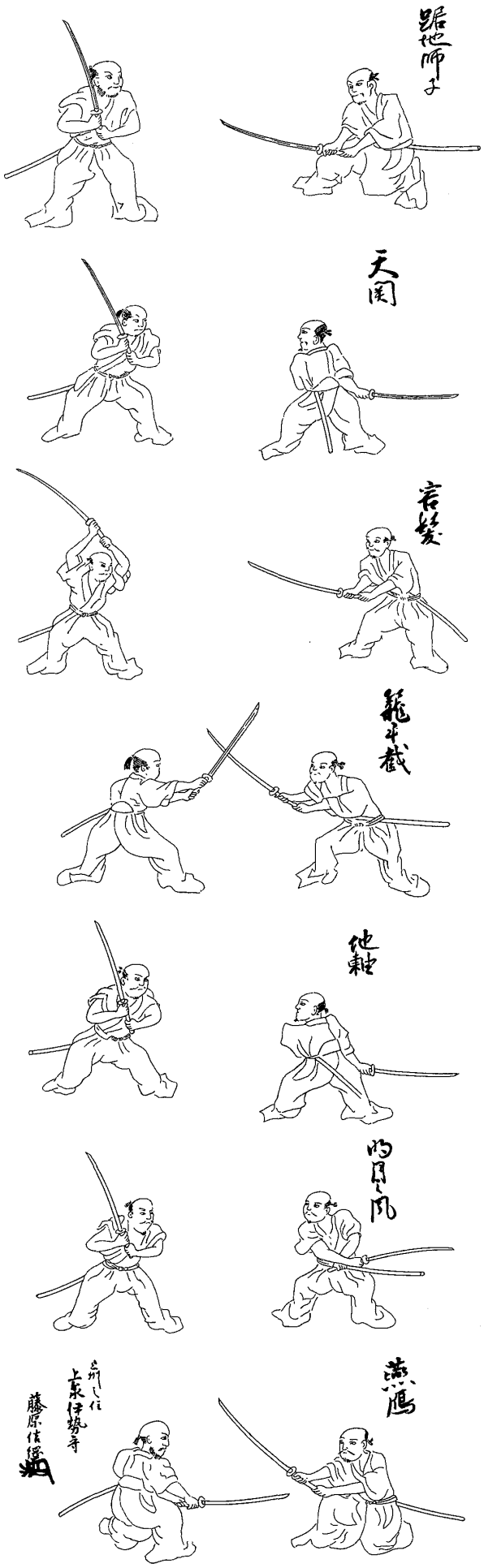
打＝太刀を振り上げ面を打たんとする
使＝身を低くしたまま右足を踏み込み、右膝通りに（斬釘の線で）太刀を廻して折り敷きながら右小手を切る

『柳生の芸能』より
「曙、わく、これ流半ならはね上げ双手（双方を直す）切りてなる、打太刀、首に切りかかるを、使太刀、右足を踏み込み、折り敷きてなる切り（順）」

「七太刀」は上泉伊勢守が永禄九年（一五六六年）、柳生石舟斎に与えた『影目録』に太刀名と絵だけが載せられているが、それ以来、失伝されたと信じられてきた太刀である。しかし『柳生の芸能』には「師曰く」として遣い方が記載されており、春風館道場では高弟の間で稽古されている。

校訂者二人も特に稽古を許され、『江戸武士の身体操作　柳生新陰流』で初めて公開することが出来た。神戸先生は厳周から深く信頼され、柳生家の文書をすべて書き写している。次の絵も上泉伊勢守『影目録』のものを神戸先生が写されたものである。これも同書が初公開である。

上泉伊勢守『影目録』「七太刀」



江戸柳生古目録口伝書による使い方

「三学円の太刀」

一刀両段

使太刀　車の太刀に構え、待つ。

打太刀　青岸の下段に構え、打つにはあらず、新当流その具足に当ってその法を現わすということあり。その心持をもって使太刀の右の方へ仕かけて懸かる。

使太刀　懸かるところを、打つ足身はそのまま置き、右の肩を入れかけて、打太刀の柄の内へかけ打つ。

打太刀　打たれて太刀を右の肩へかたげ〔撥草に取り〕、右の足を後へ引く。

使太刀　その引くに従いて右の足を開き、青岸の上段にて、打太刀のかたげたる左の手首へ付ける。太刀先は打太刀の左の眼を外さず、足の踏みよう、身のひずみなき様に三学の心持にて遣うなり。

解

「新当流その具足に当ってその法を現す」とは、新当流にはその太刀に当ってその手立てを考えるということとなり。

「その心持をもって使太刀の右の方へ仕かけて懸かる」とは、車は元より下より弾ねることあり。故にそれに心を付けて切っ先を肘より拳の間に付けて懸かることとなり。「懸かるところ」とは、打太刀、やや斜めに使太刀の肩に浅く切り懸かるという意なり。

「懸かるところを、使太刀、その打つ足身はそのまま置き、右の肩を入れかけて」とは、初めの形ちを崩さず打太刀の左に少し寄ることとなり。

「打太刀の柄の内へかけ打つ」とは、打太刀の両拳へ十文字と勝つことなり。「右の肩へかたげ」とは、撥草にとることなり。「青岸の上段」とは、「五箇の身」の付けをいう。「左の手首へ付ける」は昔の使い方なり、悪し。今は肘に付けることなり。「太刀先は左眼を外さず」は好し。

斬釘截鉄

使太刀　身をひとえにして一文字の太刀の如くに高く構え、太刀先を打太刀の顔中へ突きかけて懸かる。

打太刀　相構えにて、使太刀の太刀を横に打ち落すように打つ。

使太刀　受け流して打太刀の右へ廻りかけて、左の肩を打太刀の拳にくらべ、右の足を開き、手をもじりて、打太刀の右の腕首を打つ。

打太刀　打たれて初めの如く肩へ引く〔撥草に構える〕。

使太刀　それに連れて打太刀の左へ直り、初手の如く青岸の上段に付ける。

解

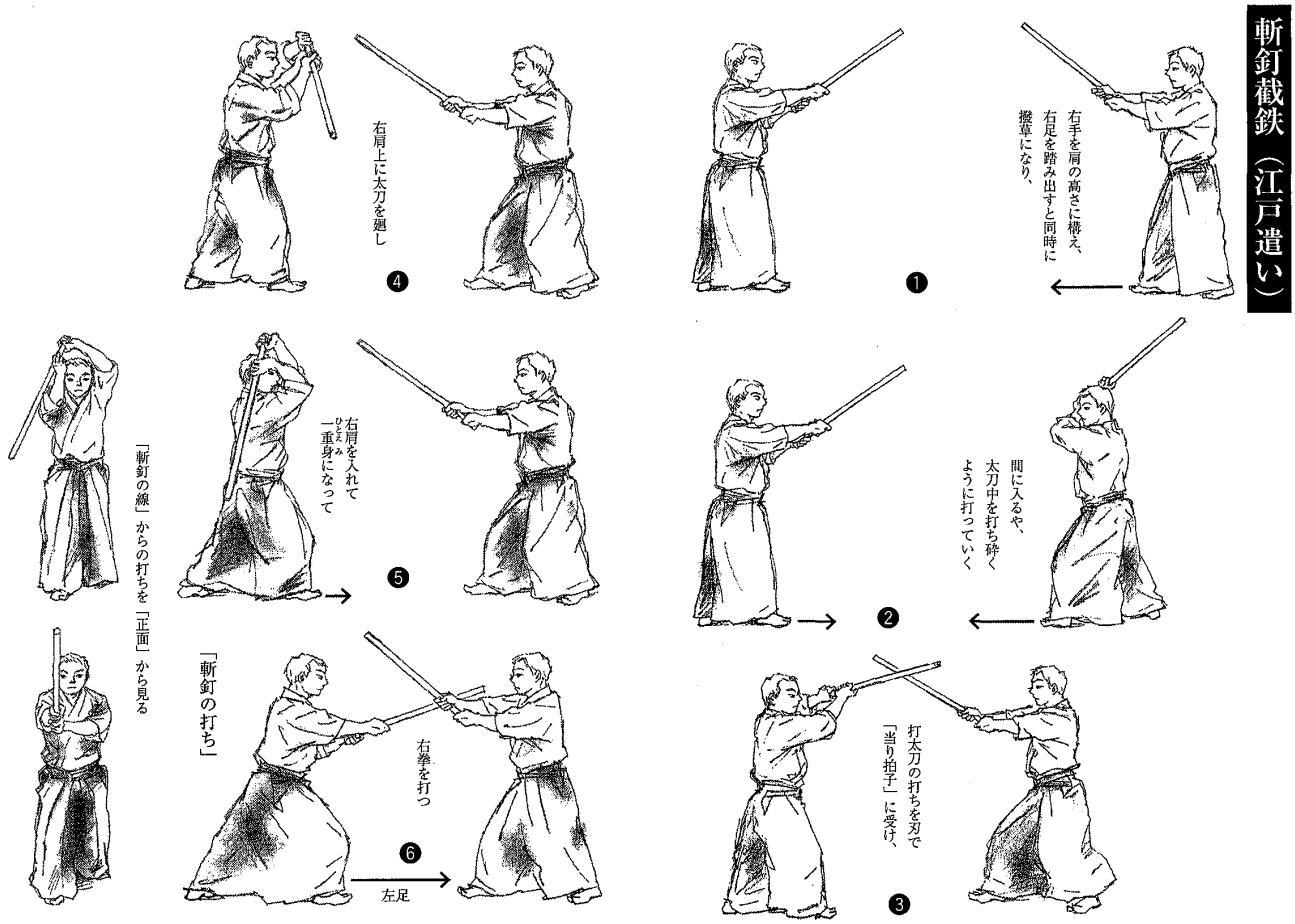
「一文字の太刀」とは、中段直勢のこと。向構えなれば、ひとえ身の要なし。この形は互いに相懸かりに懸かるよし。打太刀、使太刀の太刀を斜め横より打ち砕くように打つを、〔使太刀〕架け流して右へ廻る。「左の肩を打太刀の拳にくらべる」とは、左の肩を大いに入れかけることなり。

半開半向

使太刀　青岸の中段、太刀を平らめ、左の肘を伸ばし、太刀先を打太刀の目へ突きかけ構える。

打太刀　相構えなり。使太刀が太刀先三寸へ付けるを見て、使太刀の左の拳を、構えを崩さず切る。

斬釘截鉄（江戸遣い）



使太刀　切らせて右の足を後へ引き、左の肩を拳にくらべ〔「くらべ打ち」の「打ち」を省く〕、手をもじりて、上より打太刀の両手の間、柄の内を打つ。

打太刀　打たれて初手のごとく肩に太刀をかたげて〔撥草になって〕引く。

使太刀　それに従い青岸の上段にて付ける。付けは三つとも同じことなり。

解

「太刀先を打太刀の目に付ける」とあるは、この場合、順の青岸なるにより、左の目へ付ける。「太刀を平らめ」とあるは、直中段よりやや斜めなるをいう。打太刀、使太刀の太刀先三寸に付けて、使太刀の拳三寸を打つ。手のもじり方、刃は下斜め左を向く。

右旋左転

互いに一文字の太刀の中段なり。

使太刀　打太刀の左の方へ廻りかけて、序を切りかけ、待つ。

打太刀　その時、序を合わせ、手の内強く使太刀の太刀中を横に打つ。

使太刀　それに従いて打太刀の太刀の下をくぐり、打太刀の右腕首を打つ。

打太刀　打たれて青岸の中段に直す。

互いに相構えにて序を切りかけ、

使太刀　また今度は打太刀の右の方へ廻り、序（じょ）の切り合いをする。

打太刀　その構えを崩さず使太刀の左の拳をかけ打つ。

使太刀　打つ処を越しかけて打太刀の柄の内、両手の間を打つ。

解

「使太刀より打太刀の左の方へ廻りかけて序を切る」とは、左の方へ廻りかける心を持ちて、その場にて文を切るものとす。

「その時、打太刀、序を合わせ」とあるは、普通使うときは二つ文を切り、三つ目、強く使太刀の太刀中を横斜めに打つものとす。もっとも巧者にいたりては、序を合わすこともなく、心に使太刀の拍子をとり、自由に太刀中を払う。「越しかけて打太刀の柄中を打つ」とは、拳を上にして外して打つことなり。

長短一味

これも一文字の太刀の中段にて序を切るなり。

打太刀　右の二つの切りかけもなく、中筋を用心して使太刀の働きを見る。

使太刀　序切りの内より身を入れ替え、足を立て替えて、くるま〔車〕の太刀の身位に直り、手をもじり、太刀先を左のつま先へなして、欠く心持にて身を下に沈む。

打太刀　使太刀の直るに従いて、序切りをやめ、使太刀の肩先へかけて打ち懸かる。

使太刀　それに従いて、太刀先を上げて、下より打太刀の柄の内を打つ。長きも短きも一つになるによりて一味というなり。一度伸ばしたくば身を縮めよということ、この心持なり。

解

「一文字の太刀」、竪（たて）一文字、直中段のことなり。「欠く心持にて身を下に沈む」とは、打太刀の拍子を欠く心持なり。文を切る半間に太刀を下に落すこと。「下に沈む」とは、股を開き、両膝をえまし、低き姿勢になること。

打太刀の構えは青岸にて、文を切るものとす。

「九箇〔の太刀〕」

必勝

使太刀　左太刀、右の肩にかたげ、我が左の肩を打太刀の拳にくらべ、左の足を出して、その身なりにて懸かる。

打太刀　青岸の構え、〔太刀を〕少し横になして太刀先を少し上げて、使太刀の左〔「右」を直す〕の腕におしかけ懸かる。

使太刀　打太刀の太刀半分程より太刀先の方を横に打ち落す。身を崩さず身共にうち沈みて腕を先へ身通りに出し、太刀先を左のつま先通りに置き、待つ。

打太刀　打たれてその身にて後の足より後へ退く。また使太刀の待つところを、拳かけて先から先へ踏み込み打つ。

使太刀　その打つところを、後の足を少し開きて拳を身に引き寄せて、下より上へくぐり、打太刀の右腕首を打つなり。

解

打太刀、青岸の構えに対し、〔使太刀は〕右足を前隅に出し、打太刀の拳を払い、槍構えとなる。

打太刀、上段に外し、ひしびしと打つ。使太刀、下より巻き落す如く打太刀の右腕首に勝つものなり。

前文中、「使太刀の腕におしかけて懸かる」とあるは、拳の動き、肘の動きに心をかけることで、おしかけることにあらず。

「使太刀、打太刀の太刀半分程より太刀先の方を横に打ち落す」とあるも、実は打太刀の拳を斜め横に打ち落すことをいう。

逆風

使太刀　右の肩に払いの太刀の如くに構え、左の足を先へ出し、その身なり懸かる。

打太刀　竪一文字〔「青岸の上段」を直す〕に構え、懸かる。

使太刀　右の足を踏み出し、身を入れ違えて、打太刀のえもん〔衣紋〕なりに払い、左の足を開き、打太刀の左の方へ角かけて左車に構え、待つ。

打太刀　使太刀の払うに従って、右の足を後へ引き、また使太刀の左車を見て、引きたる足を踏み入れて、使太刀の右の肩を切る。

使太刀　切るに従って、また身を立て替えて肩を入れ替えて、打太刀の右へ跳び違い、右の腕首を打つ。

解

文中、「青岸の上段」とあるは誤りなり。これは「必勝」の打太刀にして、「逆風」の打太刀は竪一文字をよしとす。

打太刀、使太刀の払うに従って、右の足を後へ開き、順車に外す。

十太刀

互いに一文字の中段の構えにて序の切り合い。

使太刀　序の内より車の太刀の如く太刀を引きとり、身位、「一刀両段」の構えに似て、太刀先は我が身通りの前に置いて待つ。

打太刀　そのまま下段の青岸に直し、使太刀の拳を押える様におしかくる。

使太刀　下より打つ。

打太刀　打たれて三学の初手の如く、かたげて引く。

使太刀　それに従って打太刀の左の方へ直り、青岸の上段にて付ける。付けは何れも初手の「一刀両段」の付けと同前なり。

解

文中、「使太刀の拳を押える様におしかくる」とは、太刀先を使太刀の拳から肘の間に付けることなり。

「車の太刀の如く太刀を引きとり」とは、右足を角かけて引き、左〔右を直す〕足、半歩前へ出し、車の太刀となること。打太刀、使太刀の肘のかかりより拳かけて打たんとするとき、使太刀、下より、はね打つものなり。

和卜

使太刀　構え、活人剣の心持をもって下げ、懸かる。

打太刀　青岸。

使太刀　右の足を踏みとめ、そのまま立つ身にて打太刀の太刀先三寸へ切り懸かる。

打太刀　その色につき、真っ向に切り懸かる。

使太刀　中墨を外して右手の方へ開き直って体を据え、二星を勝つ。

解

「活人剣の心持」とは相手を働かして勝つ心持なり。「太刀先三寸へ切り懸かる」とは、三寸に付け打太刀を働かすことなり。

捷径

この使太刀は細き道などの脇へも開かれず、太刀の振り回しも不自由なる所にての太刀なり。

使太刀　身をひとえになし右の肩を打太刀の拳にくらべ、左の手に柄を持ち、太刀を帯のあたりまで身にひき添え、太刀先下りに取りて、すらすらと懸かる。

打太刀　身をひとえ身になし、左の足を先へなし、太刀を右の肩にかたげ、使太刀を引き寄せ、上より真直ぐに、足を立て替え身を入れ替えて、手の内強く切る。

使太刀　切るところを、その身なりに受け合わす。

打太刀　受けられて、上より押し付ける。

使太刀　押すに従って左の拳を下ろし、身を立て替えて、左の足にて打太刀のつま先を踏み付け、受けたる太刀をそのまま押し付ける。

解

文中、打太刀、上より押し付ける拍子を受けて、左の拳はそのまま、まず打太刀の太刀に乗り、手前に押し落すなり。しかる後、詰めるものとす。「身を立て替えて」とあるは、押し落した後、打太刀の太刀を防ぐ心持をもって、太刀を斜め横にし、詰めるかたちをいう。

小詰

使太刀　下段の青岸の構えなり。

打太刀　一文字の太刀の下段の構え、「獅子の洞入」に構え、身をさがり右の足を先へなし、柄頭、我が右の膝頭のあたりへ押し当て、太刀先上がりに一文字に構える。

使太刀　懸かる。

打太刀　左の拳へかけて、その身なりを崩さず切る。

使太刀　切るに従い左の足を踏み込み、腕をもじり、我が左の膝の外へ拳の出るように打太刀の鍔ぎわを止める。

懸かり口の時は、太刀先は打太刀の胸の喉のあたりへ行く程に詰める。詰め様は、我が太刀の我が身にそうようにして、下を第一と用心してよし。

解

文中、「腕をもじり」とあるは、誤りなり。そのまま順に下ろすこと。また、鍔ぎわを止めるとあるも、実は太刀先を止めるなり。

大詰

使太刀　横一文字の上段、我が拳を打太刀の盾にして、打太刀の顔へ太刀先を付けて懸かる。

打太刀　相構えにて使太刀の懸かるを見て、上より真直ぐに打つ。

使太刀　打つに従って、すぐに上へあげて打太刀の右の方へ座を飛びかえて打太刀の両手の内へかけて打つ。

古流には後へ外したるとあり。然れども深く切るものには危うき故に、当流は左へ外し、打太刀の太刀先を我が右へ外れるように遣うなり。懸かり口の仕かけに越す心持をもって懸かる味よし。打太刀も切り落せば切りくみ悪し故に、中にて太刀先下りに切り止める様に切るなり。

解

一文字の上段なれば、打太刀の顔に太刀先は付け様はなし。太刀の中墨を外さず進むことなり。「打太刀、相構えにて」とは、一文字中段のことなり、太刀先、顔に付ける。使太刀、進みかかる拳を上より斜め横に打つなり。「左へ外す」は、斜め左あと、即ち、角をかけて外すものとす。太刀を右肩に順に上げ、打太刀の両手を順に切り、大いに詰める。

八重垣

打太刀　構えは青岸の上段なり。

使太刀　〔太刀を〕上段に頭の上に拳のある様に振り上げ、太刀先を後ろの少し右の方へさけて右の足を先へ出す。

打太刀　青岸にて詰め懸かる。

使太刀　打太刀の太刀半分へ上より打ちかけ、右の足を後へ開き、身を立て替えて打太刀の左の方へ飛び違え、手をもじりて霞の太刀の如くにして待つ。

打太刀　身を崩さず、先から先へ踏み入れて、使太刀の三寸へ巻きかける。

使太刀　その巻きかけるところを、また、霞たる太刀を上へ巻き返し、また打太刀の右の方へ飛び違へ、足も身も立て替えて、右の足を先へ出し、打太刀の右の手首を打つ。

解

打太刀、青岸やや平らめにして太刀先を使太刀の肘に付ける。使太刀は上段、横雷刀に構える。「打太刀の太刀半分へ上より打ちかける」とは、打太刀の太刀先三寸に付けることなり。

「右の足、後へ引き」云々とは、手をもじり、「霞の如く」とは逆の中段になることなり。「先から先へ踏み入れて」とは、先々の意を以て使太刀の三寸（拳）へ、巻き打ちに打つことなり。

村雲

互いに一文字の中段の構えにて序の切り合い〔緩やかに文を切る〕。

使太刀　その序切りの内より、欠く拍子にて、その身なりを直ぐに打太刀の左の方へ座を替え、右の足を先へ出し、太刀を地につけて、拳を我が膝通りに少し先へ出し、身を沈め、後足を開き、待つ。

打太刀　そのまま序切りをやめて、使太刀の拳の出したる間を打つ。

使太刀　〔打太刀が〕打つに従い、打太刀の右の方へ身足ともに立て替え、太刀は下よりくねる様にして打太刀の右の腕首を切る。

拍子の取りにくき敵に勝つ太刀なり。

解

これは境〔間境〕外の序の切り合いなり。

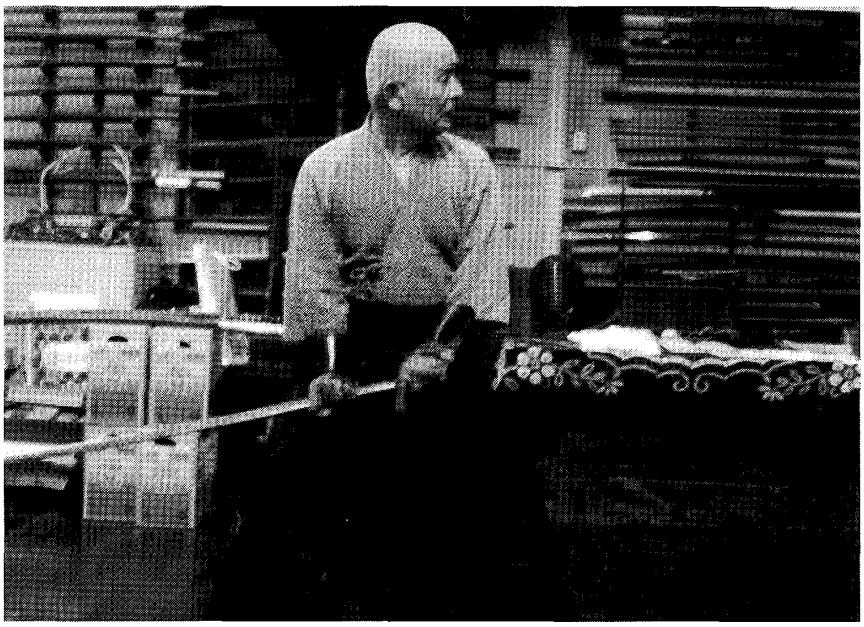
「欠く拍子」とは、相手の拍子を外すことなり。

「太刀を地に付けて」とは、地に付ける心持をもって逆下段となる。

逆下段となり、境内に入らんとするとき、打太刀、その拳を打つ。

使太刀、右側に順にくねり打ちの如く右腕に勝つ。

古伝・江戸遣い「一刀両段」



加藤館長口伝

「一刀両段」は車に構えた使太刀に対し、打太刀は前に出た肩か首を斜めに切ってくる。そこを使太刀は拳または首を斬る。初心者のうちは、いったん太刀を車から肩の高さまで取り上げてから打ち下ろすことで太刀筋を覚える。しかし本来の「一刀両段」は、絶対にいったん取り上げてから切り下ろしてはいけない。足腰を廻すことで、車に構えた太刀が自然に斜めから切り下ろす太刀筋になるのであって、手を使って太刀を上げることはない。「一刀両段」についてこの道場の一番肝心なところを教えるとそうなる。新陰流は「一刀両段に始まって一刀両段に終わる」というのはこのこと。

神戸先生も、取り上げない本来の打ち方は修得が困難なので、長いこと教えに行っていた精勇館道場でも、いったん肩の高さまで取り上げてから打つ仕方を教え、この道場でも初めのうちは同じように指導されていたが、このままでは本来の仕方が失伝されてしまうということで、晩年になって初めて本来の打ちを教えられた。本当のところを身につけるのはなかなか大変だけれども、その理論はしっかり覚えてほしい。

「天狗抄」

花車（かしゃ）

使太刀　左の肩を打太刀の身通りを外さず脇構えの太刀先を上げて、打太刀の方へ少しさしかかる様にして、左の足を先へなし腕を伸ばし、一重身（ひとえみ）に肩を打太刀の拳にくらべる味わいにて構える。

打太刀　上段の青岸にて太刀先を上げ、三寸にて序切り、その内に使太刀の肩を初めの身なりにて打つ。

使太刀　打つに従って上より直（す）ぐに打つ。

打太刀　打たれて上を用心して使太刀の太刀先を押える様にする。

使太刀　身を立て替え右の足を踏み込み、左の膝を折り敷き右の膝を立て、打太刀の柄の内、拳を打って合（がっ）する。

解

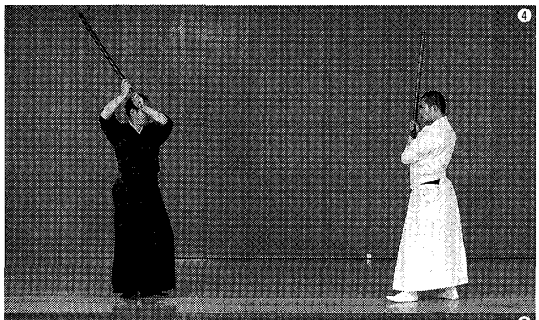
これは高き霞（かすみ）の構えなり。刃、天を指す。高きを打つ太刀なり。

この勢法は、打太刀、肘に浅く打ちきたるを、越して拳に勝つ。また打ちきたるを、使太刀、合し折り敷くものなり。

この形、柳生十兵衛、仇討（あだう）ちの小太郎なるものに、この一本のみを伝えしという説あり、さもあるべし。よく約め〔集約し〕尽せる所ある形なればなり。また、他にこれを新陰流カラ竹割りの太刀という。これ、撥草は横に払えども、霞太刀は竪（たて）に打つ故、この名あり。

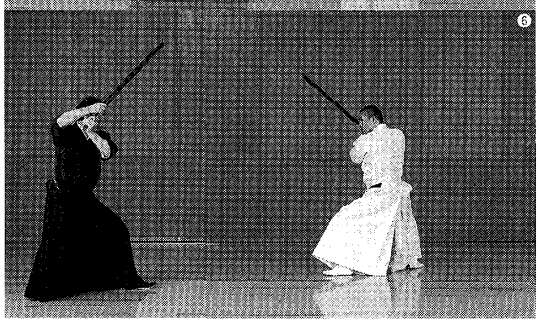
◎下の演武写真は『江戸武士の身体操作　柳生新陰流を学ぶ』（スキージャーナル社、二〇〇七年五月）一八〇、一八一頁『天狗抄』「花車」のものである。初め打太刀が使太刀の左肩を浅く打ち、次に左腕を真っ直ぐに打った後、三本目に左肩を深く打つ場面である。校正ミスにより番号が④⑤⑥⑦⑧となっているが、⑥⑦⑧⑨⑩が正しい。したがって「折り敷き」の説明も「8、9、10図」となる。このページを借りて訂正しておきたい。〔校訂者〕

花車（三本目）

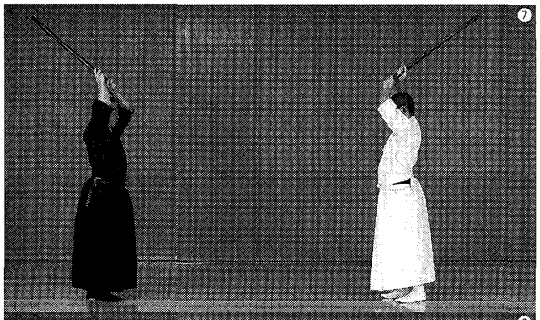


④ 打太刀・使太刀　元の位置に戻る

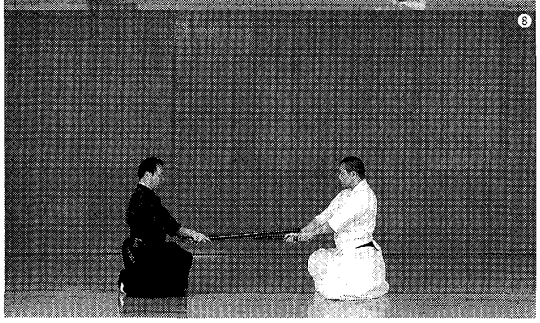
⑤ 打＝深く肩を打っていく
使＝体を最初よりも大きく右前に開き（目安・45度）、柄中を打つ



⑥ 使＝右斜めに開いた体をそのまま後ろに退きながら一重身になって逆の中段に構える
打＝使太刀に正対するように後ろに退きながら一重身になって逆の中段に構える



⑦ 打太刀・使太刀　互いに相手を見据え、太刀を廻し雷刀に上げ元の中心線に戻る
打＝正面を打っていく



⑧ 使＝柄中に十文字と勝ち、折り敷く（註4）
打＝打たれて、同時に折り敷く

註4　折り敷いたとき、右膝が左膝より前に出ないで、左足の土踏まずに右足の踵がつくことが勝ち口の一つである。足腰の力を剣先に乗せることが出来る。

◎写真について
演武写真は一場面ごとに動きを止めた分解写真なので膝が伸びているように見えるが、実際の動きは全て膝をえました動作である。特に上の3、4、5図の折り敷きは膝のバネを利かせてえましたところが勝ち口（勝つための術理）である。

◎霞太刀から切り下ろす場合、写真のように前にかかると剣先に力が乗り易い。しかし館長は膝をえまし足腰の力で真直ぐに切り下ろす。〔校訂者〕

明身

互いに一文字の中段にて序を切りかける。

使太刀　打太刀の太刀半分程へ、その身のかかりにて切りかけ、下まで切り落す。

打太刀　打たれてそのまま使太刀の身通り真中を上より打つ。

使太刀　それに従って打太刀の左の方へ座を替えて、下より十文字と、拳を打つ。

大方、九箇の和卜に似たる太刀なり。下より切るは、打ちて引き取りたるがよし。切りとむれば、強き打ちには打ちしかれる心あるものなり。

解

「その身のかかりにて切りかけ」云々は、やや斜めに順に切り落すことなり。

「打太刀は打たれて」云々は、使太刀、太刀かけて斜めに打ちきたるとき、雷刀に外し、一歩踏み込み、首へ真直ぐに打つ。使太刀、筋を外し、付け乗る心持をもって十字勝ち、拳を打つなり。

善待

たがいに中段の青岸なり。

使太刀　序を切りかけ、打太刀の太刀に乗りかけ、身位を少し沈めて、打太刀の両手の間、胸へ太刀先のなる様に切る。

打太刀　乗られて下より使太刀の後の拳を払い切りに切りて、後へ一足宛てしさる〔退がる〕。

初めは打太刀の打ちを見て、打ち合いきわえなるときは急に打つべし。乗りかけてからは無理に打っても勝つという心持なり。然るによりて善待無明というなり。切りくみは「左転」に似たる太刀なり。

解

使太刀、中段の青岸にて序を切り待つ。打太刀、進み来たりて左拳を打つ。使太刀、打太刀の両拳に乗りかけて進む。また打つ。また乗りかけて詰める。

手引

互いに一文字の太刀、中段にて序を切る。

打太刀　使太刀の拳を斜めに打つ。

使太刀　上に外し、打太刀の双手を切り、打太刀の左の方へ同じ身なりにて座を替え、太刀先を地に付けて、右の足を先へ出し、拳を膝頭の通りに差し出しておき、少し身を沈め、先の左膝に身をもたせて待つ。

打太刀　序切りを引きとりて、使太刀の両手の間へ、その身なりにて打ち懸かる。

使太刀　それに従い右の足手共に後へ引き、上へ越しかけて打太刀の腕拳をかけて打つ。

「九箇」の「村雲」に少し似たる太刀なり。

解

「右の足手共に後へ引く」とは、打太刀の左に寄ることなり。

乱剣

互いに上段の青岸にて序を切りかける。

打太刀　進みきたり、使太刀の左拳を打つ。

使太刀　片手太刀にて上段に外し、打太刀の拳へ真直ぐに切りかける。

打太刀　打たんと太刀を上げる。

使太刀　打太刀の左の方へ、ひっさげたる片手太刀に左の手を添え、刀捧（とうほう）となりて詰める。

打太刀　右に開いて裏を打つ。

使太刀　しさり〔退がり〕ながら廻刀して、真直ぐに拳に勝つ。

打太刀　また上段に上げ、打たんとする。

使太刀　その刹那、刀捧にて詰める。

打太刀　また裏を打たんとする。

使太刀　起りを、刀捧切っ先にて押し切り、折り敷く。

打太刀　また同じ〔折り敷く〕。

二具足（にぐそく）　両手に物を持つものの事

使太刀　水月の場にて大きくふわりと切りかけ見せる。

打太刀　両刀を持ち、左身先にして下よりはさみ上げる。小太刀にて使太刀の太刀を左に払いのける。使太刀の衣紋（えもん）なりに右足を踏み込み、切り懸かる。

使太刀　右の方へしさりなりに〔退がりながら〕拳に勝つ。

解

使太刀、無構え勢より竪一文字に変じ水月の場にて大きく色を見せる。

二具足打物（にぐそくうちもの）

打太刀　水月の外より、太刀をすらせて投げかける。左手、大刀、右手、小太刀を持ち、鳩尾（みぞおち）または面上に投げかける。

使太刀　進むなりに、太刀にて打ち落す。

打太刀　使太刀の打ち落す拳の納まるところに、右の足、踏み込み切り懸かる。

使太刀の勝ち味、二具足と同じ。惣身〔全身〕打ち明けて懸かるよし。

解

使太刀、霞の太刀にて進みよる。打太刀、小太刀を鳩尾に投げるのを打ち落す。続いて打太刀、切り懸かるを、右に寄り拳に勝つこと前に同じ。

二人懸り（にんがかり）

これは両敵を左右に迎えたるときの形なり。

使太刀　車の構えとなり疾（はや）く左敵に迫り、三重の心持をもって拳に勝ち、逆車となりて右敵を迎えるものなり。

柳生厳長（左）と神戸金七

新陰流を代表する場合、ほとんど２人で演武していた。昭和26年、厳長より尾張柳生の控宗家として師範印可を受けている正木坂剣禅道場元師範・大坪指方は、「厳長さんは工夫しすぎて新陰流を変えてしまった」と話されているが、神戸と演武する場合は、厳長も厳周伝を遺ったようである。（校訂者）

「燕飛」

燕飛

使太刀　中段、向構え。

打太刀　相構え、少しく青岸なり。

右足を進め、巻きかけて使太刀の拳を打つ。

使太刀　右の足を一足引き、左足を進め、太刀を右上に外す。

打太刀　遠く右足を後の右に引いて身を移し、撥草に構える。

使太刀　右足を前の左に移し、左足を右に移し、身を転じて切っ先を打太刀の肘に付ける。

打太刀　左右、足を踏み替え、使太刀の脇を払う。

使太刀　右の足を引きとりざまに、打太刀より切りかけた太刀を打ち落して遠く退き、左脇を前にす。

猿廻

使太刀　それより刀を上げ、右足を進めて打太刀の刀捧に取りたる左手を打つ。

打太刀　左手を外して刀捧に受け止め、左手の指にて刀の背を押える。

使太刀　左右、足を踏み替え、手をねじりて霞む。

打太刀　それより肩或いは上に上げた〔「上げて」を直す〕使太刀の肘を打つ。

使太刀　太刀を巻き返して打太刀の刀を支え、手に勝つ。

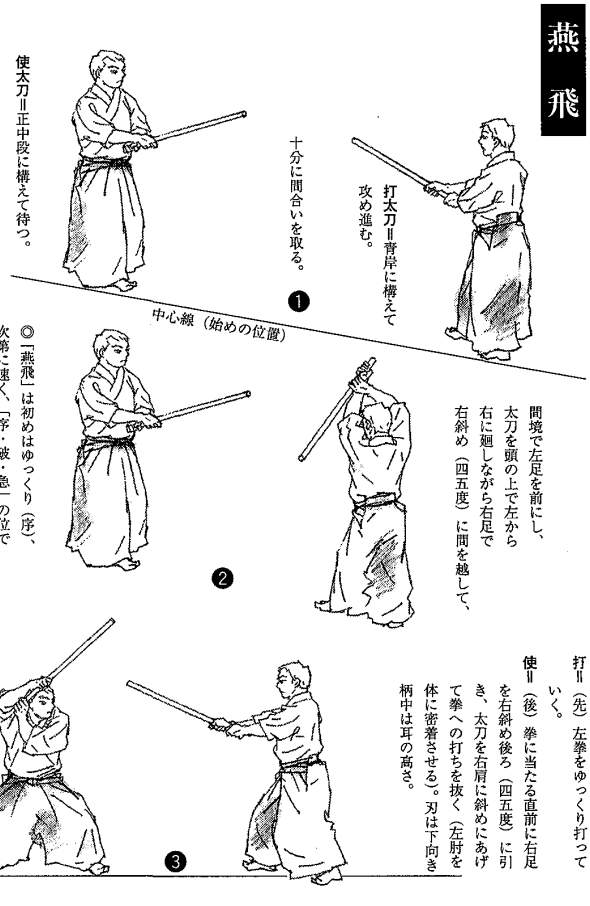
月影

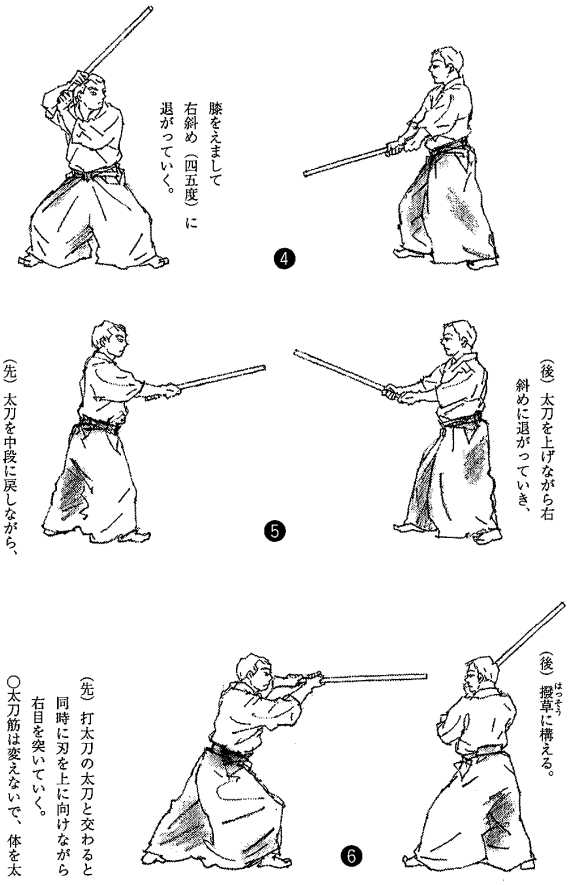
使太刀　車の太刀に引きとり構える。

打太刀　車に構え、一足踏み出し、使太刀の左肩をかけて切る。

使太刀　すぐに打太刀の拳へかけて打つ。

燕飛





山陰

使太刀　拳を見せかける。

打太刀　その拳を、足を立て替えて打つ。

使太刀　また足を立て替えて打太刀の右の拳を打つ。

浦波

使太刀　手をもじりて逆の下段となる。

打太刀　撥草、右脇構えより使太刀の膝を打つ。

使太刀　手足ともに立て替えて打太刀の両腕に勝つ。

浮舟

打太刀　巻きかけて使太刀の拳を打つ。

使太刀　横の上段に外す。

打太刀　手をもじりて、さし上げおる。〔参考　切甲で下から切り上げる〕

使太刀　外一つ、内を一つを打つ（外は右拳、内は左拳なり）。

打太刀　打たれて足を後へ一歩、逆中段に引き、脇構えとなる。

使太刀　左足前、順青岸に付ける。

切甲

打太刀　使太刀の青岸に付けたる拳を、左足を引き、使太刀の左拳を打つ。

使太刀　右足を前にし、打太刀の太刀を打ち落す。

打太刀　太刀を巻き返して、使太刀の拳を打つ。

使太刀　これを右肩上に高く外す。

打太刀　切甲にとり入らんとす。

使太刀　打太刀の右に変わり、柄の内を打つ。

刀棒

打太刀　使太刀の肘を払う。

使太刀　左足を前にして、手をもじり高く外す。

打太刀　刀棒に入らんとす。

使太刀　打太刀の両拳を打ち、左足を入れ、手をもじり下段に構える。

打太刀　片手刀を肩より使太刀の膝を払う。

使太刀　上太刀になるよう大きく巻きかけ、打太刀の拳を十文字と打ち、折り敷く。

小太刀三本のこと

上段

使太刀　直立ちたるまま小太刀を下段に掲げて進む。

打太刀　雷刀より進み来たり、片手にて衣紋なりに順に払う。

使太刀　真直ぐに人中路を打つ。

中段

使太刀　中段にして進む。前の如し。

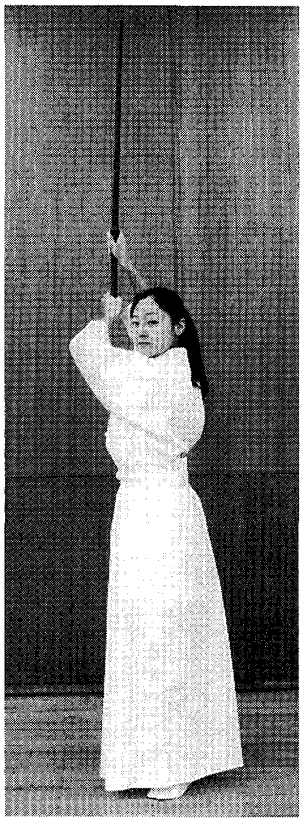
下段

使太刀　雷刀にして進む。前の如し。

勝ち口はおよそ五箇の身に従いなすべき事。

太刀は円相を外れざる事。

左手は自然にたれるままよし。右手、小太刀提げたる時は、拳かるく腰通りに付け、刀尖やや内側に向く。



燕飛「浦波」

「奥の太刀」

添截乱截

使太刀　左太刀。左の肩を打太刀の方へなし、左の拳を打太刀の方へなし、たとえば青岸の構えを左構えにしたる構えなり。拳を張りだし、太刀を平らめ序を切る。

打太刀　常の青岸に構え、序を合わせ、序の内より使太刀の肩へ、その身なりにて切り懸かる。

使太刀　身をそのままにて、打太刀の〔が〕肩を切るところを、上より並べて打太刀の両手の内を打つ。

打太刀　打たれてまた使太刀の後の拳へ切り懸かる。

使太刀　その身なりにて打太刀の左の方へ少し避けて、打太刀の右の腕首をその手なりにて打つ。
使太刀は後まで左太刀を崩さず遣うなり。

無二剣

使太刀　青岸の中段。太刀を平らめて序を切る。

打太刀　初めの「添截」の使太刀の構えの如く、左構えの青岸にて序を合わせ、序の内より使太刀の後の拳を切る。

使太刀　切るに従い、打太刀の左へ、少し座を開き、打太刀の左手首をくねり打ちにする。

活人剣

使太刀　向構えの下段。太刀先を下げて楽に持ち、すらすらと懸かる。

打太刀　中段の向構えにて「無二剣」の太刀をもって切り懸かる。

使太刀　打太刀の太刀を我が左に避けて直打する。打太刀のくねり打ちを右に開き直打する。

◎「無二剣」も「向上」も手首を使わず足腰の力で切る。このことが厳周伝の鉄則であり、また厳周伝新陰流を正しく遣えるかどうかの試金石である。

無二剣

向　上

向上

使太刀　向構えの少し青岸の上段。太刀先を捨て、待にして居る。

打太刀　すらすらと仕かけ、真直ぐに拳を打つ。

使太刀　右に開いて太刀をもじり左腕に勝ち、折り敷く。

極意

使太刀　〔太刀を〕提げて立つ。下段より青岸に見する。

打太刀　右腕に切り懸かる。

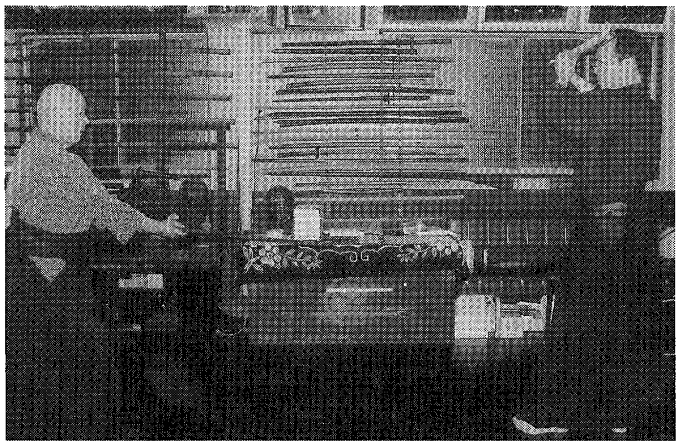
使太刀　逆に合して勝つ。

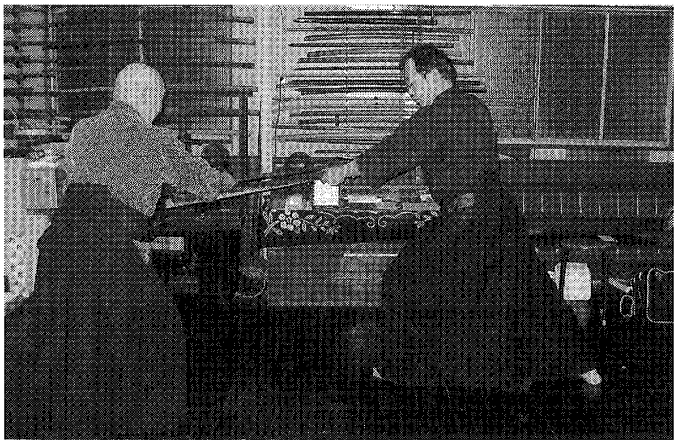
神妙剣

互いに向構え、中段にて相懸かりに懸かる。

打太刀　廻刀して腕にきたる。

使太刀　越して勝つ。即ち受け流すように廻しかけ、打太刀の腕首を打つ。





無二剣

「二十七箇条截相」

序　上段三本

大詰　一

始め提さげて出る。

使太刀　一文字の上段にて進む。

打太刀　中段にて使太刀の拳を打つ。

使太刀　後の角へ右肩上に外し、右の足を踏み込み打太刀の双手に勝つ。

斬釘　二

使太刀・打太刀とも提さげて出る。

打太刀　衣紋なりに使太刀の上げたる右腕を打つ。

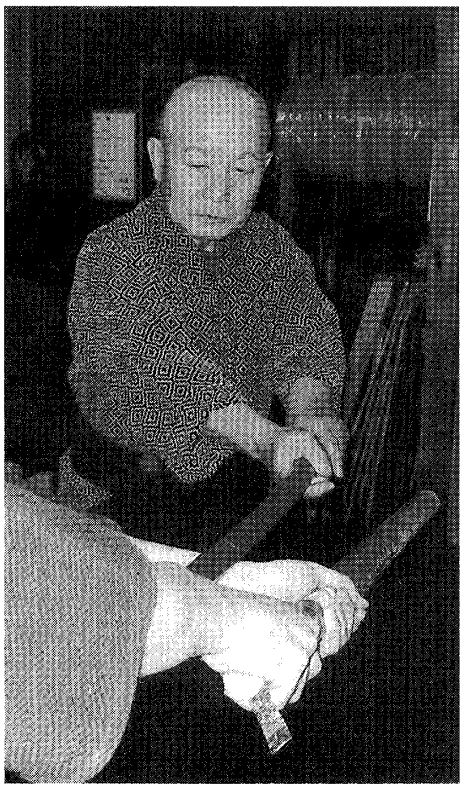
使太刀　受け流す如く打太刀〔の〕右にまわり右腕に勝つ。

打太刀　撥草にとる。

使太刀　間の抜けざる様に太刀先を打太刀の左眼に付ける。

臥切　三

太刀をさげ、惣身打たれざる心持を以てすらすらと懸かるべし。



右斜め前（三〇度・目安）に転身すると同時に、打太刀の右手の内側を手首まで切る。

打太刀　急に仕かけ進み、真っ向に振り上げ使太刀の足を切らんとする。
〔使太刀〕二星（こぶし）の起りを臥す拍子にて打ち、折り敷くものとす。

中段三本

右旋　一

互いに太刀を下段より、

使太刀　逆の青岸にとり進みよる。

打太刀　直中段より、使太刀の拳を打つ。

使太刀　打太刀の右腕首にくねり打ちの如く抜けて勝つ。

左転　二

互いに間をとり、打太刀、中段、使太刀、順の青岸にとり進みよる。

打太刀　左拳に切り懸かる。

使太刀　打太刀の左に転じて左腕に勝つ。

善待　三

打太刀・使太刀、共に下がり互いに序を切る。

打太刀　左拳に切りつける。

使太刀　善待の心持にて勝つ。

このとき使太刀は進みながら左により、打太刀、拳にくるとき、その太刀に乗り勝つものなり。

下段三本

一　打太刀・使太刀とも、心持、逆下段にて進みより、

打太刀　間をとり静かに進み、拳に切り込む（この切り込み、するどく詰める心持なり）。

使太刀　左の足を後、すみに開き、上げ外し、太刀を廻して双手に勝つ。

二　使太刀　左の足より後に下がり、

打太刀　仕かけ、前に同じ。拳に切込む。

使太刀　右の足を後、すみに開き、左の足を踏み込み双手に勝つ。

三　打太刀・使太刀とも、向構え下段。双方進みより、

打太刀　取り上げて頭へ来たる。

使太刀　下段より筋を外し、打太刀〔の〕拳に付け乗る。即ち和卜勝なり。

破　折甲三本

折甲　一

相中段、三寸に付け合わせ、

打太刀　巻き打ちにて使太刀の右拳を打つ。

使太刀　右足を引き撥草にあげ外す。

打太刀　折甲にかつぎ撥草を防ぎ入る。

使太刀　打太刀の右に替わって、手の内を打ち下ろし、下段となる。

打太刀　衣紋なりに順に切り懸かる。

使太刀　右足を踏み出し拳に勝つ。

折甲　二

使太刀・打太刀ともに中段。

打太刀　巻き打ちに使太刀の拳を打つ。

使太刀　引き上げ外して撥草にとる。

打太刀　太刀先下りの折甲に入る。

使太刀　我が右に替わって打太刀の手の裏を斜に打つ。全く「浦波」なり。

折甲　三

相中段、三寸に付け合わせ、

打太刀　巻き打ちにて、使太刀の左拳を打つ。

使太刀　その身なりにて受けとめる。

打太刀　巻き打ちに右拳を打つ。

使太刀　上げ外して霞の太刀となる。

打太刀　折甲に取り入る。
使太刀　引き打ちに折甲の拳を打ちながら折り敷く。
刀捧三本
刀捧　一
　前の如く中段。
打太刀　魔の太刀を仕かける。
使太刀　引き上げて外し、霞の太刀となる。
打太刀　刀捧に取り入らんとす。
使太刀　刀捧の中取りの手の上を打ち、下より打太刀の右の手をはねもぐる。
打太刀　撥草より肩を払わんとする。
使太刀　中墨（なかずみ）にて合（がっ）し折り敷く。
刀捧　二
打太刀　「捷径」の如く刀捧の下段にて進む。
使太刀　首に打ちきたる。
打太刀　刀捧にて受けとめ、摺（す）り入らんとす。
使太刀　手をもじり指を引き切りて霞（かす）む。
刀棒　三
打太刀　左手に柄を、右手、刀を支え進み入らんとす。
使太刀　先手を切り落す。
　相截り三本
切合　一
　付け外し切り、共に上段にして出る。
打太刀　三寸の付けより、順に強く太刀を摺（す）り込み真眉下（まびさし）を突き来たる。
使太刀　裏へ抜け外し肩を切る。
摺突　二
　共に上段。
打太刀　三寸の付けより疾く突き来たる。
使太刀　我が右に筋を外し摺（す）り突き。
引落　三
　前の如く互いに上段。打太刀・使太刀、共に摺り入り拳々相合す。
使太刀　両拳にて打太刀の柄上へかけ、我が左下に落し突く。
追加　四
　共に中段。
打太刀　魔の太刀にて使太刀の右拳を打つ。
使太刀　撥草に引き上げ外す。
打太刀　刀捧に取り、少し左手を防いで深く入り、突き倒さんとす。
使太刀　刀捧の上を、足を引いて打つ。
打太刀　なお押し来たる。
使太刀　疾く身を沈めて左手にて敵の柄先をすくいとり、我が左下に敵刀を引きとりて突く。

急

急の一調子
一、向構え　左の上段　右の上段　以上三ツ
二、向の中段　左の中段　右の中段三ツ
三、向の下段　左の車　右の車　以上三ツ
　上中下段合せて太刀数九ツ。
　右、急の太刀は、使太刀、活人剣の構え・心持にて、相手の切る九ツの太刀を、何れも一調子といい、その筋に従い真直ぐに打つなり。
　急の太刀の委（くわ）しき説明は、尾張柳生流の部参照の事

尾張如流斎討太刀目録〔打太刀目録の原文は省く〕

当新陰流兵法由来

それこの兵法は新陰流上泉伊勢守・藤原秀綱の奥源なり。後、武蔵守と号す。しかしてこの秀綱は常州神取の人なり。〔通説は上州大胡・群馬県前橋市〕若年より数家の兵法を学び、陰の流より一流を抜き出し新陰と号す。かねて兵法流布の志あり。永禄年中、信玄公に暇を乞い、弟子独り意伯を召連れ上洛の途次、勢州国司の許に到り、兵法練達の士を問う。

国司曰く。大和には柳生新左衛門とて五畿内に聞こえたる兵法者ありと。秀綱、これを聞き、和州に立ち越え宗厳と対面。試合数度に及びしと如雲斎物語のよし、厳包〔連也〕の咄しなり。予〔利方〕は聞かず。

曾祖父・柳生但馬守宗厳は壮年より千里諸家の兵法を学び、新当流とかや一流を極め、五幾内にて上手の名を得たる人なり。これにより秀綱と仕相望みしに、「しからば意伯と立ち合わるべし」と。宗厳、「さらば」とて仕相すること数度なり。毎度打たる。しない計れば宗厳の品柄、二寸ばかり長し。

宗厳、至極恐れ入り、内に入る。即ち水垢離を取り衣裳を改め上下着し、秀綱の前に至り、「今日より御弟子となりまかり候」とて、他事なく稽古はなはだし。

しかる処、秀綱、廻国修行の志やみ難く、柳生谷を出で西国行脚数年を経て、また柳生谷に帰来。宗厳〔の〕兵法稽古工夫のこと見届け、秀綱、心服満足し、永禄八年卯月、一流の目録並びに印可状を渡し、その上にて、「貴体〔貴殿〕程にもこれある者、無刀仕出し申すべし」と申され候ところ、宗厳、「さよう仰せこれある上は必ず無刀を仕出し申すべし」と誓約なさる。秀綱大いに慶び、「この上は今生に思い置くことなし、予死後に堂塔、僧法師供養、必ず無用の事なり。ただ無刀仕出し手向け給わるべし」と云う。宗厳、「おそれ入り候、御心安く御渡り候えかし。」これを二度の暇乞いとして、秀綱、関東へ下らる。

一別の後、宗厳は昼夜・旦暮、稽古工夫、間断なく、ついに無刀の道を開眼し、京、大阪、伏見へ出で数多の弟子を取り立て、それ以来、天下に柳生流と謂いならわすとかや。

父利厳は幼少より宗厳に仕え、兵法、稽古工夫、鍛錬浅からず、意心〔「以心」〕伝心の妙道を得て、宗厳の心に叶い、兵法の奥源を極め、その印を自筆にて得られ、天下に名人と号せられるに到る。

愚〔私〕は無器用無一文、その上病気はなはだしく、身心を狂わし、かれこれを以て兵法未熟に付き、二十九歳にして弟子取る事をやめしも、厳包は兵法を父祖に学び、劣らざる程の勝者となりたき所存にて、打太刀の意気を二六時中、工夫鍛錬しおわんぬ。

けだし打太刀の目録という事、古来なし。然ればすなわち、いらざる事かなれども、貴殿〔嫡男厳延〕稽古の為、または弟子示教の為、或いは子孫の為にもなるべきやと愚慮す。また愚、十有二三歳より如何なる貴慮あるにや、如雲斎〔利厳〕、太刀の事は時々御相伝これあり。上泉孫四郎方〔殿〕にも伝授なし給う。この趣捨て難く、かくの如く書き験すものなり。

干時貞享弐　乙丑

仲秋吉辰　　嶋如流斎

利方　花押

柳生兵助殿参る

右、討太刀目録、当流儀、柳生家伝来の意趣一巻は柳生茂左衛門尉入道如流斎の書記なり。幸いに予、これを得て書き写すものなり。

享保十一年丙午正月吉辰　本多輿兵衛　藤原信彦　花押

燕飛

長岡房成子曰く。

この六本は昔の表太刀なり。当流の始祖愛洲日向守移香、昼夜肝膽を砕き工夫せられし時、夢に鵜戸権現、猿の形ちを顕わし伝え玉わると見て、これを心悟して撰びしという。

奇なることなれども、管子にも「これを思い、これを思い、また重ねてこれを思う。これを思いて通ぜずんば、鬼神まさにこれを通ぜんとす」とあれば、始祖精神ここに凝り〔固まり〕、鬼神も感じ玉うらん。この形は懸待表裏、循環端無く、円転流利して刀路の自然に従わしめ、眼意身手足をこなすものなり。

しかるに今の人は、かように動きある形は意味も知らず拙き様に思い、ただ身も動かずして静かに一つ打つ類の形を見て、向上なる形とのみ思うは如何あらん。世人、円明流円曲の形を見て向上至極の意ある様に思えども、武蔵が意は、ただ太刀路を振り習わせんためばかりにして、深意があるには非ず。武蔵は別に深意が形の外にあるなり。形に深意があるに非ず。また貫流の槍の表は手強き形にて、さして深意も無き様に世人これを見れども、流祖の深意ある形なり。槍合の形は初学の試合のために仮に撰まれし形なれども、世人かえってこれを称美す。これらは皆、業の拙きが故に目の及ばざるなり。

上泉子の書〔『影目録』〕に曰く。

懸待表裏は一隅を守らず。敵に随って転変し、一重の手段を施す。あたかも風を見て帆を使い、兎を見て鷹を放つ如し。懸をもって懸となし、待をもって待となすは常の事なり。懸は懸に非ず。待は待に非ず。懸は意、待にあり、待は意、懸にあり。牡丹花下の睡猫児〔睡っている小猫〕、学ぶ者、この句を透得して識るべし。もしまた向上なる人来たる時は、更に不伝の妙を施さん。

「懸待表裏」とは、懸かりたり待ちたり、表と見せて裏を、裏と見せて表と変化することなり。

「一隅を守らす」とは、懸待表裏を四隅あるものにたとえて、一隅ばかり守れば三隅の守りが欠く。よって一隅ばかりを守らずして四隅ながらよく守り居るという心にて、懸かることにても待つことにても表にても裏にても、何事にても一つに泥まずして、みな一円に備え置くことなり。

「敵に随って転変す」と云々は、その敵の様子に従って、それぞれにまろびかわり、一つの手だてを施すこと、あたかも舟子の、風を見て帆を使い、猟子の、兎を見て鷹を放つが如しということなり。

「あたかも」は、ちょうど、ということなり。「懸をもって懸となす」と云々は、懸かるを懸かるばかりとし、待つを待つばかりとして懸たり待たりするは、転変を持たざるわざなり。常は変の裏にて無変という意なり。無変は兵道に非ず、兵道は転変の道なり。「懸は懸に非ず」と云々は、懸かるが懸かるばかりにてもなく、待つが待つばかりにてもなく、みな転変を含み居る故、懸かることをする時は、意は、はや待つ上にあり。待つことをするときは、意は、はや懸かる上にありということなり。

「牡丹花下の睡猫児」とは禅語にて、唐の嘗洲慧祚禅師が洞山の喫果子の話を頌して云いたるその結句なり。その全偈は、

洞山の果子誰れか分無し　台盤を掇退して妙に機を転ず
今夜君のために軽く點破す　牡丹花下睡猫児

と、この結句の意なり。懸待表裏をなすそのもと故、これを引いて畢竟の意をいいたるなり。それ故、この睡猫児は睡猫児なれども人々心悟せざれば分からず、冷暖は呑まずんば知れず甘辛は嘗めずんば分からざるが如し。会〔理解〕せずんば先づよく情識念を去って、人々天に得る処の「虚

霊〔心〕不昧、衆理を具えて、万事に応ずるもの」を研き窮むべし。我れも知らず人も知らず、自然に、物と推し移るの妙処あり。誤って猫が豊にねむり居る様なる無心の場と思う時は大いに違うなり。「学ぶ者、この句を透得して識るべし」とは、修行する者、この句の意味を根底まで透りぬけて、とくと知るべしということなり。識は、よく分ち知ることなり。「もしまた向上なる人来たる時は、則ち、更に不伝の妙を施さん」とは、睡猫児の句もとくと弁えて向上なる処に至りたる学者来て、この上の僉談せば、また愈々口にても云い伝えられぬ所の妙路を教えてやらんということなり。「更」はまた「愈」の意を含む字なり。この上にということなり。

燕飛は懸待表裏の行、五箇の旨趣をもって簡要となす。いわゆる五箇は眼・意・身・手・足なり。

「懸待表裏」は前に説く。「行」とは「しわざ」のことなり。「五箇の旨趣」と云々は、五つのむねのおもむきを肝心かなめとす、ということなり。

「いわゆる五箇は」と云々は、五つと云うたは「眼・意・身・手・足」の五つであるということなり。この旨趣は偈を作りて示す。

枯木龍吟の意　髑髏眼睛〔目玉〕を開く　身形浄裸々　手足脉初清

この旨なり。これを簡要として懸待表裏のしわざをする形なり。故に喜識尽きて牡丹花下の睡猫児を現ずるなり。現ずればこの睡猫児、元より山野に群をなし隊をなす。又つばさなくして天に飛ぶ。これ燕飛、これ猿廻、これ山陰、これ月影、これ浦波、これ浮舟なり。ただこの一本の言句を離れ、形を離れて能く会得すべし。実にこれ切れども截れず、刺せども傷れず。この如く、この処を禅味によって解く事は、上泉子、石舟斎、如雲斎三子、共に禅学有りし人ゆえ、兵法の要妙〔「要名」を直す〕をみな禅味によって解かれしなり。しかれども未だ了解せざる人は、前にもいう「虚霊不昧、衆理を具えて、万事に応ずるもの」を、天地一枚の鏡の如き場と心得て能く工夫すべし。禅もまたこの外ならず。

猿廻は敵に随って動揺して、弱をもって強に勝ち、柔をもって剛を制するもの。学ぶ者に伝付する舌頭上なり。この流は予が久しく日々摩利支尊天の秘法を権修して日夜鍛錬工夫し、尊天の感応をこうむり忽然として自己の胸襟より流出するものなり。

「敵に随って」は、前に説く。「動揺」はうごくこと。前の「敵に随って転変」を、ここでは軽く動揺といいたるなり。「弱をもって強に勝つ」とは、心静かにちからも出さず、身も力まず、生れ付きのままにて、はなはだ弱き様に見ゆる処を以て、敵の、力も強く身も力みて、はなはだ恐ろしき様に見え、心もいかつにあらけなく、さわがしき処に勝つことなり。

「柔をもって剛を制する」とは、身体、水の如く柔らかに一つもかたよりたる処なく自由自在に解けたる処を以て、敵の、かたくしやごわに丈夫なる処に勝つものということなり。二句共に同じ意なり。

「学ぶ者に伝付する舌頭上なり」とは、これは修行するものに愛洲子が云い伝えられし口先であるということなり。この心は、微妙の処は口にて伝えず、口にて云い伝えられる処は口先ばかりで妙処でなく、真の妙処は自身の胸中より出たる処であるという心なり。しかし云い伝える処が規矩というものにて、この規矩を捨ててはまた妙処は得られずと知るべし。

「この流は」というより終りまで、この流はとは陰流をさす。予とは上泉子のこと。年久しく摩利支尊天の武術を修行して夜昼鍛錬工夫したれば、尊天の御かげを蒙り、ちらりとして自身の胸中より妙処が流れ出た流であるということなり。「胸襟」は胸中というと同じ意なり。

上泉子は天の橋立切れ戸の文殊に参籠し、猿廻にて必勝の術を悟り、天下無双の剣となりしと伝う。必勝の術は何れの形にもあることなれども、上泉子は分けてこの形にて悟られしとなり。

如流斎「打太刀目録」の解

燕　飛〔本文・但し混乱がある〕

燕　飛

使太刀　構え中段なり。〔打太刀、青岸　使太刀、直中段〕

打太刀　魔の太刀を仕かける。

使太刀　三つの拍子に外す。

打太刀　雷刀〔撥草〕に被る〔「被り」を直す〕。

〔使太刀〕右〔左を直す〕の足を踏み込み、打太刀〔使太刀を直す〕の二の腕に付ける。

打太刀　使太刀の肘より柄中をかけて引き払い斬りに切る。

使太刀　打捨てに相かけ、そのまま真っ向を打つ。

打太刀　刀捧にて請け合わせ取る。

使太刀　引き切りて霞む。

打太刀　手の内〔引き〕切られ、引き取り、右肩に横雷刀を片手太刀になり構える。使太刀〔の〕左の肩頭を掛けて手高に切る。

使太刀　すなわち切り合わす。

猿　廻

使太刀　少しもじる様にして車の構えに直す。

打太刀　同前に直し、左肩を切る。

使太刀　相懸かる。

打太刀　右の足を踏み出し、また切る。

使太刀　抜き越し、打太刀の右の腕へ勝つ。

打太刀　引き取り、右の肩に払いの構えに直す。

〔解説　「打太刀、払いの構えに直す」より山陰の打太刀なり。〕

山　陰

使太刀　中下段の間にもじり、打太刀の膝通りに付ける。

打太刀　太刀の中より使太刀の膝通りを払い切る。

使太刀　引き越して打太刀の両腕に勝つ。

月　影

使太刀　引き合わせ下がりもじる。

打太刀　魔の太刀を仕かける。

使太刀　高く頭の上に切っ先を右にし、横雷刀に構える。

打太刀　折甲に構え、左の足を踏み出し、折甲の両手の間より見る。

使太刀　打太刀の両拳を上よりチャンチャンと切る。

打太刀　すなわち引き切る様にし、逆の〔「逆の」は原文にはない〕中段に位を直す。

使太刀　同じ構えになる。

打太刀　雷刀に被り踏み込む。

使太刀　二の腕を切る。

浦　波

打太刀　引き払い切る。

使太刀　打太刀の肩肘より右拳を掛け、ひっしと切る。息両膝をえまし足を立て替え下りもじる。

打太刀　魔の太刀を仕かける。

使太刀　いかにも高く右の肩頭に太刀をあげる。

打太刀　折甲〔となり〕左の肩頭に被り、左の足を踏み出す。

使太刀　チンムと打ちて右足を角へ引き開く。

打太刀　払い切る。

使太刀　高く霞む。

浮　舟〔欠文のため解説により補う〕

打太刀　左身にて刀捧に取る。

使太刀　刀捧の中取りの先手を打って右の手首に移る。

打太刀の拳の下より揚げるようにもじり、〔膝の通りに置く。〕

〔打太刀　片手太刀にて使太刀の膝を払って居り敷く。〕

〔使太刀〕魔の太刀にて合し〔居り敷き〕勝ち、終わる。

右、燕飛は、初・破・急、三段の習いこれあるなり。惣じて打太刀より仕かける法なり。声も三度あるいは五度なるものなり。打太刀より懸かるなり。「初」は、身はもちろん心意とも鎮にして、「破」は、心意ともに浮き立ち、体をもまずして心の意を「急」にすること肝要なり。これは上泉孫四郎方〔殿〕、如雲斎の前にて伝授なり。如雲斎の挨拶、よく訓え給わるべし。よく習い覚え申すべき由とのことなり。

解　説

当流にては我れを使太刀といい、敵を打太刀という。これもまた陰流の意を含んでのことなり。「打太刀目録」は敵方になっていう言葉なり。構えの上中下は伝にいう、腰より下を下段といい、腰より乳までの間を中段といい、乳より肩までを上段といい、肩より上を雷刀というとあり。車は下段の内、青岸は中段の内、撥草は雷刀の内なり。

魔の太刀、これは古の輪の太刀なり。輪の太刀は太刀をまわして打つをいうなり。

「三つの拍子に外す」、これも序破急の三ツ拍子なり。心の下作りのよく調いたる処より起り、すきまなく激しきところに至る位なり。

「燕飛」に雷刀とあるは、みな撥草に上げるをいうなり。この時代は戦国なればなり。よって今の雷刀は稀なり。今の雷刀は如雲斎のころより多くなって連也子のころに盛んなり。

「打捨てに相かけ」、これは敵の拳を打ち落す〔も〕のなり。それが太刀と太刀と相がかりたることもいうなり。張り止るも相かける〔も〕のなり。広き言葉なり。

「刀捧」、これは中取りして受けるをいう。刀の背を掌にて受けて刀を捧げる形に似たるを以て刀捧というなり。〔「とうほう」ともいう〕

「引き切りて霞む」、これは手をもじり刃を上にし、敵の手の内を引き切りて別れたるままなるを霞むというなり。太刀先を高くし霞の太刀となることには非ず。かえって太刀先は少し低きなり。他流にもこの類あり。昔の言葉と見えたり。「浦波」の処に出す。

「引き取り、右の肩に横雷刀を片手太刀になり構え」云々、これはやはり刀捧のまま引き取りたる形ちなり。先、手の指を切られたる故、片手太刀というなり。先、手を放って分けて片手太刀になることに非ず。「長短一味」の、打太刀、下段より取りかけ打つを、上段にして身に争うと書きたるがごとし。この類よく活かして見るべし。

口伝書の内にはこの類多し。よってその意にて見るべし。

「猿廻」の初め、「少しもじる様にして」とは、刃を順に少しもじる様にすることなり。これは直ちに車になるときは敵よりそのまま拳を打つ間あり。故に拳を少し左に向けて防ぎ、少し引いてそれより車に直るなり。

「月影」の初め、「浦波」の打ち合せも皆これに同じ。拳をもじることと思うべからず。刀を順にする意なり。

「猿廻」の相かけは敵の拳を斜に打つ意なり。これ刀中にて太刀と太刀と相懸かりたる処なり。「打太刀、払いの構えに直す」より「山陰」の打太刀なり。誤ってここに入る。

「月影」の「打太刀、引き切る様にし中段に位を直す」とは、打たれる拳を外さんと右の脇に引きおろし身を少し引き、逆の中段にしたる〔も〕のなり。「使太刀も同じ構えになる」は、これも逆の中段にそのままなるなり。始めの三つ拍子に外したる形ちに似て、少し低きなり。また位を直すとは違うなり。位は内、構えは外のことなり。故に今は打太刀、中段に構えず、直に身を少し引き撥草に上げるなり。使太刀もただ位を取るばかりなり。これは破の拍子となってから、またゆるむが故に構えは直さざるなり。またここに雷刀とあるも撥草のことなり。

「浦波」の内に「両膝をえます」とあるは、春先生云く。膝に力をとることなりといえり。この心好し。膝を張り過ぎるは悪し。

春先生は道機厳春子のこと。

「高く霞む」というは、右の肩の上に高く拳をもじることなり。霞の太刀とは違うなり。霞の太刀は「天狗抄」の初めの構えなどなり。撥草の少し直なるものなり。ここに高く霞むとあるは高く手をもじることなり。霞の太刀には非ず。

「浮舟」の打太刀のしまいの打ちを誤って載せず。欠文なり。味方の拳の下より使〔太刀〕、揚げる様にもじり、膝の通りに置く。味方、片手太刀にて使〔太刀〕の膝を払いて居り敷く。使〔太刀〕魔の太刀にて合し、居〔折〕り敷き勝つ、となければならぬなり。

惣体この書は、はなはだ荒きものにて、位、間積り、刀路の定理を失うところもままあれば、全く下書きなど〔に〕して、出来たる書に非ず。ただこの書は昔の大略を知るまでなりと思うべし。

春先生も、この書ことごとく信ぜば書なきにしかず〔劣る〕と云えり。

序破急三段の習いとは、初めは緩々と使い出して、次第に早め、しまいは至って早く使うことなり。ここにまた心持の修行を解いて「心意共に鎮め」とあるは、心静に能く調うるところより険なるものを開くなり。「心意ともに浮き立って」とは神気己に盛んなるものなり。『不捨書』にいう浮立の意なり。

「心意を急にす」は、枝葉書にいう速やかに静かなる心なり。三つともに畢竟〔つまり〕、本来の霊機を磨くのことなり。本文誤って「急」の字が欠字す。文もまた聞えにくし。強いて本文を詮索すべからず。兵法は本、神速の道なれども、修行の仕方は心身ともに全て序破急にこえたること無し。およそ得ざる事は、まず「序」になしてその理を得、その理を得て「破」に移し、破に能くなれば眼意身手足、順なり。順になって「急」に移す。急、能くなって「石火を撃ちて、電光閃く」の機を得て成る。よって当流表太刀の初め、「燕飛」の使い方に序破急を付け置きしものなり。これにて形毎にあるところの懸待表裏のしわざを神速に眼意身手足に得せしめんがためなり。

声を懸ける事

これは気を助ける故なり。一切のもの機あればこれ声ある故に声気という、とあれば、声はやはり気の発するなり。よって人は、息を呼するときに声出で、息を吸うときに声止む。息は気の出入りなればなり。息の満ちて発する勢は強く、発し尽くれば抜けて弱し。よって息を吸いて気を内に満ち、息を呼して気を強く外に発せんがために声を懸けるなり。故に声を懸ければ神気を助け、力を助くるなり。よって、

一　打透する処　二　伏して発する処　三　決断して発する処　四　軽く乗る処　五　委曲して発する処

など声を懸けることなり。

（一）初学、物を能く切り透さんとする時に声を発して長く引き、引き声にて突き切れば透りにくきものも必ず透る。これ気を助けて

打刀の余る勢いにて突き切るなり。

(二) また伏して発するところは、余りなく気を発せしむるなり。たとえば戦場伏兵の、一度に鬨の声をあげて懸かるがごとし。勢いを助くるなり。

(三) 決断して発するところも、気体専一ならしむるなり。

(四) 軽く乗るところは、速やかに気体一致ならしめんがためなり。

(五) 委曲して（敵の業にのる）発するところは、気をして不尽ならしむるものなり。

声を懸ける意、大略このごとし。余は類を以て推す〔推測する〕べし。故に軽く当るところなどには発せざるなり。皆、実するところに用いる。また声について勝つところあり、負けるところあり、得あり失あり。「蔡裔が床を打ちて一呼して、三盗俱に落ちて死す」の意もあり。思うべし。

「燕飛」に懸けるところは、大略、打太刀は決断して打つ処、使太刀はこれに乗りて決断したる処なり。打太刀より懸けることは、使太刀をして愈〻その気に乗らしめんが為なり。また五声に懸けるときは、初めの打捨て、「山陰」の打ち、「浦波」の大切りと、拳を打っていく処と、「浮舟」の終わりと、五つ処に懸けるなり。

ただし打太刀は、「浦波」の受けるところには懸けず。また三声五声と定まりたることにもあらず。一ト声にても二タ声にても、また懸けずとも心次第なり。もし一ト声懸けば、「浮舟」のしまいに懸けるなり。

また初めに声について姑く息のことを述ぶれども、ここに述ぶる処の息は打つときの息の事なり。全体の息のことにはあらず。全体の息は、能く治まりて、脱せず含まずしてあるは上なり、含むは中なり、抜けるは下なりといえり。

この形、刃背平を使うことあることを教える。まず手の内のこなしなれども、前にも説くが如く「巻舒〔巻いたり延したり〕万変、循環端なき」位ゆえ、運刀自然の妙路ありて自ずから刃背平を使うことも出来て、少しも打ち切れる処なく、昔の「風水の音」、「連拍子」、「太刀連」等の教えを眼意身手足に習わすなり。故にその勢、風来れば浪起り風去れば浪鎮まるがごとく、機に連れ太刀に連れるなり。切るも外すも懸かるも待つも皆この位の中にあれば、ただ月影のみとなって、切るに当れば忽ち切る。よって切ることのみに拘らず種々の習いを含むものなり。またこの形、木刀にて使うも刃背平を能く分たしめんがためなり。

韜は丸きもの故、手心、刀の柄と違う。木刀は刀に象りしもの故、手心、能く似たり。よって常に持ちなれて刃背平をこれにて細かに覚えさするなり。さてまた言の序に云う。木刀は古秦の陳勝、「木を斬りて兵となす」、これなり。これは鉄刀少なき国ゆえ作りしなり。今は稽古道具とするなり。しないはもと韜という字を書くなり。韜は剣衣にて今の皺皮の事なり。古このひきはだに竹を入れて剣術を習いしより始まる。しかるに世俗、品柄と書くは誤りなり。品柄は今の竹刀の事、竹刀は今の品柄の事にて取り違いなり。されども世俗の取り違いは改め難し。これのみにもかきらず脇指と小刀と称呼を取り違う。また今の刀はもと太刀にて、鉄刀、長刀、横刀、帯刀、佩刀など書くなり。しかるを長刀を誤って偃月刀の事とす。また今の脇指は中刀、急抜、副刀、短きは短刀、小刀、刺刀、七首、解手刀など書くなり。しかるを小刀を誤って削刀の事とす。また甲冑は、よろいかぶとなりしを誤ってかぶとよろいと読み違う。この道を学ぶものの為に参考として附言するものなり。

「三学円の太刀」

一刀両段

使太刀　車の構えなり。

打太刀　中段にて仕かけ、使太刀の頭、肩かけ真直ぐに打つ。

使太刀　真直ぐに上より打太刀の右肩より肘のかかり拳へ打つ。

身積り・位・打ち様悪しければ当たる。

打太刀　遠く引き上げ、右の足を引き、右〔左を直す〕の頭に被る。

使太刀　右の足を打太刀の左方へ踏み出し、左足を後の角へ踏み開き、三角にて打太刀の肘あるいは腕へ両段と付ける。

積り・位・悪しければ当たる。付け平らめすぎれば太刀を打ちひしがれ、直なれば膝のあたりを打ちかけられる非あり。

解説

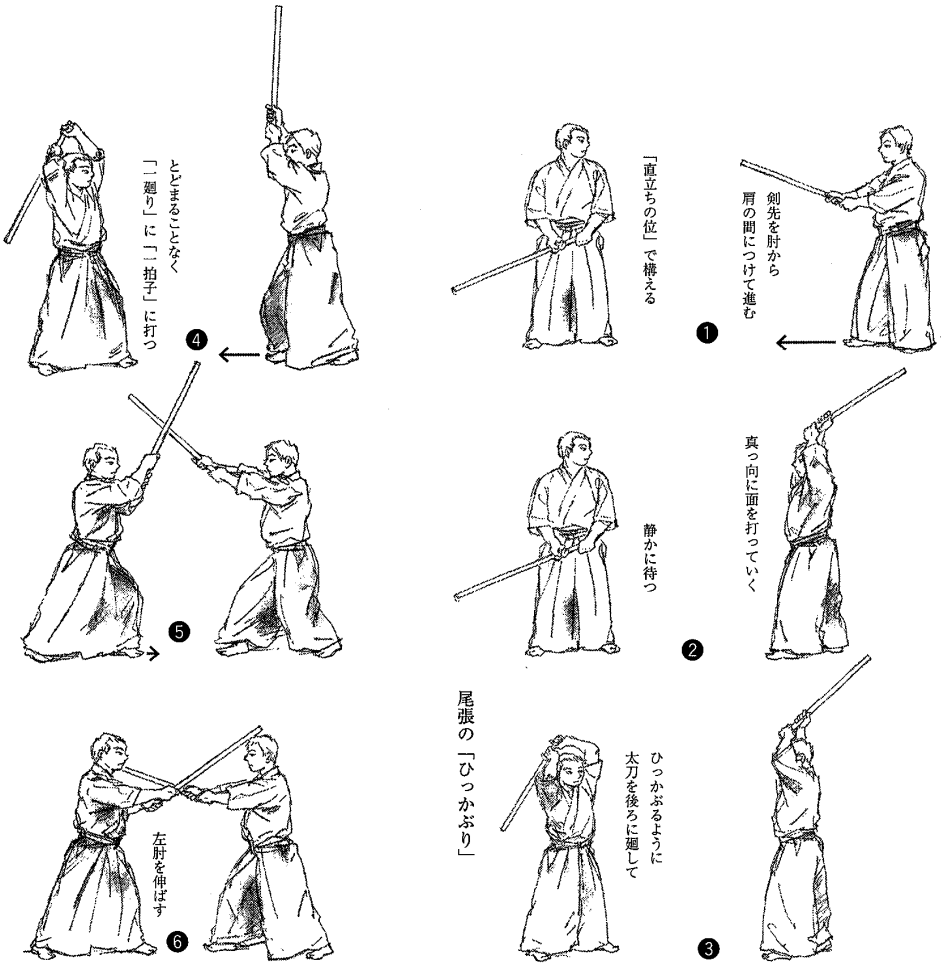
「車の構えなり」とは、昔より車といい来たって、他流にてもいうことなり。『武備志』には腰打勢という。この当時は、身を沈にして前にかかり、拳を少し後に置く。「打太刀、中段」、これも「燕飛」の打太刀と同じく、足を踏み開き、低き中段に構え、使太刀の肘に太刀先を付けて出るなり。「使太刀、真直ぐに上より打太刀の右肩より肘のかかり拳へ打つ」とは、この頃は浅き打ちにて、すべて首へは打たず、少し筋かえて打ちしものなり。「身積り」とは打ち出す自然の身形なり。「位」とは太刀を使う時〔の〕心のすわり処なり。

如雲斎の歌に、

位とは行住坐臥に動静に
直立つものぞ位なりけり

左図のイラストは、古伝・江戸遣いの「一刀両段」に対して、尾張柳生独得の「合し打ち」であり、連也が考案したと言われている。上の「打太刀目録」の「一刀両段」はそれ以前の勢法。

一刀両段（合し打）



○剣先は下がっているのではなく、2図、3図、4図と剣先は円を描いて上がっている

「打ち様」とは即ち嶺谷の打ちにて拍子もこもるなり。

「打太刀、遠く引き上げ、右の足を引き左の頭に被る」と、これは本書の誤りにて、右の頭なり。これは斜に使太刀の手を撥わんと右の頭に被る〔も〕のなり。右の頭とは右の鬢上のことなり。

「両段」の処に「肘あるいは腕へ両段と付ける」とあり。これは打太刀、右鬢上に被るゆえ、肘あるいは腕の内へ付けるなり。

斬釘截鉄

使太刀・上段、打太刀・中段にして相懸かりに懸かり、

打太刀　太刀中より肩を真直ぐに打つ。

使太刀　足を立て替え、身を入れ替え、打太刀の右の腕へ抜けて勝ち、両膝をえまし詰める。

身積り三角なり。拳浮けば下より弾ねる非、これあり。位・積り悪しければ当たる。

打太刀　太刀を引き上げ、右〔解説により左を直す〕の肩頭へ被る。

使太刀　足を立て直し、打太刀の腕肘へ「截鉄」と、「両段」の如く付け勝つなり。

解説

「相懸かりに懸かり」とは、打太刀も使太刀も共に進み出ることなり。

「太刀中より肩を真直ぐに打つ」とは、太刀かけて左肩より斜に打つことなり。ここに真直ぐとあるは言葉なり。懸かるより真直ぐに肩かけて斜に打つことなり。肩は横なり、真直ぐに打てば首なり。斜に打てば太刀中より肩なり。「使太刀、足を立て替え」と云々、これ今の使い方と同じけれども、昔は直ちに抜けて勝つ。

「両膝をえまし詰める。身積り三角」ということ、抜けて勝ちたる時の形ちなり。勝ちたる後にて作ることには非ずと知るべし。

また「えまし」ということ、「燕飛」の中にいう道機先生の説に、膝に力を取ることなりといえり。これに従うべし。また替えて打ちたる自然の形ちは、前膝は抜き、後の膝は少し張る心なり。

「詰める」というは、敵の身に近く詰め寄りたる意なり。「三角」とは替えて打ちたる身形、おのずから三角になるゆえなり。「拳浮けば下より弾ねる非あり」と、これは拳の高きを嫌うなり。「打太刀、太刀を引き上げ左の肩頭に被る」と言う。これも右の頭なり。字の誤りなり。

半開半向

使太刀　構え、中段。方の積りに少し平めなり。

打太刀　中段にして使太刀の後の拳を打つ。

使太刀　右の足を半分、後脇へ引き開き、くねりて打太刀の両腕に勝つ。

打太刀　太刀を引き取り、右の足を角へ引き〔解説〕、太刀を頭に被る。

使太刀　打太刀の左の足の方へ右の足を立て替え、左の足を角かけて開き、三角になりて、打太刀の腕または肘へ半向と付け勝つ。

解説

「方の積り」、これは新当流にていうなり。曲尺の方〔直角〕なるに譬えていうなるべし。その構えを少し伸ばし、また平めにして構えたるなり。やはり青岸の構えのことなり。

「くねりて打太刀の両腕に勝つ」とは、順青岸より逆青岸に似たる構えにて、抜け勝つを意味する。刃は双手切りになるにより、斜め下、右下に向かう。半向のところ、「打太刀、太刀を引き取り、右の足を出し」云々、これも本文の誤りなり。太刀を引き上げ、右の足を角へ引き、太刀を頭に被るなり。

右旋左転

互いに中段にして文の切り合いなり。太刀に争う。

使太刀　切り落し、左の足を踏み出し、右の足を詰める。打太刀の右腕へ抜けて勝つ。

打太刀　柄の中へ打つ。

使太刀　相かけ、拍子を越して少し開く心持に身構えなし、打太刀の右肩より拳をかけ左転と勝つ。積り・身構え悪しければ当たる。抜けること叶わず。

解説

「文の切り合いなり」とは、文は太刀にて拍子を取り、小さく打つことなり。この切り合いとは、打太刀は使太刀の太刀先を打ち払わんとし、使太刀はこれを打ち落す意にて、互いに拍子を取りながら緩やかに切り合うことなり。よって序の切り合いともいうなり。序とは緩やかな拍子の事なり。

「太刀に争う。使太刀、切り落し」云々、これは打太刀、使太刀の太刀を打ち払わんと太刀先へ文を切りかけ前を塞ぐ時、使太刀、その拍子を切り下げ、裏に抜け、左足を踏み出し、右足を詰めて、敵の右手を勝つなり。初め、足を大股に踏み開き構え居る故、左足を踏み出し打たねば当たりがたし。よって左足を踏み出し右足を継ぐなり。この拍子を抜けて勝つものなし。

「打太刀、また柄の中へ打つ」と云々、これより「左転」なり。この時代は使太刀の左の角へも寄らず、青岸にもならず、文も切らず、抜けて勝ちたるままの所を、打太刀より直ちに順に柄の中へ打つ。使太刀、そのまま逆に相架け流し、魔の太刀にて越して少し開き、打太刀の右肩より拳をかけ左転と勝つなり。これ場中にて遣うものなり。この頃は、これも「一刀」、「斬釘」、「半開」等の如く一本にて勝ち口は二つなり。ゆえに口伝書にも三学五本と言う。

長短一味

中段、切り合い、位を取り争う。

使太刀　変化して「一刀〔両段〕」の構えの如く、両膝をえまし、拳を両の箙〔新陰流では腰のこと〕の間に置く。もっとも一重身なり。太刀先、前へなす。

打太刀　使太刀の肩頭をかけて打つ。

使太刀　一味と勝つ。位・積り・身構え悪しければ当たる。

解説

「中段、切り合い、位を取り争う」とは、やはり文の切り合いというと同じ意なり。

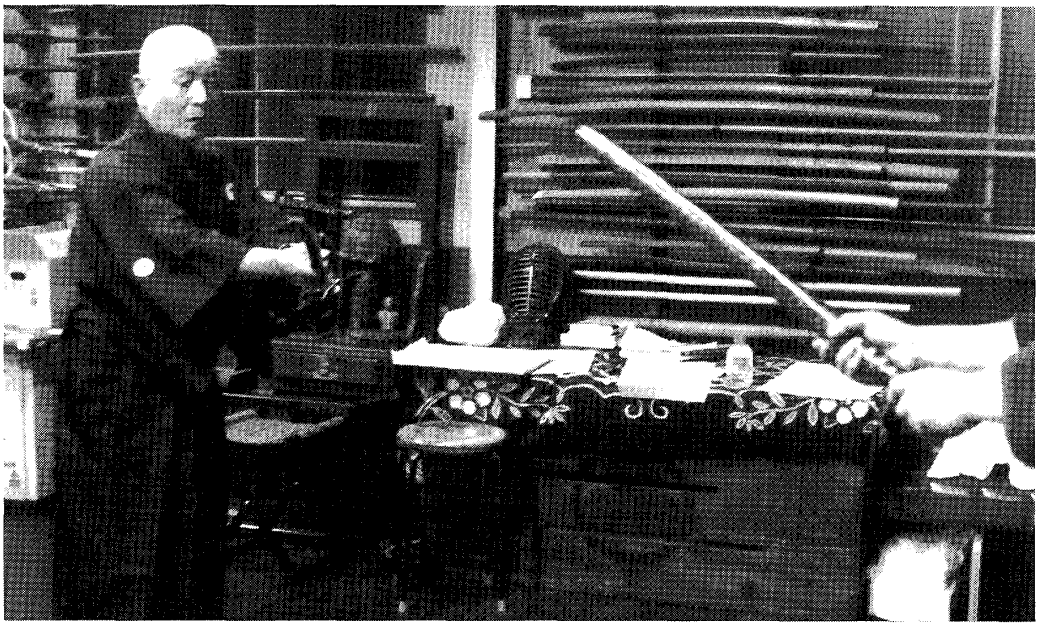
打太刀、ただ小さく文を切りかけ位を争うなり。使太刀も同じ。

「使太刀　変化して一刀の構えのごとく」云々、これは古今使うところ同じ。変化の時、不意によく捨て、合気を離れたるを好しとす。これも勝ち口は浅く筋かえて打つなり。勝ちての後、打太刀ともに後足より身を引き、また車になるなり。切りこみたる形ちは「一刀〔両段〕」の古き使い方の如く浅く柄中へ斜に勝つなり。

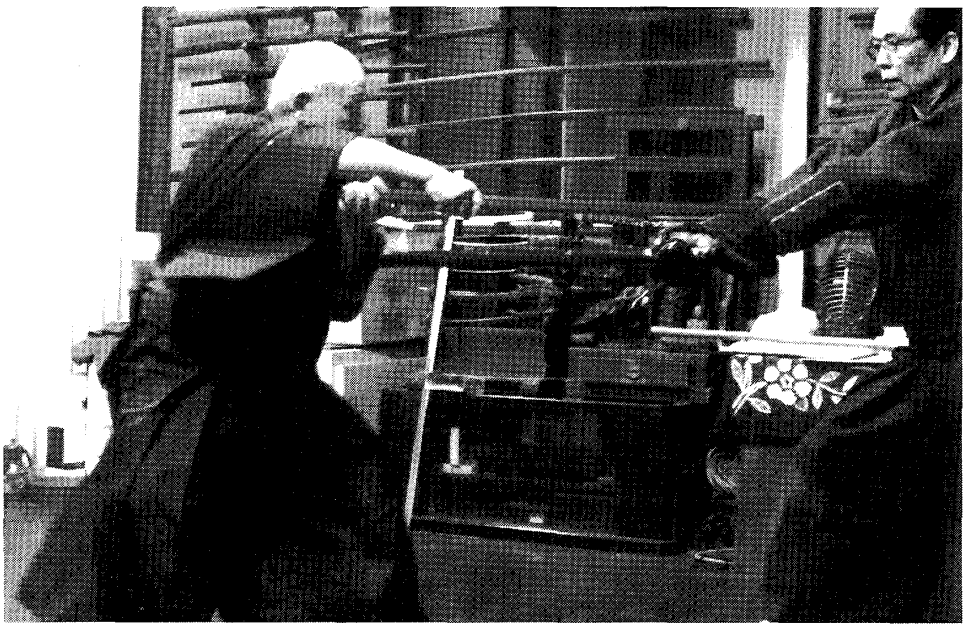
打太刀、使太刀の変化したる時、チヨと切り下げ、それより切りかけることなり。初中後、右足先なり。このチヨと切り下げることは、分けもなきことのようなれども面白き所なり。使太刀、よくよく不意に捨て合気を離れたる故、打太刀、茫然〔忙然を直す〕として思わず切り下げる。それより心を起こして切りかけたる意なり。

厳周伝の「くねり打ち」

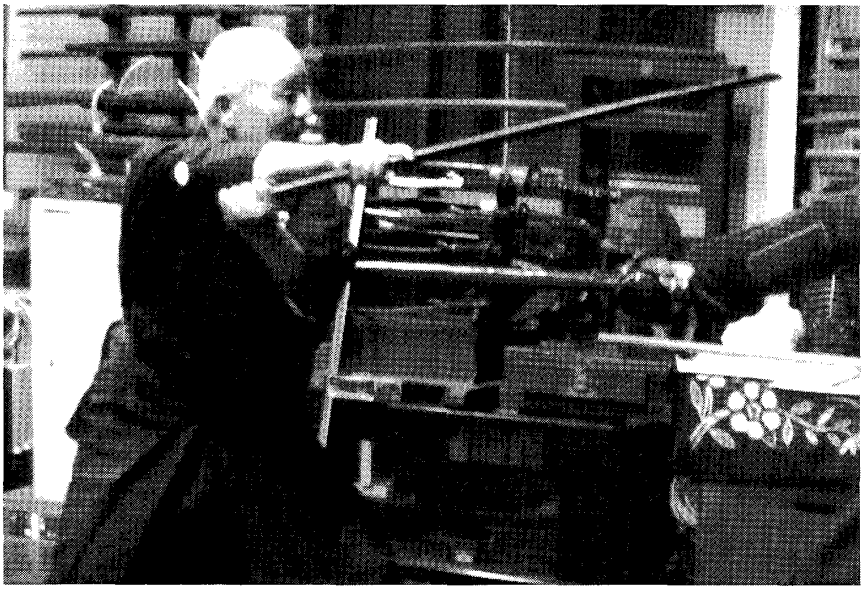
使太刀　青岸
打太刀　左拳を切っていく



使太刀　両足を踏み替えると同時に左拳を左肘近くにもじって拳への打ちを外し、その瞬間、両膝を垂直にえまし、足腰の力で打太刀の双手又は拳を切る。床まで切り下げる勢いで遣(つか)う。



○両手をもじるとき、剣先を絶対に上げない。
（但し剣先を大きく上にあげる外し方もある）
○足を替えないで、その場で踵でまわって両手をもじる仕方もある。
○左図のように首や眼、または双手を斜めに切り上げる刀法もある。この場合も剣先を上げない。また手ではなく腰の力で切る。体を右にねじらず、左足先は打太刀を向く。



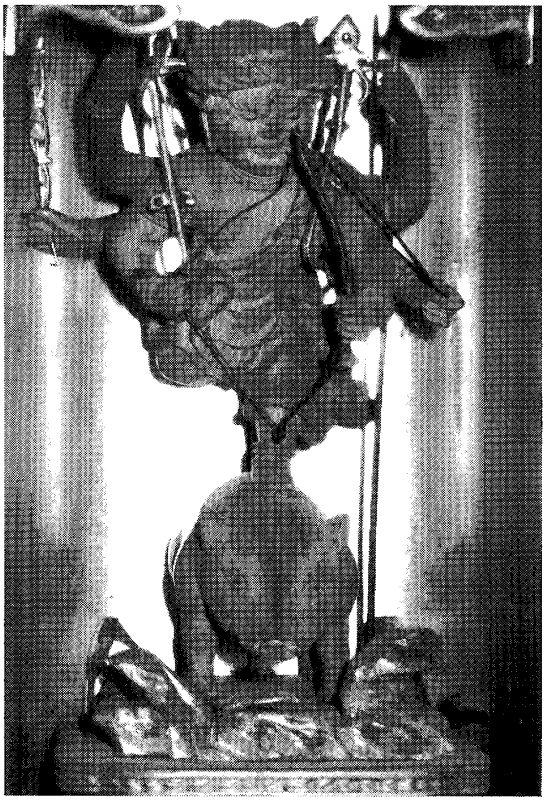
「九箇の太刀」

九箇の太刀は皆、愛洲子より伝えるところにて古き形なり。九箇の太刀の『絵目録』に兵法の濫觴〔起原〕を挙げて神代の事を引き、次にこの太刀を挙げたり。

兵法の濫觴

およそ兵法は梵漢倭三国に亘りこれあり。梵〔インド〕においては七仏師文殊上将、知恵の剣を提持して無明の賊を截断す。則ち一切の衆生、その刃に罹らざるなし。兵法の濫觴というべし。摩利支尊天、もっぱら以て秘術となすものなり。倭においては伊弉諾尊、伊弉冉尊より今日に至って一日もこれなかるべからず。

これ愛洲子もとより祠官〔神主〕なるゆえに、まず神のことをいって、この道の始めとして、それより古く伝わりて、だれ撰ぶとも知れざるもの、また自ずから作るものを挙げたるなり。



摩利支天（春風館蔵）

必　勝

使太刀　左太刀なり。右肩に払う構えに少し直なる構えなり。

打太刀　中段、城郭の構えに似て、使太刀の左肩より裏肘の間に付ける。

使太刀　打太刀の拳の際、太刀をかけ、右肘の通りへ打ち、下段になる。両膝をえまし、打太刀の柄内へはねる心持なり。

打太刀　太刀を引きあげ、使太刀の柄内を心当てて打つ。

使太刀　引き越して打太刀の右腕へ勝つなり。

心得・積り・位、悪しければ当る非これあり。

解説

「右肩に」と云々、古今同じ、やや足を踏み割りて構える。

「中段、城郭の構え」とは五箇の身のことなり。

使い方、使太刀下段となる。

逆　風

使太刀　払い〔の〕構え。少し切っ先高く右肩に構える。

打太刀　上段〔解説に「今は中段」とある〕より使太刀の拳に付けかかる。

使太刀　打太刀の太刀ともに大袈裟がけに切り払い、左車に足を立て替え、打太刀の右へ抜け、身積り三角に右〔左を直す〕を先にし、角かけ下段に直して構える。

打太刀　右足を踏み出し、使太刀〔の〕右の肩頭を掛け、真直ぐに打つ。

使太刀　抜けて打太刀の右腕、拳際へ勝つなり。

拳、高ければ非これあり。積り・身位・勝ち口、悪しければ当たる。

解説

「払いの構え」と云々、この時は足を踏みわり、身少し低し。「打太刀、上段」と云々、昔は今の乳通りに構えたるを上段の内とす。今は中段の

内なり。

「使太刀、打太刀の太刀ともに大袈裟がけに切り払い、左車に足を立て替え」と云々、これ迄、今使う処と同じ。それより使太刀、打太刀〔「打太刀使太刀」とあるを直す〕の右へ抜け、身積り三角に右〔左を直す〕を先にして、角かけて下段に直して構え、順車となり、それより打太刀、右足を踏み出し、使太刀の右肩、頭をかけ真直ぐに打つ。使太刀、抜けて打太刀の右腕、拳ぎわへ勝つなり。

打太刀、順車となること、今と違う。

十太刀

青岸、文（あや）の切り合いなり。

使太刀　変化して右の足、後ろ角かけて引き開き直り、両膝をえまし、向うへ太刀を出し、拳を右の膝の際に置き、打太刀を左の方へ受ける。

打太刀　移り付けかけ、柄の内を打つ。

使太刀　打太刀の柄・拳を下より切る。

打太刀　引き上げ被り、左の足を踏み出す〔先へする〕。

使太刀　打太刀の左腕・肘に付ける。

位・身積りなど悪しければ当る。

解説

「青岸、文の切り合いなり」と云々、「半開」の如く構えて文を取る。使太刀、変化して開きたる処、昔の使い方にて拳低く身も低し。

「打太刀、移り付けかけ、柄の内を打つ」とは、文より使太刀の変化に移り、拳に付けるをいう。この頃は柄中を打つものとす。

「使太刀、打太刀の柄・拳を下より切る」とは、下より弾ねることなり。「打太刀、引き上げ被り、左の足を踏み出す」云々は、これは左の足を先へする意なるべし。元来、踏み出すべき処にあらず。やはり今使う如く踏み替わること良し。

和　ト（かぼく）

使太刀・打太刀　青岸にて仕かけを待つ。

使太刀　仕かけ来たる。

打太刀　真直ぐに頭をかけ打つ。

使太刀　少し開く心持にて方（かね）の積りにて拳際に付ける。

心得・位・拍子悪しきは付かず当たる。ただし打太刀、竪一文字の構えなり。

解説

「使太刀・打太刀　青岸にて仕かけを待つ」と云々、この文、誤りありて聞きにくし。これは使太刀・打太刀ともに青岸の構えにて、打太刀、使太刀の仕かけるを待つということなり。さてまた終りに、「ただし打太刀、竪一文字の構えなり」とあり。これは始めにいう処のことは誤りにて、打太刀は竪一文字、使太刀は青岸の構えなりということなり。竪一文字は前にもいう如く真直ぐに構えたるをいう。

捷　径（しょうけい）

打太刀　雷刀にして待つ。

使太刀　中取り一重身（ひとえみ）、中段にて仕かけ来り、打太刀の中筋ふえ〔ノド〕の順に太刀先を当て、両膝をえまし被（かぶ）る。

打太刀　足を立て替え真っ向を打ち、上より押える。

使太刀　その拍子に乗り、押し返し突く。

身積り・位・構え悪しければ当たる。

解説

「使太刀、中取り一重身、中段にて」云々、昔は中取りの中段

にして身低きなり。

「打太刀の中筋ふえ〔ノド〕の順に太刀先を当てて」云々とは、先ず使太刀の技を打太刀の技より先へ書き、それより打太刀の技を後へまわして書きたるなり。この文の書きよう、前後したるにより誤ることなかれ。敵の打ちに当る拍子なりと知るべし。打太刀の中筋ふえ〔ノド〕の順に太刀先を当てるというも、大略をいいたることにて、実に当てるには非ず。実に当てれば受けられぬなり。ただ筋は大事のところ故、かくいいたるなり。また「両膝をえまし」とあるは、股をふみ開らき受けることなり。「打太刀、足を立て替え」と云々、これは初め左足を先へし構えおるゆえ、右足を踏み出して打つなり。

「使太刀、その拍子に乗り」と云々、これも打太刀、前の如くする故、使太刀、その押える拍子に乗り、押し落し突くなり。

小　詰

打太刀　下段、膝車（ひざしゃ）に構え、待つ。

使太刀　付けかけ来たる。

打太刀　間のよき程にて使太刀の左肘を真直ぐに打つ。

使太刀　引き上げて左身になり、両膝をえまし、わが膝の外へ拳を出し詰める。

身位・拍子・積り、悪しければ詰められず当たる。

解説

「打太刀、下段、膝車」とは、打太刀、大股にして、至って低く構え、柄を膝に付けるほどにするをいう。

「使太刀、付けかけ来たる」とは、少し青岸の様にし、太刀先を敵の拳に付け出る。中段の少し低き構えなり。「間のよき程にて」と云々より終りまで、これは打太刀、使太刀の左肘を打つ時、使太刀、引き上げ外して右足を踏み出し打って、ゆるめず左足を踏み込み、左身になり、膝の外へ拳を出して突くなり。これを詰めるというなり。本文、外して打つこと欠文す。この詰めるとき、実は敵の前足のつま先を左足にてふまえ〔踏み〕突く勢いありといい伝う。

大　詰

使太刀・打太刀　上段にて相懸かる。

打太刀　真直ぐに正面を打つ。

使太刀　引き抜けて打太刀の右腕に勝つ。一重（ひとえ）身になり右足を踏み込み、左足を後、後ろへ開き、詰めるなり。

積り・位・心得など、悪しければ、則ち抜けられす当たる。

解説

「使太刀・打太刀、上段」と云々、この書き様、「和卜（かぼく）」のところと同じく誤りなり。打太刀は中段なり。また相懸かりの下に打太刀の字が抜けたり。「使太刀、引き抜けて打太刀の右腕に勝つ」とは、敵の打つところを上げ外し、右の腕に勝つなり。この頃は全て手を上げ外すを、「大詰の外し」という。

「一重身になり右足を踏み込み、左足を後、後ろへ開き、詰めるなり」とは、打つとき一調子にすることなり。打ってから後、また別に一重身になり、右足を踏み込み、左足を後、後ろへ開き、詰めるにはあらず。かようにすれば調子二つになりて、敵、必ず変化す。誤るなかれ。詰めるというは、近く敵に寄りて迫ることなり。外し後れて打つときは必ず間遠くなる故、踏み出し詰めて打つことなり。

「斬釘」の所に、「両膝をえまし詰める」と同じことなり。この頃の使い方は、肩の上に外してから右足を少し左へ踏み出し、左足を後の角（すみ）へ開き、横に斜に打つものとす。

八重垣

使太刀　構え、頭上に切っ先を右にし、横雷刀の、足少し踏み出し直立ちて居る。

打太刀　上段にて、使太刀の左肘に〔切っ先を〕付ける。

使太刀　変化し、右足を角(すみ)かけて引き開き、左の足も少し添え、太刀をくねり、打太刀の太刀の上、切っ先に切り付けて、柄の内を平らめ見する。

打太刀　魔の太刀を以て真直ぐに打つ。

使太刀　魔の太刀にて抜け、打太刀の右肩・腕へ勝つ。

位・積り・悪しければ抜けられず当たる。

解説

この形、横雷刀より筋交(すじか)いに打ち、また筋交いに打つゆえ、名づけるなり。「足、少し踏み出し直立ちて居る」とは、右足を少し先にし直立ち居るなり。「打太刀、上段にて、使太刀の左肘に付ける」とは、青岸の構えのように横に仕付けることなり。

「使太刀、変化し、右足を角かけ引き開き」云々より終わりまで、これは右足を後ろの右へ引きながら太刀をくねり、敵の太刀先三寸へ乗り付け、逆の平らめ中段となり、我が拳を平らにし、見する。

打太刀、魔の太刀にてこれを打つ。使太刀もまた魔の太刀にて抜け、腕へ勝つことなり。

村　雲

互いに文の拍子を取り、下段なり。

使太刀　間にて一拍子仕かけ、打太刀の左の方へ変化して、角(すみ)をかけ下段になり、両膝をえまし、後の箙(えびら)〔腰〕にかかり、右の膝の順に拳を置き〔置くを直す〕、太刀を打太刀の中筋通りに出す。

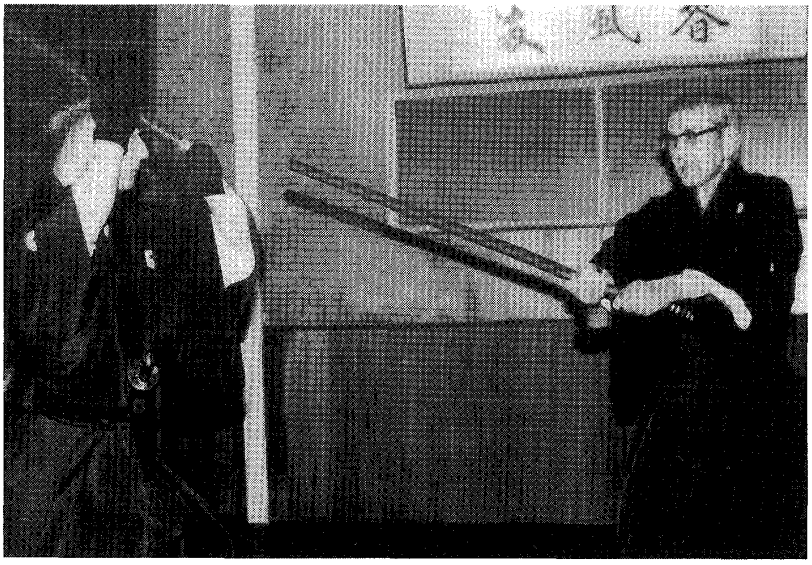
打太刀　一尺ばかりの内へ付けかけ、出たる拳を打つ。

使太刀　抜けて打太刀の右腕へ勝つ。身積り・位・拍子、悪しきは当たる。抜けること能わず。

解説

この形使う処、村雲の如く定まりたる形ちなきを以て名づける。

「使太刀、間にて一拍子を仕かけ」と云々、これは間にて大きくカラ打ちをして下げ、打太刀の左へ寄り、仕かけ、右身にて股を開き右膝の通りに太刀を置きて、逆に下げたる下段なり。打太刀、付けて拳を打つ。使太刀、抜けてくねり打ちの如く、順に横に右腕へ勝つなり。



神戸先生最後の演武（打太刀　加藤館長）

稽古の後、自分はこれで全ての兵法を終えたと刀を納められ（２頁写真）、後は加藤館長に全てを委ねた。この２ヶ月後の昭和55年４月12日没、享年87歳

「天狗抄」

天狗抄とは道機先生の説に、天狗は山気にして時ありて形ちをなすものなり。その如くこの術は、本来常形なけれども敵により形ちをなすもの、という意なり。もとよりこの道は「無形の位」にして敵に応じて形をなすことを本意とす。

しかれども古来この形を撰びし時は前述の意にて名付けし事とも見えず。永正大永の頃より天正文禄の頃まで、兵法者、みな己が術を神にせんと、天狗より伝わりしの、神の告げのと云って教えしなり。諸流ともにこの類多し。されば愛洲子もこれにならい、天狗の勝ちの様な神妙な技であるという心にて、「天狗勝」と名付けしと見えたり。

石舟斎の頃、「勝」を「抄」と変えしこと。流祖諸国を修行、兵法工夫功なり、あらゆる兵法の内よりよきものを撰び、これに自己発顕の妙を加え編みしにより「抄」と名付くとの説もあり。

第一（花　車）

使太刀　払いの構えの少し直なるものなり。

打太刀　拳に付けかけ右〔解説により「左」を替える〕へ替わり、肘を打つ。

使太刀　打太刀の左へ廻わり、柄内へ勝つ。

打太刀　太刀へ争うこと二つ三つ。

使太刀　相かけ、打太刀の左の方へ替わり、魔の太刀にて合し込み、勝つ。使う心悪しきか、位・勝ち口悪しければ当たる。或いは合し込み近ければ、打太刀より裏を蹴ることあるなり。

解説

口伝書に「花車」とあり、本文に名を載せざることは、「奥の太刀」の名を以て「天狗抄」の名と見せしめたるなりといい伝う。余人これを見るとき、「添截乱截」を二本と思い、「八箇」を入れて「天狗抄」太刀数八とせん。これその為なり。またかつ「奥の太刀」は目録を授けても未だ授けざれば、これを抜きても宜しけれども、さようにすれば古来相伝の太刀目録に「奥の太刀」がもれるゆえ、「奥の太刀」の名を載せて「天狗抄」の名を略せるなり。

「使太刀、払いの構えの少し直なるものなり」とは、霞の太刀のことなり。払いの構えは撥草のことにて、低く横を払う勢いゆえ、切っ先、少し横にして低し。霞の太刀は高きを打つ勢いゆえ、少し直にして切っ先高く、刃、天を向く。

「打太刀、拳に付けかけ左に変わり」云々は、左の字、右の字の誤りなり。また「太刀に争う」とは、浅く打ち懸かることなり。二つ三つとは、昔は強いて打つ数、定まらずと見えたり。

「使太刀、相かけ、打太刀の左の方へ替わり」と云々は、今使うところと違う。打太刀、三ツ目を打ちかけるを、使太刀、逆に相かけ流し、敵の左へ替わり、魔の太刀にて合し、折り敷くなり。

第二（明　身）

互いに青岸にして文の拍子を取る。

使太刀　仕かけ来りて拍子を切り落し下り、両箙〔腰〕を開き、位を替える。

打太刀　真直ぐに使太刀の頭を切る。

使太刀　方の積りの構えにて、ひっしと付け勝つなり。

位・拍子など悪しきは付かず当たる。

解説

口伝書に「明身」とあり。異名に「和ト勝ち」とあり。

「互いに青岸にして」云々、昔は使太刀・打太刀、共に青岸にして文を取る。「使太刀、仕かけ来りて」云々、これも昔は拍子を切り落し、捨てたる位にて、少し足を間の内へ入れるなり。

「打太刀、真直ぐに」と云々より終わりまで、古今同じなり、和トの勝ちなり。

第三（善　待）

互いに文の拍子を取る。

打太刀　仕かけて打つ。

使太刀　拍子に乗り付ける。

打太刀　また打つ。

使太刀　ひしひしと乗り付ける。

如何ほどもかくの如くなり。拍子・位、悪しければ付かず。

解説

口伝書に「善待」とあり。異名、「烏飛（からすとび）」、あるいは「早足」という。

「互いに文の拍子を取る」と書き出して、構えをいわざるは、前の形の青岸を受けて略するなり。

「打太刀、仕かけて打つ」とは、使太刀の左拳を打つことなり。

「使太刀、拍子に乗り付ける」とは、拳を外して真直ぐに小さく打ち付け詰めることなり。

「打太刀、また打つをひしひしと乗り付ける」とは、打太刀、退（ひ）いて初めの如く、また拳を打つ。使太刀も初めの如く緩（ゆる）めず打ち詰めることなり。「如何ほどもかくの如き」とは心持をいうなり。法三度打つことなり。これ、古今変わりなし。打つときは上筋にして拳を外し、越し打つことなり。

第四（手　引）

打太刀　文の拍子を取り待つ。

使太刀　同じ拍子を取り、仕かけ来たる。大股に踏み開き、拍子を越して左の拳を勝ち、切り下げる。

打太刀　使太刀の拳腕を打つ。

使太刀　抜け越して、打太刀の右腕を打ち勝つなり。

位・積り悪しきは当たる。

解説

口伝書に「手引」とあり。異名、「双手（もろて）切り」、また「村雲勝ち」ともいう。「打太刀、文の拍子」と云々、昔は使太刀・打太刀ともに拍子取るなり。

「大股に踏み開き、拍子を越して左の拳を勝ち、切り下げる」とは、大股に敵の左へ踏み開き、文の拍子を越して、くねり打ちに敵の左拳を打って下がるなり。先に浅く打ちかけるなり。故に大股に身を敵の左へ開き、「半開」の如く右足は後の角へ開き、左足は前へ出し、半ば開き半ば向かいて、くねり打ちに打つことなり。

「打太刀、使太刀の拳腕を打つ」と云々、これは打太刀、使太刀のくねり打ちに打ち下げたるところの拳あるいは腕を打つなり。

使太刀、またくねり打ちのごとく、我が左へ抜け越して、打太刀の右腕を引き打ちに勝つなり。

第五（二　刀）

打太刀　二刀にて向うへ組み待つ。

使太刀　打太刀の太刀先へ付けかかる。

打太刀　太刀を引き上げ、二刀を一度に打つ。

使太刀　打太刀の左の方へ開き替わり、打太刀の拳より右の肘をかけ打ち込み勝つ。

位・積り・替わり様、悪しければ当たる。

解説

口伝書に、「二刀」と打太刀のことを挙げる。二刀の勝ちという心なり。案ずるに、この形は昔の「獅子奮迅」のことなり。ゆえに分けて名なく、ただ打太刀の二刀なることを挙げるなり。

「打太刀、二刀にて向うへ組み待つ」とは、左身にて二刀を組み、中段にして防ぎ待つことなり。

「太刀を引き上げ、二刀を一度に打つ」とは打太刀のことなり。故に打太刀、太刀を引き上げという意なり。

「打太刀の左の方へ開き替わり、打太刀の拳より右の腕〔肘〕をかけ打ち込み勝つ」とは、使太刀のことをいうなり。この使い方、「獅子奮迅」といいし頃も同じ。然れども打太刀は下段の車にて二刀を組み待つなり。

第六（二刀打物）

打太刀　二刀。太刀を左に持ち、青岸、方の積りに構え、使太刀を拒む。

小太刀を右に持ち、払いの構えなり。

使太刀　車に構え一重身にて打太刀の右の方へ仕かける。

打太刀　大小ともに右の肩へ引き上げ打つ。小は手裏剣なり。一度に打つ。

使太刀　一拍子に左へ廻り、足を入れ替え右身に開き、打太刀の大太刀より小太刀持ちたる腕をかけ、打ち勝つなり。

身位・拍子・替わり様、悪しければ当たる。

解説

口伝書に「二刀打物」とあり。これも前の形の通り、打太刀のことを挙げる。脇指を打つに応じる形なり。異名、「車」という。これも昔の「山霞」のことなり。

「打太刀、二刀」と云々より、これは打太刀、太刀を左に持ちて青岸に構え、脇指を右に持ちて撥草に構えおるなり。

「使太刀、車に構え」と云々、これは車に構えて敵の右へ仕かけるなり。

「打太刀、大小ともに」と云々、これは二刀ともに右肩に上げて、一度に、小は手裏剣に打ち、大は切るなり。使太刀、一拍子に前の形の通り、我が右に開いて打つなり。

この形、「山霞」といいし頃は、打太刀、やはり右に大を持ち、下段の車にて、切っ先、前にする。小は左に持ちて、間の外にて手裏剣に打つなり。使太刀、霞の太刀にて構え出て、小を打つを切り落す。打太刀、大にて使太刀の右手を切る。使太刀、替わって、その手を打つなり。

第七（二人相）〔二人懸り〕

使太刀　まず一人を合し込み、打太刀の右の肘をかけ、打ち勝つ。

打太刀　また一人、使太刀の後より懸かり打つ。

使太刀　車の構えの様にして合し込む。勝ち口、前の如し。如何ほども同じ。身積り・位・勝ち口悪しければ当たる。

解説

口伝書に「二人懸り」とあり。二人の敵なるが故なり。「二人相　使太刀、まず一人を合し込み」云々と、この文、大いに荒らし。合し込みとは、打ち合わせ進み懸かることなり。「車の構えの様にして」とは、逆車(ぎゃくしゃ)に下げることなり。案ずるに、この使い方、古今同じ。

前後に打太刀。使太刀、中段に構え居り、

使太刀　中に立ちて、太刀を車に下げ、まず前の打太刀へ疾(はや)く仕かける。

打太刀　（前の打太刀）肩先へ浅く打ち懸かる。

使太刀　斜に拳より右肘かけ打ち合わせて、面あるいは喉(のど)へ突きかけ疾く進むこと数歩。

打太刀　疾く退くこと数歩。

使太刀　追いすがり逆車に下げ、後の打太刀へ疾く仕かける。

打太刀　〔後の打太刀〕前の如く打つ。

使太刀　斜に前の如く打ち合わせて突きかけ進むことも同じ。

打太刀　退く。

使太刀　また追い捨てて、初めの如く順車に下げ、前の打太刀に疾く仕かける。

打太刀　〔前の打太刀〕打つこと初めの如し。

使太刀　また追い捨てて逆車になり、後の打太刀に向かうなり。

第八（乱　剣）

互いに中段にて文の拍子を取る。

打太刀　拍子を取りながら仕かける。

使太刀　拍子を抜き、巻きかけ、右の足を引き、一重身の左太刀になり、打太刀の太刀に上へ載せ付ける。

打太刀　引き越し打つ。

使太刀　下より柄中へ、すくい勝つ。

打太刀　また使太刀の拳下を打つ。

使太刀　上より柄の内を打ち勝つ。

拍子・位・身積り等悪しければ当たる。

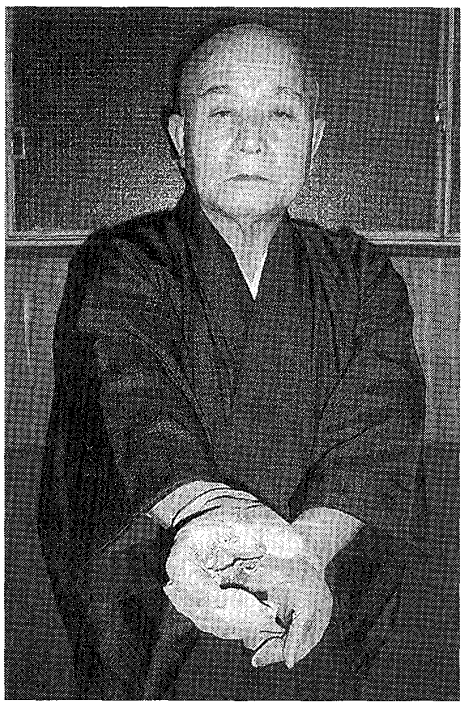
解説

口伝書に乱剣とあり。異名、「必勝勝ち」という。「打太刀目録」には「二人懸り」の後に出す。「打太刀目録」の誤りなり。

「互いに中段にて文の拍子を取る」とは、たがいに青岸にて文を取ることなり。昔は中段といえば、多くは青岸のことをいうなり。

「打太刀、拍子を取りながら仕かける。使太刀、拍子を抜き、巻きかけ、左の足」と云々、この左の字、右の字の誤りなり〔原稿では右に直してある〕。今の使い方と違う。これは、使太刀より打太刀の太刀先へ拍子を抜き巻きかけ、右足を後へ引き、単身(ひとえ)、左太刀になりて乗せ付けるなり。打太刀、引き越し打つ。使太刀、下より柄の内へすくい勝つ。打太刀、また使太刀の拳下を打つ。使太刀、上より拳を打ち勝つなり。

「奥の太刀」及び「八箇必勝」は連也翁校正「太刀目録口伝書」の部に詳説す。



柳生厳周が生涯使用した指懸（ゆがけ）
「新陰流の手の内を教えるんだったらこれを見せよ」と言って神戸金七が加藤館長に遺したものである。これを手に着けると自然と「流儀の手」になる

寛永十四年〔丁〕丑年正月廿一日
連也翁校正

太刀目録口伝書（『新陰流兵法目録』の内）

〔この書は連也厳包が十三歳の時、父・柳生兵庫助が口述したものを筆記したもの。「本云」は上泉伊勢守、柳生宗厳の教え、「厳曰」は兵庫助の教え。晩年に厳封しておいたものを、没後八十年にして六代厳春が開封した。〕

「三学円の太刀」

一刀両段

本云。車の構えなり。敵、懸にして身に争う時は、そのまま一調子に勝つ。また敵、待にして有るの時は、太刀先に付け、敵の働きに従って勝つべきなり。

厳曰。他流には、車はくるままわるという心に、まわって勝つ。当流にはそのまま勝つなり。

斬釘截鉄

本云。これは上段、向うに有るの構えなり。敵、太刀に争う時は、受け流す様に下にまわり、左足を踏み入れ、一調子に裏より勝つ。直に手本に争う時は、そのまま直に勝つなり。

ト伝一太刀の構えに少し直なる構えなり。他流に「柄に八寸の徳」、「身の懸かり三尺の徳」という事あり。

半開半向

本云。これは上段、向に有るの構えなり。新当流方の積りの構えに少し直なり。敵、太刀に争う時は、そのまま勝つ。また手本に争う時は、右の足、後に引き立て替え、半分開いて手をもじり、調子に乗りて勝つなり。

厳曰。中段の構えなり。他流に青岸という構えなり。

右旋左転

本云。これは中段、序の切り合いなり。敵、太刀に争い前をふさぐ時は、裏へまわり調子を抜きて勝つ。また直に手〔本〕に争う時は、調子を越して直に勝つなり。

厳曰。左転は、敵が味方の左の拳へ切りかける時、越して打つなり。

長短一味

本云。これは下段、欠くきりの構えなり。敵、上段にして身に争う時、下より調子を受けて勝つなり。

厳曰。敵、肩へ打ちかける時、無刀にても取るなり。故に「長短の一味」というなり。

右の砕き、三宛あり。さりながら能く砕けば則ち窮まりなし。

「九箇」

必　勝

本云。これは左太刀なり。上段、右の肩に構え、左の足を先へなす。敵、懸にして身に争う時は、そのまま勝つ。また調子を抜き越して争う時は、敵の右の裏より勝つなり。

厳曰。打太刀、方の積りの構えなり。ユウキノシンサイは、しゅりしゅりけんと遣うなり。〔直に打ちつけ、打ちつけ勝つなり。—原稿には抜けている〕伊勢守流には抜けて勝つなり。

逆　風

本云。これは右の肩に構え、敵の太刀先へ横に、さそく〔左足〕を替えて切りかける時、敵、太刀の位の余る調子受けて切りかけ候時、さ

そく〔左足〕を替え、敵の右の裏より勝つなり。

厳曰。打太刀、新当流竪一文字の構えなり。

十太刀

本云。これは車の構えなり。切り合いの内より構えかけて好し。敵の調子を受けて、柄内、十文字に勝つなり。

厳曰。宗厳は切り合わずに、拍子を取りて車に直るなり。

和　卜

本云。これは上段、向うに有るの構え。敵、懸待いずれも打ち合う時に、調子に乗り、やわらげしむる心持、肝要なり。

厳曰　中段、有るの拍子に付ける。

捷　径

本云。これは敵、懸にして打ち合う時、その調子に乗り押し落し突くなり。

厳曰。当る拍子なり。

小　詰

本云。これは中段、敵の調子に乗り、左の足を踏み入れ、右の足を開き、一調子に詰め勝つなり。

厳曰。打太刀、膝車なり。

大　詰

本云。これは上段、敵、中段にして太刀先下げる時、調子を受けて上より調子に乗り、横に勝つなり。

八重垣

本云。これは上段構え、頭にかつぐ構えなり。敵、「八箇」の初手を以てさしかけ候時、太刀先に付ける時、敵、魔の太刀を遣いかけ候時、その調子を抜き、上より勝つなり。

村　雲

本云。これは序の切り合い。敵に切りかけ思い付くところを、調子を抜き裏〔上を直す〕より勝つなり。右の砕き、重々これあるなり。

「天狗抄」太刀数構八

第一〔花車〕

本云。これは左の足を先へなし、上段、角に構え、敵、身に争う時は、直に勝つ。また前にかかり、太刀に争う時は、合して柄の内を勝つなり。

第二〔明身〕

本云。これは向うに在るの構え。敵へ切りかけ下段に切り下げる時、敵、上段に切りかけ候時、その調子を受けて下より横に勝つなり。

第三〔善待〕

本云。これは向うにて序の切り合い。敵の太刀の調子を受けて、かけ打ちに勝ち、その調子ひかせず打ち詰め勝つなり。

厳曰。拍子二つあり。かけ拍子と付ける拍子と二つなり。

第四〔手引〕

本云。これは調子に乗り、切りさげ下段に構えて待つところを、敵、上段に切りかけ候調子、下より抜け、裏より後へ引き打ちに勝つなり。

第五〔二刀〕

本云。敵、こらん〔虎乱〕の構えにとりかけ様、条々口伝あり。

第六〔二刀打物〕

本云。敵、脇指打つ時、とりかけ様、条々口伝あり。

第七〔乱剣〕

本云。これは左太刀なり。切り合いの内に構えかけ、裏、前、調子に従っ

て勝つなり。中段の構えなり。

第八〔二人懸り〕

本云。敵二人かけて切相。近き方より勝つ。後ろと前、両方に置いて吉し。敵一所に置いて悪し。

〔奥義の太刀〕

添截乱截

本云。これは左太刀なり。敵の働きに従って、裏、表より勝つなり。

厳曰。手もと一尺の内より敵を見るなり。

無二剣

本云。これは下段の構え、膝を据えて手を伸ばし、何ほども下段なり。勝ち様、条々口伝あり。

八　箇

本云。これは敵の構えを八ツに分別して吉し。条々口伝。

活人刀

本云。これは下段の構えなり。勝ち様、条々口伝あり。

向　上

本云。これは構えはなし。急の切り合い。何れも一調子。条々口伝あり。

厳曰。あまり近く寄れば、敵より踏み倒すなり。

極　意

本云。これは構えはなし。「向上」にて仕かけ候調子を受け、裏より勝つなり。

厳曰。抜け候時、後へと脇へと処によりかわる。

神妙剣

〔本云。これは向上の砕きなり。――原稿には抜けている〕「極意」つかい候時、その調子に乗りて裏より勝つなり。

二拾七箇条截相

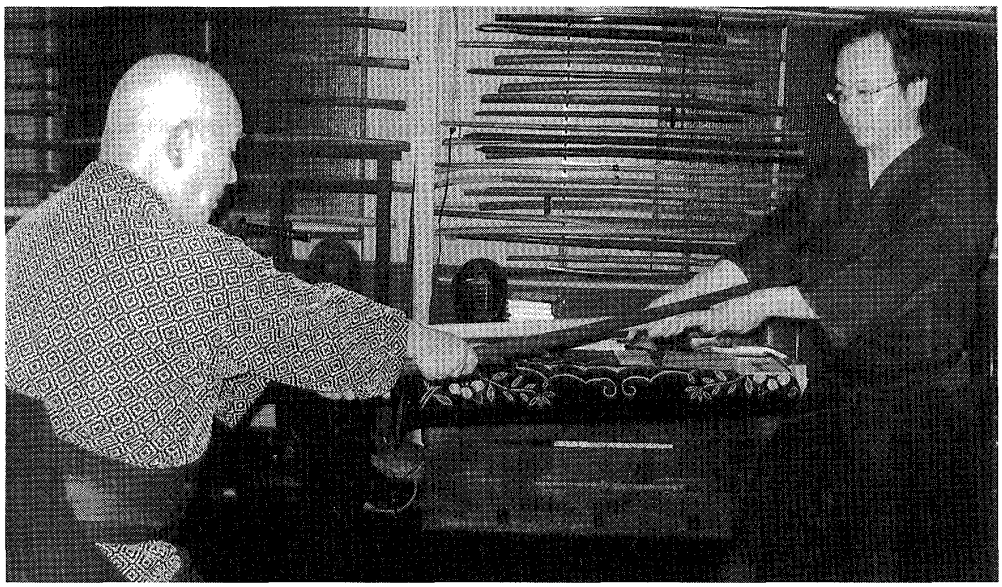
序　上段三　中段三　下段三

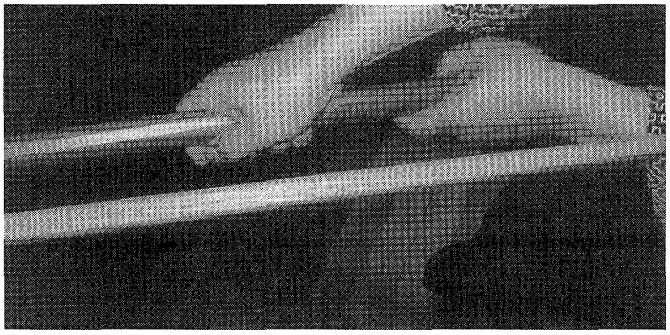
破　折甲二　刀捧三　打合四

急　上段三　中段三　下段三

右急は構えに付、一拍子なり。

右条々面太刀一通りなり。重々口伝あり。





向　上

左拳を右肘近くに上げて（肩は上がらない）拳への打ちを外し、打太刀の左拳又は柄中を上からくねり打つ。床まで切り下ろす勢いで遣う。

燕飛　連也翁の使い方

使太刀　直立てわずかに右足を前にし中段直なる構えにして待つ。

打太刀　右足を前にし股を開き中段のチックと青岸に構へ、切っ先を使太刀の拳に付けて来たる。間の外より魔の太刀を以て右足を進め、使太刀の拳を打つ。

使太刀　右足を後の右に移し左足を前に進め、序破急の拍子を以て拳を右の上に外す。高くあごに等しくする。太刀、筋交って、刃、打太刀の拳に向う。右肘チックと張り、左肘屈み垂れて、身、太刀の中に入るなり。これ一動きの勢なり。足を移して後ち拳を外すに非ず、一度にこれをするものなり。すべて一と動きの勢をなすはみな同じ事なり。打つと足を出すとは、たとえば月と影との如し。月出れば影至り、月入れば影去る。足を出して後ち打つに非ず。打って後、足を出すに非ず。ともに同時なり。しかも皆この通りなり。

打太刀　遠く右足を後の右に引いて身を移し、撥草に構える。

使太刀　右足を前の左に進め左足を右に移し、身を転じて切っ先の右背を打太刀の肘に付け、眼を刺す。

打太刀　左右、足を踏み替え使太刀の脇を撥って、左手、刀の背を中取りし、右脇を前にする。

使太刀　刀の左背で打太刀の拳を打ち落して、遠く右足を後に引き左脇を前にする。この使い方、仮に打太刀の刀を打つなり。これを打捨ての相懸けという。また前後左右は身のある所に従っていう。

使太刀　それより刀を挙げ、右足を進めて打太刀の首を打つ。

打太刀　左足を前に集めて刀捧にしてこれを止めて、左手の四指で使太刀の刀の背を抑える。

使太刀　左足より左右、足を踏み替え、手をもじり刃を上にし、打太刀の四指を引き切りて別れ、切っ先を打太刀の胸に付ける。

打太刀　右足を引き右拳を鬢に近くし、切っ先を使太刀の胸に付ける。それより、下、右足を左に進め、上、左足を後の左に引き、両手、柄を取って使太刀の左肘を打つ。

使太刀　魔の太刀をなし、右足を左に進め左足を左の後に移して、打太刀の打つに打ち合わせ、打太刀の刀を支え、手を勝つ。息あり。始めよりこれまで燕飛

使太刀　わずかに刃を左に向け拳を防ぎ、手を縮めて右足と共に少し引き、また大いに右足を後に引き、切っ先を後になして車の構えとなる。

打太刀　また右足を後に引いて同じく車の構えとなる。

使太刀　これより打太刀、左足を進め使太刀の肩を打つ。少し左足を進めて身を防ぎ、打太刀の拳を斜切りにするなり。しかも今姑く浅くこれを太刀に合わせて使うなり。これを相かけという。

打太刀　左右、足を踏み替えて使太刀の右腕を打つ。

使太刀　また、左右、足を踏み替えて左足わずかに左を踏みて拳を防ぎ、打太刀の右腕を斜に打つ。これまで猿廻

打太刀　右足を後に引いて撥草の構えをなす。

使太刀　左足を進め、わずかに右足を引き、手をもじり切っ先を返し、下より打太刀の腕をはねる意を以て、近く我が腰・膝を防ぐ。

打太刀　左右、足を踏み替えて使太刀の膝を打つ。

使太刀　また左右、足を踏み替え筋交いに打太刀の打ちに乗って打太刀の両手を打ち落す。この打ち、打太刀・使太刀ともに或いは声をかける。息あり。ここまで山陰

使太刀　刃を起こし、少し右足を引き、横雷刀に上げんとする。

打太刀　また少し右足を引き、魔の太刀をなして使太刀の手を打つ。

使太刀　右足を後に引きあつめ、右足少し前にして立ち、横雷刀に上げて外す。

打太刀　少し左足を前に進めて折甲の構えとなる。

使太刀　刀の右背で打太刀の右拳を打ち、右足を後の右に引き、刃にて左の拳を打ち、少し左足を進む。刀、筋交って逆の中段、刃、下に向う。ほぼ始め外す形ちに似て刀低し。

打太刀　少し右足を引き撥草の構えとなる。

使太刀　足を替えず切っ先を打太刀の肘に付ける。これまで月影

打太刀　左足を引き使太刀の左手を打つ。

使太刀　右足を前の左に進め、左足を後の左に引き、打太刀の打ちに打ち合わせて、手を勝つ。この打ち、打太刀・使太刀ともに或いは声をかける。息在り。少し刃を左に向け拳を防ぎ、手を縮め、少し右足を引く。

打太刀　少し右足を進め、魔の太刀をなして使太刀の手を打つ。

使太刀　右足を後の左に引き、これを外して撥草に構える。

打太刀　左足を進め右足をあつめ、左脇を前にし、拳を上げ、刀を左肩におびて身を防ぎ入る。これ折甲の構えの切っ先垂れるものなり。

使太刀　右足を前少し右に進め、大いに左足を右に移し、身を替わって刀の右背で打太刀の拳を打つ。

打太刀　足を踏み替わり身を替わり、右脇を前にし、使太刀の左肘を払って、左手、刀の背を取る。

使太刀　右足を大いに右少し後に移し、左足もまた右に移しあつめ、少し左足を前にし、身を替わり左脇を前にし直立ち、拳をもじり、高く右の鬢の上にあげて外す。これまで浦波

打太刀　左足を進めあつめて刀捧をなす。

使太刀　右足を前の左に進め、左足を左に移し、刀の右背で打太刀の刀捧の左拳の上を打ち、左足を前にあつめ、刀の左背で打太刀の右拳を打ち、右足を後に移し左脇を前にする。手をもじり下より打太刀の右拳をはねる意をなす。

打太刀　片手刀をあげ左足を引き、使太刀の膝を払って折り敷く。

使太刀　足を踏み替わり、魔の太刀をなして打太刀の拳を打ち落して折り敷くなり。

この打ち、打太刀・使太刀ともに或いは声をかける。これまで浮舟

燕飛よりみな続くものなり。

この使い様、惣体大股にし太刀に順って身をかゝり大キヨウ（大きく）打つこと好し。また打ち切れること悪しく、奇正循環するものなり。さてまた使い様の善悪は、書画の善悪あるが如く、理、相同じきものなり。張旭が草書、呉道玄が画、みな剣を使うを見て神妙を得るといえり。今また能書能画を見て運刀自然の妙を悟るべきなり。

それ故、使う時、この書き付ける処に泥んで死物となる事なかれ。形はみな活動円転、自然の勢にして求めてすることなく無形の位なるものなり。

これ新陰の意なり。またこの位・間積り・拍子の三つのもの、真意は云いがたし。ただ悟るものというべし。

昔の「燕飛」の始めの歌に、

燕飛ぶ三つの拍子を忘るなよ

懸待表裏この中にあり

これは、序破急の外しの内に懸待表裏ありて、外すのみには非ず。外す中に足を替えて、懸あり待あり。表あり裏あり。そのまま打つ心あり守る心あり。何事もみなこの中にありという意なり。

畢竟、「心地〔人の心も大地も〕諸種を含む。普雨悉くみな萌す。」〔六祖恵能の偈〕の位にして、天地の気運も開く処あり。これにおいて「牡丹花下睡猫児」、味わうべし。また外す処、修行には序破急に外すが好しといえども実は急破序の心なり。然らずんば当たるなり。

宗矩の書にも、序破急と思うべからず、急序破と思うべし。まず序と思うべからず。急を先ず分別すれば、序破は何時も我がまま〔自在〕なりといえり。されば常使うにも、先ず急と思いて心静かに序破急をなすべし。

付ける処は連拍子、太刀連等の意にして斎下〔臍下か〕より付けるなり。打ち捨てる処は取り上げず、そのまま太刀を反して付け抑える心の打ちなり。しからずんば拍子後れるなり。然れども初学は縮ける故、今は打太刀、ゆっくりと大拍子に打つなり。これは序に使うところ故、この如く使って好きなり。然れども実は付ける拍子の打ちなりと知るべし。

「猿廻」の歌に

嶺谷を廻て行きし猿の路

逆の拳を立てゝ勝つべし

これは、我が打ち我が右より左へ回て、それより逆に拳を立て直し身を防ぎ、斜に打つべしということなり。嶺は右、谷は左なり。また、「立て」とあればとて、拳を立てて太刀を竪〔立てを直す〕にすることには非ず。「右旋」、「村雲」などの勝ちと同じ。

「山陰」の歌に

身を沈み払いの太刀を能くかこえ

山陰げ行きて谷へ勝つべし

これは身が高くなりたり、太刀が前へ出過ぎたり、拳が右へよりて腰や膝が開きたりすることある故、初学を戒めたるなり。「山陰げ行きて谷へ勝つべし」とは、低き処より高きそばを回って、敵の両手へ一拍子に勝てということなり。これ高曲の意にして、高く上がって谷へ勝つものなり。龍蛇の屈む、伸びん事を求む、これなり。またこの一拍子の打ちにて先哲の意を知るべし。すべてみなこの意なり。

「月影」の歌に

切り結ぶ心の月を能くうつせ

影さえあれば敵に勝つべし

これは横雷刀を月に擬し、打ちを影に擬して、心気の太刀下に満ちること、誠に月の地を照らすが如く、月に物を出せば、影たちまち映るが如く、疾く打つなり。この心の月が能く映り居らねばならんなり。

これが能く映り居れば、「撃石火」の如くに勝てるなり。これが肝要のところ故、影さえあれば敵に勝つべしというなり。「月、光を放って萬像を照らす」の意なり。ただ月影のみなり。

「浦波」、これは昔の歌も無し。

分けて心持ちの教えも無けれども、大略、浦波の、岸に触れて巻き返るが如く、敵に応じて去来巻舒〔巻いたり延したり〕滞りなく、身、我が太刀に連れてもとらず〔背かず〕、惣身、太刀一本と成りて二つ無き意なり。

「浮舟」、これも歌も心持も無し。大略、軽舟の浪に浮かんで流転するが

如く、速やかに敵の変化に乗りて推し移る意なり。

終りの打ち、飛び替わり折り敷くも好きなり。高く飛び上がるには非ず。また刀捧、上を打つ処、身、太刀の外へ出ざる様に打つべし。或いはまた初めの打ちは、打ち抑え、後の打ちを同じ処を軽くチョンと打って、その拍子にもじりもするなり。これは敵に早く太刀を返させまじきためなり。

さてまた、この「燕飛」を昔より曲く使いに使いて、こなし〔消化する〕の為めにすることあり。韜にて使うなり。

まず始めの付ける処を、一と足にて尽きざる様に進み出で、打ち捨てる処、大いに遠く角へ引き、「山陰」の打ちを飛ひ替わりて打ち、「月影」の打ちを太刀を打たずに、みな拳を打ち、「浦波」の刃を打つ処も、やはり拳を打ち、高く霞む処、打太刀、深く払い、使太刀、一つ廻りて遠く退き外し、「浮舟」の刀捧上を打つ処も拳を打ち、またもじる処も下より打太刀の拳をはね、終りの打ちもやはり飛び替わって折り敷き打つなり。常より少し早く使うことなり。この使い方、強いて正路にあらざる処あれども、こなしの為には好きこともあり。

さて惣体、形を使うは惣身より太刀を使い出し、行き届かざる所無く、太刀に連れて身離れず、打刀余りあること好し。

連也翁校正「太刀目録口伝書」

「一刀両段」

禅語なり。『碧巌録』に出す。雪竇の句に、「一刀両段して偏破に任す」とあり。敵はもちろん、わが妄想も彼我ともに截断したる位なり。

「車の構えなり」とは前述の如し。今は直立って足膝をわり、拳を人中（ハナスジ）通りに置く。打太刀、足を踏み開き低き中段に構え、使太刀の肘に切っ先を付け出ること今も同じ。使太刀、真直ぐに深く首へ勝つ。昔の如く浅く肩より肘のかかり拳へ打って、筋交うを嫌うなり。至大至剛にして「一刀両段」の位に止る。よって事も大なることを好む。「打太刀、遠く引き上げ、右の足を引き」云々、今は少し角かけて引き、右の肩に撥草にとるなり。「両段」の処に「肘あるいは腕へ両段と付ける」とあり。今は撥草に取る故、肘に付けること好し。

「一刀」の始めの打ち、打ち込みて少し進み出るなり。

これは始め打込む足（左足）、継ぐ足（右足）と、また左足を少し出すと、三足なり。了和先生の工夫なり。連也翁の頃は打ち切りなりしが、この進む足をここにて練りおくこと、また肝要なり。これを一打三足という。

打太刀　打ちて少し退き、それより撥草に取る。

使太刀　緩まず進んで、連拍子に撥草へ打ち付けるなり。

取上使い

これは連也翁、初学の為に作れり。この後、前の使い方を「下から使い」といいて、小転に入れてから使わしむ。この「取上げ使い」は、始めより教える。これを「上から使い」という。

使い方

初め「下から使い」の如く構えて、

打太刀　間の外にて中段より取り上げ雷刀となる。

使太刀　間の外にて、車より取り上げ、雷刀となる。

この取り上げる時、後の足を前に継ぎ、前の足を少し引いて、左のつま先、少し先へし、直立ち、相雷刀となる。

打太刀　右足を踏み出して真直ぐに首を打つ。

使太刀　一拍子に左足を踏み出し、真直ぐに打ち、乗りししぎ、また左足を引き、初めの如く直立ち雷刀に被(かぶ)る。

打太刀　これに後れて遠く右足を角へ引き、撥草にとる。

使太刀　これに連れて肘を斜に打つこと、下から使いに同じ。

房成案ずるに、雷刀は如雲斎の教えに好める処にて、相雷刀もまたこの頃より始まりて盛んなり。よって連也翁、「三学」「九箇」を相雷刀の勝ちに多くかえて、大きく使うことにせり。

連也口伝書の内、「本云」とあるは皆、昔より相伝の口伝なり。「巌曰」は如雲斎のことなり。「敵、懸にして身に争う」とは、『打太刀目録』の使い方及び今の勝ち口も同じなり。「そのまま一調子に勝つ」とは、構えたる形ちの理勢に任せて、一足一刀に敵の調子に応じて勝つことなり。

また「敵、待にして有るの時は」と云々、これは砕きなり。砕きとは変化のことなり。「敵、待にして」とは、一説に、敵の心、我れを伺い待ちて浅く打ち出しなどする類という。「太刀先に付け」とは、敵の太刀先に心を付けることという。また道機先生の説に、敵待ち居て、或いは拳へ浅く打ち、また片手太刀などにて働かば、その働きに従って勝つべし、敵によって変化して勝ちを取るという意なり。両説ともに同じ意にて、砕きの勝ち口について心持ばかりをいえり。然れども、これはみな懸かる敵のことなり。本文には「敵、待にして有るの時は」とあれば、か様に浅く打ち出し、または片手太刀などにて働く敵のことには非ず。また太刀先に心を付けるというも、待つ敵ばかりに限りたることに非ず。かつ兵法病気の一を招くなり。また片手太刀などにて働くその働きに従うというも、既に働く敵なれば、待つ敵のことには非ず。さればみな本文と相違せり。

案ずるに、「敵、中段にて来たり止り待つ」は、これ拍子ある構えなり。「截合目録」にも、拍子ある構えには、付けて打つこと定理なれば、車より太刀先に打ち付けて先ず試し見る。敵或いは裏より我が右手を打つときは、我れ「猿廻」の勝ちに勝つ。或いは、敵、左拳を打つ時はそのまま打ち止め勝つ。

これ「小詰」の始めの打ち止める処と同じ。或いはまた、打ち付けるとも、敵動かさる時は、虚を見て逆に右手を打つ。やはり「猿廻」の先打〔打を補う〕なり。或いは、敵、下を払う時は、その拳を打ち落す転(まろばし)勝ちなり。これみな「太刀先に付け、敵の働きに従って勝つ」ものなり。

了和先生の頃、「猿廻」の使い方これなり。この頃は間遠く退く故、打太刀、車より中段に直す。使太刀、その「太刀先に付け」る。打太刀、使太刀の右手を打つ。使太刀、逆にその右手を打つなり。さてまた太刀先に付けること、車をこわすに似たれども、すべて砕きはこわす〔も〕のなり。砕けば必ずこわれるものなり。ただ自然の理勢に違はざるをよしとする。また敵、懸にして浅く手へ打つときは、その拳を弾ねる。また下を払う時は打ち落す。

「巌曰。他流には」と云々、「まわって勝つ」とは、前足を引き、後れ外(はず)して越して勝つことなり。「当流にはそのまま勝つ」ことは前述の通りなり。

「斬釘截鉄」

禅語なり。『碧巌録』にあり。「斬釘截鉄」とは、物の著きたること、釘を打ちたるが如く堅く著き、中々離れ難き、その釘を斬り、また堅くして截りがたきものを、何の雑作〔面倒〕もなく快く切ることにたとえる。これ争闘の情に引かれて身の替わりにくきを、からりと離れて替わる意なり。離れぎわのよきことをいう。

取上げ使い

これも「一刀〔両段〕」の如く、間の外にて取り上げ相雷刀となる。

打太刀　強く進み懸かりて真直ぐに深く打つ。

使太刀　一調子に我が左に替わり、近く斜に手を打つ。また前足を引いて直立ち、雷刀に被る。

打太刀　また、これに後れて足を引き撥草にとる。

使太刀　その上げるに連れて、少し斜に截鉄と打つこと、「一刀」の取り上げ使いと同じ。

連也口伝書の内に「向うに有るの構え」とは、打太刀、向うに遠く構え居るをいう。「敵、太刀に争う時は」云々、これは今使う所なり。太刀に争うというは、刀中より打つが故なり。「直に手本に争う」とは、直ちに拳へ打ち懸かることなり。「そのまま直に勝つ」とは、そのまま合し打つことなり。この勝ち、或いは越して勝ち、或いは上へ外して勝つもよし。

卜伝が一の太刀は、上段方の積りの構えにして、この構えに少し直なるをいう。「柄に八寸の徳」ということ、案ずるに、拳を盾にするという類にて、八寸の柄を盾にする心なり。「身の懸かり三尺の徳」というも、身を前へ懸かり太刀を差し伸べ構えたるときは、これも太刀間三尺の類にて、敵の太刀あたらずという意なり。然るときはこれも五箇の身の類と知るべし。

「半開半向」

禅語なり。『碧巌録』に出づ。一体の心持にて名づける。その意、半ば開けども半は開かず、半ば向えども半ば向わず、半分は白く半分は黒し。されば半分は正、半分は奇なり。またくねり打ちも、半ば身を開き、半ば向って斜なり。故に、しか〔このように〕いうなり。

取上げ使い

これも前の如く相雷刀となるなり。

使太刀　右足を少し開く意にて、左足を先へし雷刀に取り上げる。

打太刀　雷刀より右足を出して首を打つ。

使太刀　左足を進め真直ぐに打ち乗り勝つこと、「一刀」に同じ。「半向」と勝つ処も「両段」と同じことなり。

連也翁の使い方

打太刀　左拳を打つ。

使太刀　外しながら拳を上筋にし、一調子に眉廂下へ突き込み進む。

打太刀　後へ引き、それより撥草にとる。

使太刀　緩めず連拍子に打ちつける。

さてまた「取上げ使い」は、打ち込みてなお初めの如く直立つる意なり。下から使いは「流水其処水上」の意なり。これその違いなりといえども一ツにこれ皆、循環端無き意なり。また「一刀〔両段〕」もこの太刀も、初め合し打つ処は嶺（首の事）ばかりへ打つことなり。

しかれども敵の太刀、我が鐔に当って落ち、我が太刀、これに少し後れて敵の首を打破するなり。これ初学、相雷刀の勝ちなり。

連也口伝書の内「これは上段」と云々、案ずるに昔は乳の通りをも上段というなるべし。今はこれを中段とする故に、「巌曰、中段の構えなり」とあり。「新当流、方の積り」云々は前節に述べる。「敵、太刀に争う時は」

と云々、これは敵、太刀かけて打つとき、そのまま合し打ちに打つことなり。これ或いは調子を受けて大いに外し越して勝つもよし。くねり打ち、やはりこの心あり。しかしくねり打ちは調子を受けて一調子に勝つなり。これふるき意なり。

「右旋左転」

本云。これは中段、序の切り合いなり。敵、太刀に争い前をふさぐ時は、裏へまわり調子を抜きて勝つ。また直に手〔本〕に争う時は、調子を越して直に勝つなり。

厳曰。左転は、敵が味方の左の拳へ切りかける時、越して打つなり。

〔右旋左転という言い方は〕禅書に多し、天文などの運行より出たることなり。禅にて「自在」の義をいう。兵法にてもやはり「左右旋転自在」の義なり。しかし敵の左右によって名づく。これは本、無形の位故、我が勝ちは敵方にありて我が方に無し。よって敵、変化して勝ちを取る意なり。

今使う所は、

使太刀　右の角に直立ち居て真直ぐに中段に構え文を切る。数は定まりなしといえども仮に二つとす。

打太刀　昔の如く青岸にて大胯に構え、大きく文を切り懸かること、使太刀の抜けるまでするなり。

使太刀　下より裏へ拍子を抜け、右足を踏み出し拳を盾にし、打太刀の右手へ勝つ（師曰く、拳を盾にするとは拳を防ぐこと。すなわち太刀を逆青にすることなり）。

勝ち口、「猿廻」「村雲」等の勝ち口と同じ。しかし常に使うには、抜けたるばかりにて打たず、それより緩めず続けて場の中まで押し、我が左の角へ退がり青岸に構え文を切ること二つ。

打太刀　使太刀の太刀先に付け青岸にて文を切ること二つ。それより右足を踏み出し、使太刀の左拳を打つ。

使太刀　上げ外し右足を我が右へ踏み出し左足を右へ開き、敵の首へ越して勝つ。それより右足を引き、直立ち、直ちに「長短一味」を続けて使うなり。

打太刀　右足を引いて直立ち、直ちに「長短一味」の文を切りかけるなり。

この形、右の角にて抜け、左の角へ移り申すこと、はなはだ拙き事のようなれども、足場悪しきか日月風雨に向うかする時は、その場を移り変ることあり。その移り変る処、闘いの心、専一ならざる故、必ず間あるものなり。それ故、移る処の心得に、角より角へ続けて移り使うなり。よってこの形、昔より移る処、緩む時は、必ず間を入れることなり。

取上げ使い

右旋は同じことなり。左転の処は、打太刀・使太刀、共に相雷刀となり、

打太刀　右足を踏み出し、首を打つ。

使太刀　右足を右へ踏み出し左足を右へ開き、首へ乗り打って、それより右足を引き、直ちに続けて「長短一味」を使うなり。

打太刀　右足を引いて直ちに続けて「長短一味」の文を切りかけること、下から使いに同じ。

連也口伝書の内、「序の切り合い」は前述の通り。「太刀に争い前をふさぐ時は」云々は、我が太刀先へ文を切りかけ、自身の身の前をふせぎ居る時は、ということなり。「裏へまわり調子を抜きて勝つ」とは、裏は切りかける太刀の棟の方、表は刃の方なり。「調子を抜きて勝つ」とは、文を切りかけるを、よき処にて抜け外し勝つことなり。

「直に手本に争う」とは、太刀にはかまわず直に拳へ打ちかけることなり。「調子を越して直に勝つ」とは、敵の打つ処を上げ外して直にその上

へ乗り勝つことなり。これ、或いは深く太刀かけて打つときは合し勝つ。或いは左を打つときは転じて左転となる。右を打てば今使う勝ちの如し。「巌曰く。左転は」と云々、この段の意は、右〔左を直す〕旋は我が方より文の拍子を抜けて勝てども、左転は敵方より左の拳へ切りかける時、越して勝つものなることをいいしなり。

「長短一味」

本云。これは下段、欠くきりの構えなり。敵、上段にして身に争う時、下より調子を受けて勝つなり。

巌曰。敵、肩へ打ちかける時、無刀にても取るなり。故に「長短の一味」というなり。

これも禅に「一味」ということあり。「平等」のことなり。兵法にては「長短同じ事」という意なり。

今使う所は、

如雲斎時代に同じ。しかれども打太刀は真直ぐに深く首へ打つ。打太刀、青岸。使太刀、中段。互いに文の切り合いなり。

連也口伝書の内、「欠くきりの構え」ということ、変化したる後の形ちをいう。「上段にして身に争う時」とは、下段より肩の上へ取り上げ高く打ちかけるをいう。「下より調子を受けて勝つ」とは、使太刀、下段より敵の打ち出す調子を受けて乗り勝つことなり。高曲の意あり。

「巌曰。敵、肩へ打ちかける時」と云々、この形は、敵、我が捨てたるを見て、よき処と思い、思わず深く打ちかける故、無刀にても取れるなり。よって一調子に踏み出し左手にて取りて右にて刺す。また浅く打ちかける時は下より弾ねる。また長道具に向かえば刀捧となり受けとめ入る。すべてこの心持を一足一刀、長短一味ということとあり。

取上げ使い

これも「左転」より続け使うなり。直立ち文を切り変化して捨て、それより後、足を集め相雷刀となる。「一刀」の取上げ使いの如く、打太刀、切り込む。使太刀、打ち乗り勝って後足より身を引き、また車となるなり。

〔砕きについて〕

「右の砕き三宛これあり。さりながら能く砕けば則ち窮まりなし」

砕きとは前に述べる如く変化のことなり。形を壊してする故いうなり。

「三宛これあり」とは、形ごとに定まりたる変化三つある故なり。

「一刀〔両段〕」は、付けて勝つと、弾ねて勝つと、昔の如く柄中へ斜に勝つと三つなり。また昔よりいえば、今のかぶせて勝つもの、砕きなり。

「斬釘〔截鉄〕」は、そのまま合し勝つと、昔の如く直きに付けて勝つと、越して勝つと三つなり。また昔よりいえば、今の受け流す様にして勝つもの、砕きなり。

「半開〔半向〕」は、くねり打ちと合し打ちと越して勝つと三つなり。昔よりいえば、今の使う処、砕きなり。

「右旋〔左転〕」は、上げ外し乗り勝つと合し打ちと左転となると三つなり。古今同じ。また「左転」は、昔は右旋の後の打ちなれば砕きなし。今は分けて使えば、この砕きまた無くんばあるべからず。されどもやはり右旋と同じ意にて、乗り勝つと合し打ちと右を打てば右旋と勝つと三つなり。

「長短一味」は、無刀に取ると弾ねると刀捧に取ると三つなり。古今同じ。これみな三つの砕きなり。

しかれども、変化はもと敵によってすることなれば、敵のなす所によってその応ずること千変万化なり。故に「能く砕けば則ち無窮」という。三つは、その定理の大なるものなり。ただ円活自在にして必然の勢に任せて位・積り・拍子を失わざることを要す。これ、気、離れて欲に著かざるものなり。

「九箇〔の太刀〕」

必　勝

本云。これは左太刀なり。上段、右の肩に構え、左の足を先へなす。

敵、懸にして身に争う時は、そのまま勝つ。また調子を抜き越して争う時は、敵の右の裏より勝つなり。

厳曰。打太刀、方の積りの構えなり。ユウキノシンサイはしゅりしゅりけんと遣うなり。〔直に打ちつけ、打ちつけ勝つなり。〕伊勢守流には抜けて勝つなり。

今構える処と昔と同じ。使太刀、直立ちて高く右肩に構えるなり。打太刀、昔と同じ。昔は打ち下げ下段になりしも、今は中段にとどむ。

取上げ使い　同じ。

連也口伝書の内、「敵、懸にして身に争う時は」云々、これは敵、先に肩より高く手のへんを打つ時は、「そのまま勝つ」とは、真直ぐに合し打つことなり。「調子を抜き越して争う」とは、敵、我が打つを上げ外して拳へ打つことなり。「敵の右の裏より勝つ」とは、やはり今使う処なり。「ユウキノシンサイは手裏」と云々、ユウキノシンサイは人の名なり。文字知らず。上泉子と並べ挙げたる程の人なれば、他流にての上手と見えたり。「直に打ちつけ使う」とは、拳を外しながら直ちに敵の右腕へ乗り勝つことなり。今使う処なり。

敵また始め強く防ぎ、我が打つ処を引き止め打たんとせば、我、初め没茲味〔味がないこと〕の打ちにて拳へ打ちかけ、昔の如く打ち下げて、直ちに一旋節に裏より勝つ。打ち下げて後は必ず必勝の勢いあり。故に打太刀もまた取り上げて争うなり。ここに至りて常使う処となる。また始め機を得ば乗りひしぎ打ち突く。もし敵、引いて払えば、従って下より裏へ抜けて勝つ。また敵、抜け越して、我が左を打つ時は下より弾ねる。

逆　風

本云。これは右の肩に構え、敵の太刀先へ横に、さそく〔左足〕を替えて切りかける時、敵、太刀の位の余る調子を受けて切りきりかけ候時、さそく〔左足〕を替え、敵の右の裏より勝つなり。

厳曰。打太刀、新当流竪一文字の構えなり。

この形、後の打ちが主なるによりて「逆風」という。使い方、「如流斎目録〔打太刀目録〕」と大略同じ。ただし打太刀、順車となること今と違う。今は右足を大いに引き太刀を上げ外し、また踏み出し打つなり。

石舟斎以前、介者〔鎧武者〕に勝つことも同じことなり。みな手を払い、手を勝つものなり。柳生五郎右衛門〔宗矩の兄〕、伯州飯山の戦に、この形一本を以て介者数人を打ち取るという。

取上げ使い

使太刀　払って左車になり、直ちに前足を後へ引きあつめ、直立ち相雷刀となる。

打太刀　使太刀の上げたる処を見て踏み出し打つ。

使太刀　我が左へ替わって「斬釘」の如く打つなり。

「下から使い」は左車にて待つ。「取上げ使い」は取り上げて待つ。前述の如く、打ち込みてなお初めの如く直立つる意なり。

連也口伝書の内、「敵、太刀の位の余る調子を受けて」云々、これは打ちの当るべき処を越して、あまりて太刀の落ちつき処の遠きをいう。大拍子なり。「左足をかえ」と云々、身を替えて打つをいう。今使う処と同じ。

「新当流竪一文字の構え」、これは五箇の身の如くして太刀を真直ぐに構え、身も向いたるをいうなり。打太刀、外して早く切り込むときは下より弾ねる。始め強く逐いて遠く戻り構える好し。敵を引き付けるものなり。

十太刀

本云。これは車の構えなり。切り合いの内より構えかけて好し。敵の調子を受けて、柄内、十文字に勝つなり。

厳曰。宗厳は切り合わずに、拍子を取りて車に直るなり。

この形、当って戻る処、十度にても同じこと故、その尽きざる処に就て名〔づ〕くるなり。

使太刀、中段、真直ぐに構えて文を取る。変化して開きたる処は、拳を腰通りに置き、太刀先少し低し。身も昔よりやや高し。

昔は、打太刀、柄中を打つ故、内より抜いて弾ねるなり。

今は肘のへんを打つ故、肘を除けて横より柄中を十文字に勝つなり。また了和先生の工夫により、上より拳へ被せて勝つ。道機先生もこれに従う。今案ずるに、連也翁の頃の勝ち口、大いに善し。打太刀、引き上げ撥草にとること、使太刀の切り付け、すべて「一刀」に同じ。

連也口伝書の内、「車の構えなり」とは大略をいうなり。

右足を後の角かけて引き開き構え、太刀を横に向うへさし出したるなり。これも車の内なればなり。「如流斎目録」、見合わすべし。これも始めは青岸なれども、変化の後ちが簡要のところ故、後の構えをいいたるなり。

「敵の調子を受けて」と云々、敵の打ち出す調子を待って、石火の如く打つことなり。「柄内、十文字に勝つ」とは、横より当たることなり。

「宗厳は切り合わずに、拍子を取りて」云々、これは宗厳以前は青岸にて切り合い、文を取り争うことと見えたり。今使う処は、この宗厳の使い方にて、切り合わずに小さくアヤを取りて車に直るなり。切り合いは、切る心、拍子はアヤの心なり。この形、打太刀、頭へ打ちかける時は、当たって直ちに左へ払う意なり。

取上げ使い

これは文を取り、開きてから、敵に従い足を揃えて直立ち相雷刀となること、「一刀〔両段〕」の取上げ使いと同じ。その余みな同じなり。

和　ト

本云。これは上段、向うに有るの構え。敵、懸待いずれも打ち合う時に、調子に乗り、やわらげしむる心持、肝要なり。

厳曰。中段、有るの拍子に付ける。

これは「連也翁口伝書」、「使太刀目録」の口伝に、「やわらげしむる心持」という。トの字、字義に当らされども俗に「しむる」とする。よって名付けるなり。

今使うところは、

使太刀・打太刀ともに直立ち、すぐ〔直〕なる中段に構える。余は使い方、「如流斎目録」に同じ。

取上げ使い

境前より取り上げて相雷刀となる。

打太刀　真直ぐに打つ。

使太刀　少し開き横身になり、拳を斜に打つなり。

ここに前とは、間の外よりということなり。

連也口伝書の内、「これは上段、向うに」と云々、この上段とあるも、前にいう如く今の中段のことなり。故に下に、「厳曰。中段」とあり。

「敵、懸待いずれも打ち合う時に、調子に乗り」云々、これは敵、懸かり来るとも待って居るとも、いずれ打ち合いするときに、敵の調子に乗り越し打ちしめて突く意なり。やわらげしむるというは、敵、強き打ちなるとも、乗り越し打ちしむる時は、自ずからやわらぎ止るものなり。故にやわらげしむるという。最も肝要なるところなり。敵の浅く打つ時なり。

「有るの拍子に付ける」とは、有るは動きある事にて、中段より上げて打つ事なり。（能く見える故、有るの拍子という）その拍子を受けて付ける事なり。

この形、越す・当る・付けるの三拍子を具う。能く使い分くべし。その用、遠きは越し、近きは付ける。或いは打ちによって当たる、これ定理なり。

まず越す、付けるを主とす。また敵、待つ時は、前にて手先を打つが如く浅くカラ打ちし、敵のそこを打つを付けて勝つなり。故に懸待いずれも同じ事なり。また約〔集約〕していえば、刀剣の術、この形一本にて足れり。

捷　径

本云。これは敵、懸にして打ち合う時、その調子に乗り押し落し突くなり。

厳曰。当る拍子なり。

昔は早く進む故、捷径と名付く。この形と前の「和卜」と後の「小詰」と、この三本は狭き長き廊下などの勝負にして、自在に太刀も使われざる処〔にての業〕なり。よって常使うにもこれに擬して、左に片付きて使うなり。それ故この形、打太刀もただ一と挫きに打たんとし、使太刀も首を捧げてかけ込み突かんとする勢なりといい伝う。しかれども今は常に進む如く行くなり。

使太刀　中取りの下段にして直立ち、手に刀をかけたるまでなり。

手にかけるというは、大指と食指との間に刀背を挟むをいうなり。

打太刀　左足を前にして雷刀に立ち、右足を踏み出して首を打つなり。

使太刀　直立ち刀捧にて受け、右足を踏み込み押し返す拍子に突くなり。

取上げ使いは同じ。

連也口伝書の内、「これは敵、懸にして打ち合う時、その調子に乗り」云々、この形、敵より懸かって打ち、我、これを受け合するとき、その受けたる調子に乗り、直ちに推し落し突くなり、ということなり。これ、推し落すと突くと一拍子なり。推し落してから突くに非ず。

「厳曰。当る拍子なり」とは、前にもいう、敵の打ちに我よりも張り当る意なり。受ける心は死物にて弱く、当る心は活物にて強し。すべて受けることはみな同じ。相かけるも当る拍子なり。

小　詰

本云。これは中段、敵の調子に乗り、左の足を踏み入れ、右の足を開き、一調子に詰め勝つなり。

厳曰。打太刀、膝車なり。

俗に「詰」をつめると読む。外して打って、詰めて突く故に名付けたるなり。

今の使い方は、

間の少し外より敵を突かんと青岸の如く太刀を平らにし、大略、肩通りに上げ、切っ先、少し低く左拳少し高くして、敵の喉、或いは顔の通りに当て右足を少し入る。これを「迎え」という。打太刀、左拳を打つ。使太刀、そのまま打ち押え、左足を踏み込み詰める事、昔の如し。

取上げ使い

使太刀　昔の如く付け出て、間の外にて雷刀になる。

打太刀　浅く左脇を打つ。

使太刀　右足を少しく出し、近くその腕を打ち止め左足を踏み込み詰める。

連也口伝書の内、「これは中段」とは、今の中段の少し低きものなり。「敵の調子に乗り、左の足を踏み入れ」と云々、これは詰めるときのことなり。ただ調子の二つにならざるように一調子に詰め突けということなり。

膝車とは「如流斎〔打太刀〕目録」に述べし通りなり。

この形、打太刀、懸待、古今異なり。昔は懸かり、今は待つ。案ずるに、膝車は待つを主とし、また迎えは待つ敵に勝つ仕方とする。さすれば今使うところ定理にして、昔の使う処は砕きとする。しかれども、昔は迎えを仕方の至極として、「三学」「九箇」、また「天狗抄」の内にもこれを出さず。後はこの差別なく、また世間にも多く用いる故、連也翁の頃、初学をして知らしめんがために、この形、或いは「天狗抄」の内に出せしなり。

さればこの形、昔は、使太刀、懸かり来て、まず三寸へ付けしを、敵、これを打ち、使太刀、外してその調子に乗り打ち止め詰める。この三寸の付けを迎えに替えたるなり。使太刀、迎えをかけし時、打太刀、その太刀を横に払わんとせば、昔の如く上げ外し勝つ。或いは下へ押えて突くなり。

大　詰

本曰。これは上段、敵、中段にして太刀先下げる時、調子を受けて上より調子に乗り、横に勝つなり。

これも外して詰めて打つ故、名づくるなり。

今使うところは、

使太刀、上段。打太刀、中段。相懸かりに懸かる。

打太刀　真直ぐに打ち来たる。

使太刀　左足を後ろの左へ引き開き、太刀を雷刀に上げ外し、右足を出して首に勝つなり。

取上げ使いは、前にて共に相雷刀となり、

打太刀　真直ぐに打ち来たる。

使太刀　左足を後ろの左へ引き開き外し、右足を出して首を勝つ。

大略下から使いに同じ。

連也口伝書の内、「太刀先下げる時、調子を受けて」と云々、これは敵、打ち下げる時、その前の調子を受けて外し、打ち下げたる上より、その太刀の下る調子に乗り、打つことなり。この形、敵の打ち懸かるその調子を受けること専らなりと知るべし。

八重垣

本云。これは上段構え、頭にかつぐ構えなり。敵、「八箇」の初手を以てさしかけ候時、太刀先に付ける時、敵、魔の太刀を遣いかけ候時、その調子を抜き、上より勝つなり。

この形、横雷刀より筋交いに打ち、また筋交いに打つ故、名付けること、前述の通りなり。

今使うところは、

使太刀　右足を後ろの右へ引き開き、左足を踏み出しくねり打ちに敵の拳を打って逆の中段となる。

打太刀　拳を引き外して魔の太刀にて使太刀の左拳を打つ。

使太刀　左足を引き雷刀に上げ外し、右足を出し首を勝つなり。

この形、始めの打ち付けるところ、昔は拍子ある構えには付けて勝つ意。今は「先手備に取り合わず」の歌の意なり。また昔は、打太刀、間を越さんとせしを、使太刀、右足を引きて上より乗り付け、今はこれを進んで打つ。今の処、一点の間隙無きに似たり。また今使う処、打太刀、進み来たるには非ざれども、実は、使太刀、待ち居る故、打太刀、懸かり来たるところなり。懸かり来たらざれば前に敵なし。来て付けし処なり。「右旋」「十文字」などの打太刀の類なり。

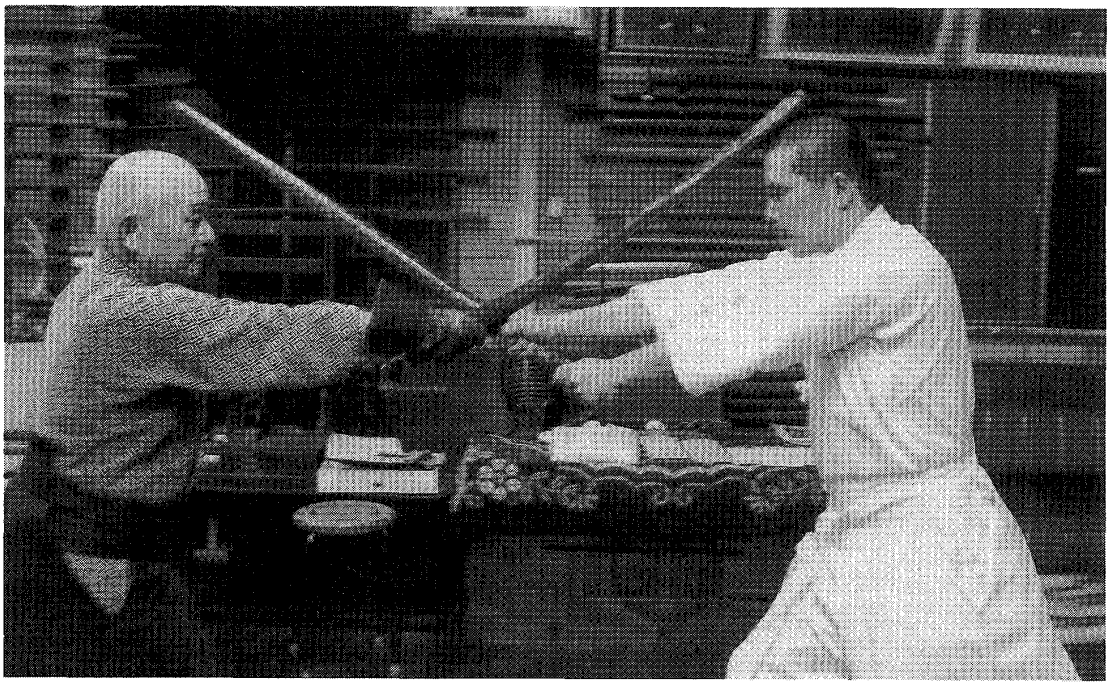
取上げ使い、別になし。

連也口伝書の内、これは「如流斎目録」に出る使い方の通りなり。

今使うところ、
　初めの打ちかけ、敵の拳を表より打つことなれども、敵、表を専ら防げば裏よりも勝つ。また横雷刀のまま上よりも両拳を勝つ。またくねり打ちに上より太刀の背を打ち払い勝つ。これみな雷刀の変化なり。

村　雲

本云。これは序の切り合い。敵に切りかけ思い付くところを、調子を抜き裏より勝つなり。右の砕き重々これあるなり。
今使うところは、間の外にて拍子を切り下げ、敵の左へ滞りなく尽きざる様に、下段の逆に掲げ、仕かける事なり。その形、大略昔の如し。
打太刀　拳を打つ。
使太刀　そのまま一調子に右腕へ勝つなり。
　それより足を初め出したる方へ引いて霞に取るなり。案ずるに、打って後、撥草に取ること、昔よりする事なり。「如流斎目録」に載せざることは欠文か、或いは略せるものなり。今のそのまま勝つ形ちは、「猿廻」の逆に打つ処と、「右旋」の今の勝ちと、「村雲」の勝ちと三つ同じなり。昔の勝ちは、抜けてくねり打ちのように勝つものなり。
取上げ使いも同じ。しかし大きく使う事なり。
連也口伝書の内「敵に切りかけ」とは、浅くカラ打ちを仕かける事なり。今の拍子を切り下げる事には非ず。「調子を抜き裏より勝つ」というも昔の勝ちなり。今のそのまま勝つことには非ず。これみな相伝の事を挙げたること故に、前にもいうが如く「本云」というなり。一つに見ることなかれ。表裏の至極を尽すものなり。
　「右の砕き重々これあるなり」、前文中既に述べたるゆえ、余は類を以て推すべし。



合し打の試合稽古（加藤館長と赤羽根大介）

「まっすぐ切ってきてください。案外、打ちながら受ける人がいる。受けたら駄目です。お互いが捨て身になって切りあう。あなたが私より合し打の法ができていれば私が負ける」
何度やっても館長が勝つ。
「師匠がよく言われたことは、新陰流を学んだ人はこれで勝負する。技が優れた方が必ず勝てる」（加藤館長）

天狗抄太刀数構八

第一　花車

本云。これは左の足を先へなし、上段、角に構え、敵、身に争う時は、直に勝つ。また前にかかり、太刀に争う時は、合して柄の内を勝つなり。

今使うところは、

使太刀　左の角に霞太刀に構え待つ。

打太刀　青岸に構え、文を取り来て浅く肘へ打ち懸かる。これ昔の如く左へも替わらず打つなり。

使太刀　左足を右へ踏み出し身を移り肘を外し、上より拳を真直ぐに勝つ。右足を大いに右の角へ移し、左足もあつめ引き上げて直立ち、初めの如く構える。

打太刀　また浅く打つ。

使太刀　また左足を出し拳を勝つこと初めの如し。右足を左へ移し、引き上げ場中〔場の中央〕にて直立ち構えること初めの如し。

打太刀　また浅く打つ。

使太刀　勝つこと前の如し。

そのまま引き取り、使太刀、打太刀とも逆の中段に位を直すこと、「月影」の〔位をとる〕所の如し。

打太刀　また左の手を打つ。

使太刀　そのまま真直ぐに合し、拳を打って折り敷くなり。

石舟斎以前は知らず。形数も多く使い方も替わるなり。然れども今使うところは撰びに撰びてや、得たるをけずり不足を補いしものなれば、勝れたるものなり。昔は知れずとも不足なし。

この「天狗抄」は巧者に至って伝える処故、取上げ使いというものなし。然れども、必ず身ともに大きく使うこと好し。またこの形の打ち込みたる形ち、前へ懸り、後足をはねるが好しといい伝う。これも身ともに打たせんが為なり。「天狗抄」はみな小口なる勝ちにて、浅く手裏を勝つこと故、手先にならん様にするなり。

連也口伝書の内、「身に争う」とは深く打ちかける事なり。「直に勝つ」とは、そのまま打ち合せて勝つ事なり。また「前に懸かり太刀に争う」とは、浅く打ちかける事なり。今使うところの太刀なり。「合して柄の内を勝つ」とは、今使うところの使太刀の勝ち口なり。

今使うところは、肘を外して後れて打つ打ちなり。故に後二本の打ちも実は足〔を〕あつめず、初めの如く踏み開き構えること、好きなり。しかし間近きは敵より拍子に連れて中取りし入ることあり、心得べし。敵、入るときは、横に手に勝つなり。この形、相霞或いは雷刀に向かう時、必ず「分け目、搦み」を肝要とす。「搦み」は両〔腕〕の肘のかかり、分目は拳二つの間、即ち惣体を見る心持なり。

この形、柳生十兵衛、仇討ちの小太郎なるものにただ一本を伝えしという説あり。さもあるべし。能く約め〔集約〕尽せるところある形なればなり。味うべし。他流にてこれを新陰流のカラ竹割の太刀という。案ずるに、撥草は横に払いしに、霞の太刀は堅に打つが故にカラ竹割という名あり。

第二　明身

本云。これは向うに在るの構え。敵へ切りかけ下段に切り下げる時、敵、上段に切りかけ候時、その調子を受けて下より横に勝つなり。

今は、使太刀・打太刀ともに直なる中段にて文を取り、使太刀、外にて拍子を切り落し、捨てたる位にて、少し足を間の内へ入れるなり。

「打太刀、真直ぐに」と云々、「如流斎〔打太刀〕目録」は今の使い方と

同じ「和卜」の勝ちなり。

連也口伝書の内、「敵へ切りかけ下段に切り下げ」とは、文を切り下げ下段になることなり。全く前の使い方なり。

この形、勝ち口、拍子、みな「和卜」と同じ。「和卜」すでに尽せるものなれども、和卜は定法にてある形、これは無形にて捨てたる処、『六韜』に、「天に上なく、地に下なし。また且つ、ともに戦うところの者、約〔集結〕なればなり」の意あり、よく味わうべし。

第三　善待

本云。これは向うにて序の切り合い。敵の太刀の調子を受けて、かけ打ちに勝ち、その調子ひかせず打ち詰め勝つなり。

厳曰。拍子二つ有り。かけ拍子と付ける拍子と二つなり。

使太刀・打太刀とも青岸に構え、序の切り合いなり。

使太刀　青岸にして文の拍子をとり待つ。

打太刀　仕かけ来たりて使太刀の左拳を打つ。

使太刀　拳を外して真直ぐに小さく打ちつけ詰める。

打太刀　かえって初めの如く打つ。

使太刀　打つ足、右、継ぐ足、左。打つ足右を前にし、太刀を中段に立て、打つとき上筋にして拳を外し越し打つこと、今もかわることなし。法三度にして中段に詰めるものとす。

連也口伝書の内、「かけ打ちに勝つ」とは、敵の打ちを架け止めて打つことなり。「その調子ひかせずうち詰める」とは、我が打ち架けたる拍子を緩めず詰め、突くことなり。また「かけ拍子と付ける拍子と二つ」とは、かけ拍子は架け止めて打つ拍子なり。付ける拍子は敵の打ちに付け、付けて離さざるなり。この二つの拍子、みな先を緩めず。それ「乱は治に生ずる」意あるが故にいうなり。我れ、程よき拍子に叶うとも、虚実は一定なし。「天道虚を盈たす。日入れば、また出で、日出ればまた入る。潮に進退あり、人に呼吸あり。乱は治に生ず。怠り緩むことなかれ。」

第四　手引き

本云。これは調子に乗り、切りさげ下段に構えて待つところを、敵、上段に切りかけ候調子、下より抜け、裏より後へ引き打ちに勝つなり。

今使う処は、

使太刀　下げ往き、間の少し外より迎えをかけ、少し入る。

打太刀　膝車より使太刀の拳を打つ。

使太刀　抜け越し右足を右へ開き左足を少しく進め、半ば開き半ば向ってくねり打ちに打って〔拳を〕下げる。

打太刀　またその拳を打つ。

使太刀　抜け越し、小さくくねり打ちの如くし、打太刀の右腕を打って右足を出たる方へ引いて、霞の太刀に構えるなり。迎えとは「小詰」の今の使い方のところに述べる。見合わすべし。

連也口伝書の内、「調子に乗り、切り下げ下段に構えて」と云々、この使い方も昔の使い方にて前述の通りなり。これ後の打ちが主なり。初めの拳を勝ち切り下げる処は、敵を引き出すものにて、やはり迎えなり。然れども今の使い方より間深くなれば、間多し。案ずるに、太刀を打って下げるも可なり。敵、動かざれば、緩めず下より裏へ抜け勝つ。しかし今の使い方、勝れたるものなり。今の、迎えを仕掛けても、敵動かざるときは、やはりくねり打ちに左拳を打つ。昔の心なり。

緩めずまた裏を勝つ。また敵、我が突きかかるを待って太刀を払うときは、上へあげ外し、裏へ越して右手を勝つ。また敵、我が裏を伺うも同じ。然れども我が切っ先低きは、敵伺うに不便なりと知るべし。この故に、使太刀、切っ先少し低きを好むなり。

第五　二刀の勝

本云。敵、こらん〔虎乱〕の構えにとりかけ様、条々口伝あり。

今使う処は、

打太刀　二刀にて向かい、左身にて二を組み中段にして待つ。

使太刀　下段に下げて懸かる。

打太刀　両刀を重ねて打つ。

使太刀　左の方へ開き替わり打つ。大股にして身を前にかかり、浅く左拳を打つなり。昔は右肘かけて打つ故、打ち少し深し。今は打ち浅きを好む。深ければ間多し。またこの形ばかり深ければ「手裏の勝ち」に貫通せず、今に従うべし。

連也口伝書の内、「敵、こらんの構え」と云々、これは前に述べる所の構えなり。昔は「虎乱の構え」という。

取りかけ様は、口伝書に、右へ仕かけ左へ開くとあれば、右と見せて左へ勝つ意なり。一と足、敵の右へ寄り敵の打ちかける処を、敵の左へ開いて打つ事なり。これ昔の使い方なり。杜牧が説に「いわゆるその東を警めてその西を打ち、その前を誘ってその後を襲う」という意なり。然れども、その機、すでに露われる時は、かえって益なし。今使う所、真直ぐに仕かけて敵の打ちかけんとする処を疾く替わて打つ。これその意、同じ事にてその機あらわれず。今使う処勝れり。

この形、両刀を重ねて打つ意なり。重なれば一刀も同じ。またかつ、身を懸かり真直ぐに浅く打つ。打つ故、身は太刀の中に入り、足へは遠くして当たらず。隙き間なきものなり。これ二刀に勝つの定理なり。千変万化みな敵刀を重ねて打って、我れは刀中に入りて出る処なき位を求むべし。

また円明流の円曲の類は虎乱の構えと異なる。円曲は向い身、虎乱は単へ身なり。

第六　二刀打物

本云。敵、脇指打つ時、とりかけ様、条々口伝あり。

今使う処は、

打太刀　左に大、右に小を持ち、二刀をそろえて、ともに微かなる青岸に構え膝車にて待つなり。古今ともに左足を前にするなり。

使太刀　直立ち、太刀を下段より車にさげたるばかりにて出て、真直ぐに仕かけるなり。

打太刀　二刀ともに右肩へあげて一度に、小は手裏剣に打ち、大は切る。

使太刀　一拍子に真直ぐに我が左へ開いて打つなり。すべて打ち方は前と同じ。

連也口伝書の内、「敵、脇指打つ時、とりかけ様」とは、これも前の形の通り敵の右へ仕かけ、左へ替わって打つ事をいうなり。前の形と同じ。畢竟、二つの形は「敵を一向に併せ、千里、将を殺す」という意なり。されば右へ仕かけずとも一向に併せさえすれば好し。今使うところ、その意ありと知るべし。

第七　乱剣

本云。これは左太刀なり。切り合いの内に構えかけ、裏、前、調子に従って勝つなり。中段の構えなり。

今使う処は、

使太刀　青岸に構え、文を取り待つなり。

打太刀　青岸にて文を取り来て使太刀の左拳を打つ。

使太刀　片手太刀になり、上へあげ外し、くねり打ちに手を打つ。

打太刀　取り上げる。

使太刀　その調子に付き中取りし、かぶり深く詰め、切っ先を打太刀の喉へ当てる。

打太刀　引いて脇腹を打つ。
使太刀　緩めずその手を上より抑える。
打太刀　また引いて取り上げる。
使太刀　また詰めて被り、切っ先を喉へ当てるなり。この処少しく守って被るなり。早だつときは脇腹を打つ間あり。

連也口伝書の内、「これは左太刀なり」とは、これも昔の使い方にて、変化して左太刀になる故なり。「切り合いの内に構えかけ」とは、文の内に柄をつき上げ、くねり打ちて左太刀になる事なり。「裏、前、調子に従って勝つ」とは、敵、我が左太刀の右拳を打つときは裏へ抜けて右手を勝つ。左肘を打つときは表より左拳をかけ打つなり。前とは表の事をいうなり。これ砕きの心得をいいたるなり。昔の常使う処にては、裏はすくいあげる処、前は上より勝つ処なり。

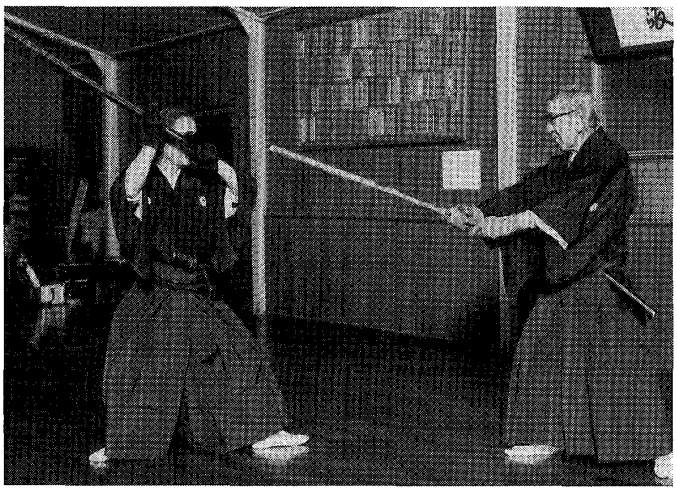
今の使い方は「半開」と同じ。くねり打ちて拍子をうけて外すこと肝要なり。外せば勝ちは心のままなり。この心持なる故、敵、表を防いで打つときは裏を勝ち、裏を防いで打つときは表を勝つ。上下左右、常なきなり。この拍子を受けて外す処、「半開」「必勝」「大詰」「八重垣」等の外す処と同じ意なり。また打ち捨てて後、敵、青岸にて守るか或いは浅く左を打つかするときは、昔の如く左太刀となりて柄中をすくいはねる。敵、また拳の下を打つときは、我れ、上より勝つ。これ昔の使い方となる砕きなり。少しく遠きときなり。またはねてそのまま一旋節に裏をも勝つ。またはねて後ちは「添截」ともなり「必勝」ともなる。また近く来る者は取りても刺す。みな敵に因ての砕きなり。また近くして、敵、取り上げるものは、今使うところの連拍子の中取りして入るものなり。味わうべし、「独往独来の位」の内に「諸種を含む」処あり。

第八　二人懸り

本云。敵二人かけて切相。近き方より勝つ。後ろと前、両方に置いて吉し。敵、一所に置いて悪し。

如流斎時代の使い方に同じ。

連也口伝書の内、初めより終りまで、形の心持をいうなり。「切相、近き方より勝つ」とは、近き敵よりまず仕かけて勝つ事なり。後の敵が近ければ、初め逆車、後、順車。また我が向きによって形の通りにもなるなり。何れ近き方より勝つなり。「後ろと前、両方に置いて吉し」とは、この形の心持にては前後の敵には好しという事なり。「敵、一所に置いて悪し」とは、一処に居る敵には、この形、悪しという事なり。されど前後の敵は近きより打って疾く突きかけ進み、後の敵を遠くすること好きなり。向うに一処に居る敵は、この形の吉には非ずと知るべし。



二の斬り（打太刀　加藤館長、使太刀　神戸先生）

「三学円の太刀」で一番大事なのは、打太刀は絶対打たれぬところで退がっていく。それに対して使太刀も絶対打たれぬところで付いていく。一本の糸を張って、その糸がたるまぬように遣う。これが兵法の一番大事なところ。連れ拍子ということ。八十七歳で亡くなる二ヶ月前のこの写真について神戸先生は、自分は年がいって膝が悪いので直立ちになっているけれども、本来は「二の斬り」でも膝をえますことが大事だと話しておられた。（加藤館長）

〔奥義の太刀〕

添截乱截

本云。これは左太刀なり。敵の働きに従って、裏、表より勝つなり。

厳曰。手もと一尺の内より敵を見るなり。

使太刀　執笛勢に立ち、手のきわ一尺の内より打太刀を見る。

打太刀　使太刀の太刀先三寸に付け、青岸高めに来たり使太刀の柄中を打つ。

使太刀　添截と打太刀の右腕に勝つ。引き取り、また始めの如く構える。

打太刀　青岸の太刀筋のまま使太刀の左肘を打つ。

使太刀　越して乱截と打太刀の両腕に勝つ。幾度も同じ。

これ手裏手裏剣の勝ちなり。「九箇」必勝勢の旨、思うべし。

変化　左手を放して一節突くことあり。また強く弾ね裏を撥う事もあり。

無二剣

本云。これは下段の構え、膝を据えて手を伸ばし、何ほども下段なり。勝ち様、条々口伝あり。

打太刀　「添截乱截」の如く構えて待つ。

使太刀　下段より打太刀の柄中指して往き、右角に転じて下がる。

単え身となり、両膝を張り左膝を屈め、少し前膝を延ばし、その順に拳を置き、太刀を出して待つ。

打太刀　拳を打つ。

使太刀　位を取り、越して勝つなり。

今使う所は、

使太刀　提げ往きて青岸に上げ、一節、右角に転じて、前述の如く構える。

打太刀　左拳を打つ。

使太刀　一節、拳を除けてもじり付け切るなり。

この時の使太刀の刃、斜め左下に向かう。

変化　裏より強く弾ね、敵刀を撥って打つなり。

活人刀

本云。これは下段の構えなり。勝ち様、条々口伝あり。

打太刀　「無二剣」の如くにして待つ。

使太刀　提げ往き、一節をなす。

打太刀　左拳を打つ。

使太刀　右に開き、打太刀の左肘、柄中へ直打するなり。

今使う所は、

使太刀　提げ往きて青岸に示して一節をなす。

打太刀　左拳を打つ。

使太刀　打太刀の左肘、柄内を右に開き直打するなり。

向上

本云。これは構えはなし、急の切り合い、何れも一調子。条々口伝あり。

打太刀　提げて待つ。

使太刀　提げ往き、一節をなし、敵の左に合して折り敷き勝つなり。

今使う所は、

打太刀　使太刀とも構えなし。

使太刀　提げ行き青岸に上げて示す。

打太刀　左拳を打つ。

使太刀　一節、打太刀の左拳をもじり付け切り折り敷くなり。

この時、使太刀の刃は右斜め下を向く。青岸に示す時、鋒、低きを好しとす。

極意

本云。これは構えはなし。「向上」にて仕かけ候調子を受け、裏より勝つなり。

厳曰く。抜け候時、後へと脇へと処によりかわる。

使太刀　提げて居る。

打太刀　また提げ来たり一節をなして、「向上」の如く順に合して打つ。

使太刀　節を合して左身に換へ、逆に合して折り敷き勝つなり。

今使う処は、

使太刀　提げ行き青岸に示す。

打太刀　右腕に打ちきたる。

使太刀　逆に合し折り敷くなり。

神妙剣

〔本云。これは向上の砕きなり〕「極意」つかい候時、その調子に乗りて裏より勝つなり。

厳曰く。「大詰」「八重垣」「左転」の外し、見合わすべし。

打太刀　提げ待つ。

使太刀　提げ来たり一拍子をかける。

打太刀　拍子を合わせ極意の如く逆に合して打つ。

使太刀　逆に合し神妙剣と勝つ。

今使う処、

使太刀・打太刀ともに提げ、

使太刀　仕かけ来たり青岸に示す。

打太刀　「極意の打ち」にて腕にきたる。

使太刀　拍子をうけ、廻刀して「神妙剣」と逆に合し、折り敷くなり。

八箇必勝　如流斎目録

前向構え上段下段二ツ、順逆雷刀二ツ、同霞車構二ツ、同車構え二つ。かくの如くなり。

二十七ヶ条急の太刀

陰（撥草）　陽（逆撥草）　向高（雷刀）

中段（順）　中段（逆）　向高中段（堅打）

車順　車逆　向高下段（堅打）

八箇　連翁目録

本云。これは敵の構えを八つに分別して吉し。

「八箇必勝」は転にして、彼我ともに常用の太刀を執るものなり。近世、「八箇必勝」を以て重複となしてこれを欠く。然れども、実はこれ新陰の原旨、「奥義太刀」の終りなり。これを以て印可の太刀とする尚ぶべきものなり。七勢ともみな玄々微妙、凡慮の及ばざる処のものなり。これを以て房成、また神妙の発露を挙げ、謹んで八箇の打ちを増補して以て伝う。

同機節を合して打つ。影の、形ちに応ずるが如し。伝にいう。我が人中を敵の人中に当て、近く我が人中路を撃つべし。また敵、千変万化、上下左右を打つといえども、しかも我れは近く我が人中路を打って敵手を落すのみ。我が流はこれを、我が節を打つ十文字勝ちというなり。

これ、わが腹を敵に与え勝つものなり。よって諺にこれを「あばら一寸」という。その義は敵刀、我があばらを切ること僅か一寸に到れば、敵〔の〕手、はや既に落つ。所謂「皮を切らせて骨を断つ」ものなり。

また節を刃の物打ちの処に執り、気は嶺を覆い、勝ちは谷にあり。敵を照らすこと明鏡の如く、進むこと流水の如し。応ずること撃石火に似たり。

前記、嶺は頭のこと、谷は拳のことをいう。

「二十七箇条截相」

長岡先師曰く「この形は重複するところ多く別に数かけて修行するに及ばず。故に伝えざるなり」と。尾張柳生は別に試合勢法をもってこれにあてたれば、その必要なしとのことなり。しかれども今の人その形を知らざれば疑いを生ず。ここに「石舟斎自筆口伝書」により解明する。〔神戸〕

この書天正七卯九月吉日

宗厳より丹下総八〔七か〕郎氏へ伝えしものなり。

倍　五

第一　敵拳吾肩同事

第二　一重身吾盾にする事

第三　こぶしにつれて身さげ手をさげる事

第四　身のかかり膝にもたする事

第五　左の肘をかがむる事悪也

切合二十七ケ条

序

上中手内つよき太刀を切る也　中に直なる太刀を切る也

一　右伝　一　左伝

上中留倍不過太刀を切る　下段小調子なる太刀切る也

一　臥(ふし)切事　一　すり巻入事

下段弓手をこうけ　中下太刀を調子無之切る

一　小詰切　切る太刀事(わざ)をきる也　一　村雲切事

上〔両を直す〕段してちぢむる　懸かり上段太刀きる也

一　くくり切事　太刀を切る也　一　こし切事

とにかく見分け難くして大調子なる太刀きる事

一　つくる調子きる事

破

一　とうほう　三ツ　一　折甲　二ツ

倍はずし切る事

一　切合　二ツ　上よりおしをと　一　とらえ引きもぐ事

す事

一　足にてふむ事

急

一　陰陽　向高　三ツ構こころもち十文字

太刀相倍一調子

一　向上中下　太刀さき十文字　三寸倍一調子

一　懸待表裏事

○十卌手裏見　心随万境転　転処実能幽

随流認得性　無喜亦無憂

天正七卯九月吉日　柳生但馬守

宗　厳　花押

剣(つるぎ)不動明王（春風館蔵）

石舟斎自筆截合二十七ヶ条

序

一　右転　上中手の内強き太刀を切るなり。
案ずるに上中とは上段と中段との間ということにて、やはり乳通りの中段なり。
手の内強きとは、打太刀、手強（てごわ）に打ち懸かるをいう。

一　左転　中に直なる太刀を切るなり。
中とは乳通りの低きをいう。続け使いは必ず少し低くなるなり。続け使うと見えたり。直なる太刀とは直ちに打つをいう。

一　臥（ふし）切事　上中留倍不過太刀を切る
これは居り敷き切なり。上中とは同上「倍」の付けなり。
深からざる処から打ち懸かるをいう。深きものは勝ち様違う故なり。
以上三本。本文に中段三つというものなり。

一　摺（すり）巻入事　下段小調子なる太刀を切るなり。
これは共に提げ出るものなり。打太刀より小調子に小さく打つを勝つものなり。

一　小詰切　下段弓手を小受け切る太刀事（わざ）を切るなり。
これは共に小詰の如く下段に構えて、打太刀より左拳を打つを、使太刀そのまま打ち止める時は、打太刀の左拳へ少し当る。それをかまわず切りかけるを「弓手を小受け切る太刀」という。二つ目の打ちを主としていうなり。

一　村雲切事　中下太刀を調子無く切る
これは打太刀、下段の少し高き処より切り懸けるを、無調子に抜け勝つをいうか、或いは「村雲」は初めに調子を取りて出れども、これは拍子を取らず直ちに変ずる故に、調子無くというか不詳。以上三本、本文に下段三つというものなり。

一　括（くくり）切事　上段して縮み過ぎる太刀を切るなり。
括切とは、くねり打ちのことなるべし。縮み過ぎる太刀にはくねり打ちにするが、伸びて打ち易き故なり。

一　越切事　懸かり上段太刀切るなり。
上段にて懸かり打つを越し乗るものなり。雷刀にて懸かり打つも同じ。懸かり打たざるものは越し乗り難し。故に懸かり上段という。

一　付ける調子切事　とにかく見分（みわ）け難くして大調子なる太刀切るなり。
これは和ト勝ちなり。大調子なる太刀は、中にて替わる事あり。よって「見分け難し」。付ける拍子は、能く観受して水月を越し易き事ある故なり。以上三本「上段三つ」というものなり。
以上序の太刀九本なり。

破

一　刀捧　三つ
本文は折甲が前なり。この書は前後しているなり。
刀捧とは打太刀のことをいうなり。
三つは一、浮舟切　二、下段刀捧順　三、同逆

一　折甲　二つ
この折甲も打太刀を指していうなり。二つは一、浦波切　二、月影切

一　切合　二つ　倍迦（はずし）切る事、倍は付けるなり。上より押し落す事

一　捉え引き捥（も）〔挺を直す〕ぐ事

一　足にて踏む事

急

一　陰　陽　向高　三つ構え　心持十文字、太刀相倍一調子事
陰とは順に打つものをいう。撥草の順構〔備を直す〕なり。

陽とは逆に打つものをいう。撥草の逆なり。
向高とは向上にて堅に打つをいう。雷刀なり。
三つの構えに向っての手の内を十文字に勝つ心持なり。太刀を合せ「打ち付ける事は一調子なり」ということなり。

一　向、上中下　太刀先十文字三寸倍一調子の事
これは向の上中下という事なり。向うより上中下に構えて上中下を打ち来るとも、我れはただ太刀先三寸を以て敵の柄中三寸へ十文字に打ち付ける事、一調子なりという事なり。

一　懸待　表裏の事
○十𦍒手裏見　心は万境に随って転ず。転ずる処実に能く幽なり。
流に随って性を認得すれば、喜もなく亦憂も無し。
これは敵、懸かり来るとも、待っていて打つとも、表より打つとも、裏より打つとも、我れはただ真直ぐに打つばかりなりという事なり。十字手裏見云々は、截合書に詳かにする。ここには省略する。拳を見よという事なり。
以上、急の太刀上中下九本、使太刀はただ直に打つばかり故、その心持をいいたるなり。また本文に、右急は構えに付けて一調子という。これは、ほかは越す拍子も付ける拍子もあれども、急の太刀は一拍子ばかりなりという事なり。
案ずるに、本文に上段三つ、中段三つ、下段三つ、折甲二つ、刀捧三つ、切合四つばかりとあるは、上段に向う勝ち口が三つ、中段に向う勝ち口が三つ、下段に向う勝ち口が三つ、折甲に向う勝ち口が二つ、刀捧に向う勝ち口が三つという事にて、上段三つ、次に中段三つ、その次に下段三つばかりと次第していう事には非ずと知るべし。

〔石舟斎の自筆書に因る説明――表題は『月の抄と尾張柳生』による〕

序

中段三
一、右転　使太刀・打太刀とも中段。打太刀来たりて使太刀の右の手を打つ。或いは順に手強く太刀かけ打ちもする。使太刀、下へ抜けて「右旋」（打太刀の右へ廻り、使太刀右旋）、「村雲」「猿廻」等の如く、打太刀の右手へ逆に拳を立て「右転」と勝って、そのまま少し引く。
二、左転　打太刀、裏の左手を打つ。使太刀、「三学」の昔の使い方、「左転」と浅く打太刀の左拳を勝つなり。
三、臥切　打使ともに中段。打太刀来りて浅く首を打つ。使太刀、後ろの足引いて居り敷き、打太刀の手を勝つなり。順逆、時に従う。

下段三
一、摺巻（切）入
共に下段。打太刀、小調子に少さく右拳を打つ。使太刀、相架かるが如く抜けて、逆に打太刀の右手を打つなり。昔の「斬釘」の直に抜けて勝つに似たり。また今使う「右旋」「村雲」等なり。打の意にして打ち付け突くなり。直に抜ける。左足を踏み出し左肩を出すを以て、太刀自から左肩に取り〔移りを直す〕あげられ、それより勝つもの、一旋打とは異なるもの。
二、小詰切
小詰切は共に下段（今使う「小詰」を使って好し）。打太刀、左拳を打つ。使太刀そのまま打ち止む。打太刀また打つ。使太刀また浅く拳へ打ち付け、足を継いで進み突くなり。「鳥飛」の如し。
三、村雲切　共に下段。拍子を取らず、今使う「村雲」の如く使う。

上段三

一、括切は上段なり。半開のくねり打ちを使うものなり。今案ずるに、この三本、続け使うも好し。常に使い居る故、続かずば、はなはだ重複す。続けて使う時は上段一、括切より、下段二、村雲切、三、小詰切と逆に使うべし。

続け使い方　打太刀、来たりて左拳を打つ。使太刀、「半開」のくねり打ちに外して両手を打ち落し下段となる。

(二)、村雲切　打太刀上段にて使太刀の逆の下段の拳を打つ。使太刀、昔の「村雲」の打ちの如く、抜けて順に敵の右手を打つなり。

(三)、小詰切　それより続けて、打太刀、左拳を打つ。使太刀、そのまま打ちとめて進む。打太刀、また打つ。使太刀、また打ち付けて進むなり。「天狗抄」の「鳥飛」の如し。

(別の書きかた)

使打ともに「半開」の構えにして少し高し。上段なり。打太刀、来たりて左拳を打つ。使太刀、「半開」のくねり打ちに外して両手を打ち落し下段となる。

(二)、打太刀、拳を打つ。使太刀、昔の「村雲」の打の如く抜けて敵の右手を打つ。これ村雲切なり。かくの如く続けたる時は「天狗抄」の両手切と成るなり。

(三)、それより続けて、打太刀、左拳を打つ。使太刀、そのまま打ち止めて進む。打太刀、また打つ。使太刀、また止めて進むなり。「天狗抄」の「鳥飛」の如し。これ小詰切なり。

二、越切

共に上段。真直ぐ、または僅(わず)か青岸。打太刀、太刀を懸けて拳を縦の斜に順に打つ。使太刀、「和卜」を越す調子に使う如く、浅く(半被りに取り揚げ打つ)越し乗り勝つなり。

三、付調子切

共に上段。打太刀、大調子に大きくやや深く首へ打ち来たる。使太刀、「和卜」の付ける拍子に勝つなり。前の越切とこの形は、ただ浅深の違いばかりなり。

以上序の太刀。本文の如く上段三ツ、中段三ツ、下段三ツなり。

破

折甲二ツ

一、浦波切　ともに中段。打太刀、魔の太刀にて拳を打つ。使太刀、右足を引きて順の撥草に上げ外す。打太刀、逆の折甲にかぶり撥草を防ぎ入る。使太刀、我が右に(打の左裏)替わって打太刀の手の内を打つなり。全く「浦波」なり。しかし初めの打ちはなし。

二、月影切　前の如く中段。打太刀、魔の太刀を仕かける。使太刀、引き上げ外して霞の太刀となる。打太刀、折甲に取り入る。使太刀、引き打ちに折甲の拳を打ちながら居り敷くなり。

刀捧　三ツ

一、浮舟切　前の如く中段。打太刀、魔の太刀を仕かける。使太刀、引き上げ外して霞の太刀となる。打太刀、刀捧に取り入らんとす。使太刀、刀捧の中取りの手の上を打って、またキョッテチャウンと打ち、下より敵の右の手を弾ねるが如くしてもじる。打太刀、両手をかけ撥草に取り打つ。使太刀、魔の太刀にて合し勝つ。全く「浮舟」なり。

二、下段刀捧(順)　打太刀、「捷径」の如く刀捧の下段で疾く進み詰める。使太刀、下段で出て、少しく敵の右により、刀捧の先き手を順に切り落すなり(喰い違いの太刀筋なり)。これ逆に太刀先を打つこと、敵によってあり。

三、逆勢　順に同じ。しかし敵の左によるなり。これもまた敵によって順に太刀先を打つことあり。

すべて形は皆、一隅を挙げて三隅を弁えせしむるものと知るべし。

切合四ツ

一、付け外し切　共に上段にして、打太刀、三寸の付けより順に強く太刀を摺り込み、眉廂下を突き来たる。使太刀、裏へ抜け外し、右拳を打ちながら突くなり。

二、上より押し落し切　共に上段。打太刀、三寸に付けてより疾く突き来たる。使太刀、上より敵刀を下へ押し落し拳を打ち勝つなり。

三、捉え引き捥ぐ勢　共に中段。打太刀、魔の太刀を仕かける。使太刀、撥草に引き上げ外す。打太刀、刀捧に取り、少し左手を防いで深く入り突き倒さんとす。使太刀、刀捧の先手の上を足を引いて必至と打つ。打太刀、左の四指を刀背にかける。使太刀、身を疾く沈めて左手にて敵の柄先を下よりすくい取り押し上げ、我が左に転じて敵刀を捥ぎ取る。我が太刀は自ずから敵の手の内をもじり切り、下へ引き取りて突くなり。これ身を沈めしより一拍子なり。

四、足にて踏む勢　共に上段にして出で、打太刀、三寸の付けより使太刀の刀を順にすくい上げ、深く飛び入り居り敷き、漆膠〔膠漆を直す〕の身となって発伝〔鎧の胴尻〕の下を突かんとす。使太刀、右足を引き敵の太刀先を逆に我が身に近く敵鋒を撥って、敵刀の未だ下らざるところを胸或いは面を踏み倒し分れ、眉廂下を突くなり。

また初め、敵、早く刀を引き下げ刀捧に取り、詰めて居り敷き突かんとするものは、我れ、右足を引き敵の太刀先を逆に撥って突くなり。

これ前の下段刀捧を打つ変勢なるものなり。

以上「破の太刀」、本文の如く折甲二つ、刀捧三つ、切合四つなるものなり。この「破の太刀」は常に異なる変のみ示すものなりと知るべし。

急

陰　陽　向高

上段三

一、陰　打太刀、順の撥草にて出て、使太刀、提げて出る。打太刀、肩を打ち来たる。使太刀、真直ぐにその拳を打つ。一調子なり。

二、陽　打太刀、撥草の逆に出て打つ。使太刀、前の如し。

三、向高　打太刀、雷刀にして来て首を打つ。使太刀、我が右へ替わって拳を打つ。これ我が方の転の替わって打つものなり。

以上本文に上段三つというものなり。

中段三

一、打太刀、中段〔に〕取り上げ順に腹へ打ち来たる。使太刀、前の上段の如くする。

二、逆に打ち来たるものもまた同じ。

三、堅に打ち来たるものは合し乗り打ち勝つなり。あるいは我が右へ替わって拳へ勝つ。

以上本文に中段三つというものなり。

下段三

打太刀下段。三勢ともに中段に同じ。

以上本文に下段三つというものなり。

右、急の太刀、都合九本、全く転にして一拍子に勝つものなり。もっとも位・積り・拍子肝要なり。

〔神戸金七編『柳生の芸能』本伝　終〕